
魔王な義父と勇者なアイツ

一色彩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王な義父と勇者なアイツ

【Zコード】

Z3251Z

【作者名】

一色彩

【あらすじ】

魔王の義父を持つ、自称魔族の少女 フィーリア。魔王の最後の頼みにより、勇者はフィーリアを人間界に戻すと約束をしたが……？

魔族と人間の、決して交わる事のない心。じりじりと迫るような二人の恋模様を描いた、ラブファンタジーです。少女視点になります。

それなりの短編にする予定、にするつもりがなにげに長編になつていた代物。

勇者と魔王。それは、多分どんな世界でも……この間柄の意味を理解しているのではないだろうか。

魔王は人間を滅ぼし、絶望を与える。勇者は人間を救い、幸せを与える。魔王は悪で、勇者は正義。それが……世界の、“理”。

でも、あたしには理解出来ない。魔王……魔族だけじゃない、勇者だって、人間だって魔族を殺す。それなら勇者は悪で、魔王は正義にもなるはずだ。なのに……どうして？ どうして、魔族が滅ぼされなければいけないの？

魔族が、人間より強い力を持っているから？ 魔族が、人間と違う見た目だから？

ねえ 本当の悪は、どっちなの？

シャンティアが輝く、とても広いこの部屋。王座の間とも言われるこの場所で、あたしと父上、勇者、そしてその御一行が、

睨み合いながらそこにはいた。

血だらけになつて、床に倒れこんでいる父上。ボロボロになりながらも、剣の切つ先を悠然と向ける勇者。……あたしはその間に立ち、父上を庇うようにして震えていた。

「退け、フィーリア！」

父上の、今にも死にそつた掠れた声。

「退かない……！ 絶対つ……絶対嫌よ……！」

あたしは震えたまま、父上に逆らう返事を返した。……だつて、ここを退いたら、父上は死んでしまうんでしょう？ 血の繋がらない、しかも人間のあたしを……本当の娘のように育ててくれた人なのに みすみす目の前で殺せろって？

できるわけがない。……できるわけが、ないつ！

あたしは魔族。父上 魔王の娘で、それ以上でもそれ以下でもない！

「あ……あたしの名前は、フィーリア・エンジエル・マールヴォロ・オコナムカ。勇者、あたしと勝負よ！ 絶対に父上には触れさせないわ！！」

「退くんだフィーリア！」

「つ いくら父上の頼みでも、聞けないわ……！ さあ勇者！ 父上を殺したくば、あたしに勝つてからにしなさい！！」

「……いいだろ？ 女だらつと、手加減は一切しない

「つ……！ 止めろ 話を聞け、フィーリア！…」

一触即発。

それぞれがそれぞれに対して、そんな感じなのだろう。

「めんなさい父上 でもあたしは、絶対引けないの。勇者があ

らわれ、魔王退治の旅に出かけたと情報があったあの時から あたしの覚悟は決まっていたんだから。あたしは父上に恩返しをしなくちゃならなー……うう、恩返しをしたい。

だからあたしは命をかけて戦うし、死んで構わないとも思つてゐ。これもすべて、愛する父上のため 絶対やられやしない。

あたしと勇者は、睨み合つた。あたしよりも遙かに高い勇者は、こちらを見下ろすようにして……上から下まで見定めていた。対するあたしも、勇者を見上げるよつにして、その風貌を観察する。

何もかもが、父上と正反対だつた。白銀の髪、髪型はショートカット、キツネのような細くて鋭い真つ青な瞳……。見れば見るほど、整つてゐると痛感するその顔は。あたしが惹かれる要素が何一つとしてなかつた。

あたしは父上のような、闇のよつて真つ暗で、艶やかな長い黒髪が好き。あたしは父上のような、血のよつて真つ赤で、タレ田の暖かなまなざしが好き。

全部、全部、違う。

嫌いだ……とてもなくじつが、嫌い。

「つ 勇者。お前は言つたな、人間のために自分は生き、魔族を滅ぼすのだと」

「そうだ。だから俺は、倒しに来た……お前を」

「今の言葉 偽りはなかろうな。なら……我が娘は、守るべき対象に入るわけだ」

目を見開く勇者と、その一行。

「我が娘に、私の血は混ざつておらん。もちろん魔族とも」

「 人間、だと？ この人並外れた魔力を、惜しげにもせずだだ漏れさせている……この娘が」

勇者が、あたしを見ながらそう言った。あたしは威嚇をするように、重たい魔力をゾロゾロと……さらに溢れさせる。

「……」やつの本当の母は、異世界人だ

「まさか……」

「そう。異世界人は魔力を必要とせず魔法を扱う それは漂う魔力を扱うからだ。そしてその娘は、同じように魔力は一切なかつたが……育つにつれて、魔力を己に溜めていった。魔力の溢れるこ_こ魔界で過ごしていれば、この量になるのは当然のこと」

その証拠に、我が娘の瞳は黒かるう？ 父上はそう言って、顔だけ振り向いたあたしを見ては、ほほ笑んだ。

……父上は、この瞳をいつも褒めてくれたよね。あたしはルビイのよう_に輝く、父上の真つ赤な瞳が羨ましかつたけど 父上は私の瞳を、「黒曜石のよう_に輝いてとても綺麗だ」と褒めてくれた。だから……誇りだったんだ、とても。

そして……逆に、父上との繋がりはないと証明してしまう、憎いもの。

「勇者 娘を人の世界に、戻してはもらえないだろ？」

「父上！？」

「ア承してくれるならば、私は喜んで死を受け入れよう もちろん私の命は、他の者に殺させるが。それくらいの意地は、通るだろ？？」

父上が何を言つてゐるのか、全く理解出来なかつた。あたしは愕然として、ただひたすら固まる。

人の世界？ 日々のほほんとして、同族同士で殺し合いをするような、馬鹿な集まりの場所へ行つて あたしに住めといふのか。……何を、考へてるの？ それであたしが……………幸せに過ぎせるとでも？

私はか細い声で、何回も繰り返すよつに呟く。

「いやよ……絶対……いや……」

「 勇者、頼まれてくれるか？」

「…………約束しよつ」

パニックになつたあたしは、間近に立つ勇者さえも忘れ、父上にあらんかぎりの大声で言い放つ。

「つ、勝手に話を決めないで！ 言つたでしょーーー？ あたしは魔族よ、父上！ 誰がこいつらみたいな愚かな人間の住む地にーーー！」

その時、「フイーリイ」……と、父上があたしを愛称で呼んだ。あたしは未だに流れる涙を拭い、父上を見る。

「フイーリイ、私の愛しい娘」

「……ちち、うえ」

「よくお聞き、フイーリイ。お前の母は……異世界から来て、人間の世界で上流貴族と結婚をしたんだ。彼女と私は、言わば悪友……だが私は、彼女に心底惚れていたんだ」

母の話を聞くのは、久し振りだった。あたしは黙つたまま、耳を傾ける。

「彼女が人間と結婚したのが、憎らしかった。相手も、彼女も」

「……父上？」

「私はね、どうしても欲しかったんだ。彼女が。……だから、殺したんだよ」

殺した、そう言い放つ言葉は……とてもなく重たく感じた。今まで聞いていた、そんな状況のそれより、一番重く、辛い。

「……しかし、殺したあとで気付いたんだ。無防備に泣く、お前の存在に」

「！」

「愛しいあの人の子供。しかし、世界一憎い男の子供でもある。……葛藤した、すげく」

「いやだ……聞きたく、ない……」

「だが私は、殺さなかつた。我が娘として育てようと、誓つたのだ。
……私が言いたい事が、わかるな？ フィーリイ」

あたしは、咄嗟に耳を塞いだ。

父上の、言いたい事。それは……魔族の“掟”についてだ。
魔族にとつて、掟がすべてであり、すべては掟。縛られているとも
言えるが、魔族全員が、それを誇りに思つてゐる。

魔族の掟 それは、憎しみだけで人間を殺さない事。人間を殺
していいのは、自分の血族、親しいものが辱められ、暴行、または
命を落としてしまつた場合のみなのである。

そして、もう一つ重要な掟が、一つある。親、または兄弟が
殺された場合……絶対に犯人を見つけだし、殺さねば……なら
ない……。

「……」

「フィーリイ……私の天使。お前は自分が魔族だと言つた。なら
ば、やることはわかつてゐるね？」

「で、でも……！」

「見せておくれ、お前の“魔族”としての……最後を」

「……ヒドいよ、父上は。どちらみち、あたしを人間の住む世界に放り投げようとしてるもの。」

「でもね……父上？　あたし、いつもも言つたのよ。」

“絶対に引けないの”つて　！

「嘘よ」

「……」

「父上ほど捷を尊重し、守る人を……あたしは知らない。そんな父上が、たがが憎しみというくだらない感情だけで、人間を殺したりするはずがないわ。だって、捷では憎しみだけで殺してはいけないって」

「憎しみとは、簡単に制御できるものではない……そういうことだよ、フイーリイ」

「違う　違う違う、違うつーーー下手な嘘をつかないで……」
“いたい何年、父上と一緒にいると思つてゐのーーー”

父上の吐く嘘くりい、あたしにだつて見破れるのよ？ だつてあ
たしは……父上の娘なんだから。

「……愛しい娘には、敵はないね」

「！ じゃあやつぱり……！」

「しかし。お前の父のほうを殺したのは、紛れもない事実だよ。
……お前の母はね、殺されたんだよ」

お前の父親にね。

その言葉があたしの頭に浸透するまで、いつたいどれだけ時間が
掛かつた事だろう。……あたしの本当の父が、母を、殺した？ 何
故？ どうして？ 意味が……わからないよ。

呆然とするあたしに、父上は続けて言つた。

「　彼女と俺は、紛れもなく愛し合っていた」

「！」

「だが、彼女は異世界人。人間の敵である魔王と結ばれるなど、言語道断だつた」

「……そん、な……こと」

「彼女に 選択の余地はなかつた。苦渋の末にその上流貴族と結婚し、子供を生んだんだ。そう、お前だよ」

……ああ、頭がパンクしそうだ。

「しかし旦那は、それに気付いていた。彼もまた彼女を愛し、またかなり嫉妬深い男で　」

「それで、母さんを……殺したの？」

「……そうだ」

そして母が死んだと知った父上は、怒りに狂つた。母を守れなかつた苦しみや、たとえ人間と魔族でも構わないと言えなかつた後悔、すべてが交ざり合つて……。

気付いた時には、その手をあたしの父の血で染めていた。

「捷はたしかに守つてはいる。だから私に、間違いなどない」

「……」

「愛しい娘、私の天使。……お前はどちらの選択をとる？ フィーリイお前は……魔族か、否か」

魔族か……、人間、か。もう父上は、嘘を吐いていないだろう。

あたしが自分を、魔族だと思うなら。それは親を殺された場合、犯人を見つけだし、殺さねばならない。そう、人間でも、たとえ同族でも。つまりあたしは、父上を……“殺さなくてはならぬい”。

……それが、出来ないならば……。あたしは自分を、人間だと、認めなければならなくなる。

「父上……あたしは……」

「フイーリイ。愛しい愛しい、私のたつた一つの宝物」

あたしは父上の、美しい血の瞳を見た。

「お前の父を殺したあと、泣きわめく小さな存在に気付いてとても後悔した。愛しい人の大切な子の、唯一の親を殺してしまつたから、強い罪悪感に苛まれたんだ。その赤ん坊は悲しみにくれ、泣いているようにみえた」

「……」

「しかし、その子は私が抱き上げた途端……ピッタリ泣きやんだ。あらうことか、笑つたんだよ」

「え……？」

「希望の光が見えた気がした」

その時の事を思い出したのか、父上の表情には、小さなものを慈しむ……暖かな安心感があった。

「お前だよ、フイーリイ

「！」

「私は決めた。愛する彼女の子を、幸せに過ごさせてやるつと。それが私に出来る唯一の罪滅ぼしだから。フイーリイ、私の宝物。お前は時を重ねる」と、本当に彼女に似ていいく……しかしその髪だけは、父のものまま

あたしはまた、気付いてしまった。父上が　なにを言おうとしているのかを。だから……やめて、それ以上は……言わないでよ、父上……！

「　聰明なお前の事だ。わかっているね？」

「……魔王の血には、膨大な魔力と力が、備わっていて……。それを飲むと、その者は……それを受け継ぐと同時に、魔王の體であ

る黒い髪になる」

「 さう。私の血を飲めば、髪は闇のよつに真つ黒になつてしまつ。…… フィーリイ、残り少ない後生の頼みだ」

父上の赤い瞳に あたしが映る。

「お前は私の子、その証明を……私にくれないだろ？」「

「で でも、そんなことをしたら……父上は」

「ああ。死ぬだろ？」「

「つー。」

フィーリイ。

父上の、弱々しい歎く声。命がもう僅かだとこゝのが見て、取れた。

「愛しい愛しい、私の娘」

「……」

「私はお前と過ごせて……とても幸せに満ち溢れていた。本当の我が子を授かったかのようで、毎日が光り輝いていたよ。毎日をお前と過ごし、毎日を笑顔でいさせてくれた。それは私にとつてかけがえのないもので、もうこれ以上の幸せはない」とさえ思った

「い、いや……いやだつ……父上……！」

「頼む……これからもお前が、私の子だと……思わせてくれないだろ？ 私はお前の フィーリアの父親だと」

選択肢は、なかつた。

ああ、父上。あたしは本当に貴方が好きでした。なによりも誇り高く……自慢の父でした。あたしは貴方以上の良い父親を、知りません……父上のおかげでとても幸せに育ちました。

あたしが魔法を使って初めて料理した時、喜びながら食べてくれましたよね？ あたしが友達と喧嘩をして、落ち込んでいた時……一日中慰めてくれました。

父上、ああ、父上。あたしも欲しいです……父上の娘だといふ、たしかな証明が。

「…………おとひべ わざ」

「…………フイーリィ」

「おとひわざん…………大好きだよ…………おとひわざい…………」

あたしは床にぺたりと座り込み、父上に抱き付いた。

「あたしはおとひわざの子…………あたしは魔族よ。今までも、これ
からも」

「…………ああ」

「私は…………おとひわざの、娘だから…………」

「ひ…………ああ」

「ひ、…………ひく…………ひや、よひ、なひ…………愛しこ愛しこ
…………おとひわざ」

あたしは。

すでに、血を大量に流している父上の血を……すべて吸い上げた。
ぐくり、ぐくりと、喉を鳴らしながら。

「ああ。私の……愛しい……娘」

父上の手が、あたしの髪に触れる。その髪は 長年憧れ続けた、
父上と同じ色だった。

「……幸せに……生きて、くれ……」

そして、父上は。

闇に溶けるようにして、父上は……その形を失つていった。

カラリと肩から流れる、あたしの髪。艶のある真っ黒な、あたし

の大好きな色。 父上の、娘だとこつ證明。

「うう……く……ー」

「……行こう、時期この魔界も……」

「う……あ……ああつー」

闇夜に浮かぶ丸い月。その日、あたしは父上を殺した。あたしは、正真正銘の魔族になれた……嬉しさで、はち切れそうだ。でも……どうして?

「ひっく……ひっく……おとつかあん……ー」

「うう……こんなへ元くるしいの?」

あたしの名前は、
フィーリア・エンジェル・マールヴォロ・オコ
ナムカ。

あたしは競負う。

フィーリア 母の付けてくれた名を。

エンジエル 父上の付けてくれた名を。

マルヴォロ 王の証を。

オーナムカ 悪魔の子だといふ 証明を

あたしは一生背負い続けて、これからを生きていく。
世界で。

「 うあああああん！ うひひあああん！ わああああん
！」

ひつじて、魔界の夜はふけていく。

タイトルに魔王と書いてあるにも関わらず、速攻死ぬ父上(笑)
マジでめんなさい。

IIIIから少し明るくなつて来ると思します。

シリーズのがまだまだ多いでしょうが、頑張つて笑い要素も挟んでこいつと思いますので、よろしくお願ひします。

人間界のとある宿舎。

勇者率いる四人の男女含むあたしは、同じ部屋でのんびりとくつろいでいた。……精神的には、まったく寛げとはいえないけれど。

「勇者あ、ね～え～、ちよいじとでここのもー、トートトに行きましょい？」

「断る」

「んもう冷たいんだからあー、でもそんな感じが堪らないのよねえ」

「すり寄るな」

お色気ムンムンの姉ちゃんを、ペーイッ！ と投げる勇者。女は、わざわざ「よよよ」と泣いていた。……楽しそうで、なによつ

である。

あれから、あたしは勇者御一行に連れられて、約束通り人間界へ来ていた。向かう先は、勇者の故郷でありこの世界一番の国であり、勇者御一行に魔王退治を命じた王様のいる　パリシュという国。

あたしはこの数日間、この人間どもとはまともな会話をしていない。……というか、する気になれない。向こうもその意図をくんでくれているのか、執拗には話をかけてこなくなつた。

……一人を除き。

「　それでなんと！　その時勇者が颯爽と現れて、言ったのよ！　“俺は人間だ。お前らまじょくに味方する疑問はない”って！　笑っちゃうわよねえ、”まじょく”って！　真剣な顔して噛むんだもの、私大爆笑しちゃつた」

……この、勇者が目前にいるにも関わらず、赤裸々すぎる笑いネタを話し文字通り大爆笑をする少女。勇者御一行のメンバー、勇者の幼馴染みで女剣士でもある、マリンベール・デルバルドだ。

パリシュの国の間近にある、デルバルド孤児院……彼女はそこで育つたらしい。もちろんこれはすべて、自分が勝手に話した内容。

あたしは何一つ聞いてないし、むしろ反応すらしていない。

……なのに。彼女はしつこすぎるくらい、懸命に話をかけてくる。以前「関わるな」と言ったにもかかわらず、彼女は笑うだけで変わらぬの状況にある。

溜め息がでそうだ。

「あつ、もううう。それでね~」

「……おこ」

「そのあと勇者つたら、自分が間違えたくせに逆切れして~」

「……おい」

「なんと風の魔法で町を全滅しかけたのよ~！ 大変だったわあ

「おじつて」

あたしは、話をまったく聞かないマコンベールに、声を掛けた。

「……はなんなんだ、アレか？ ただの話好きなのか？ 相手が反応してくれなくとも、自分が話せれば良いという人種か？ ……

勘弁してくれ。

とにかくもう一度抗議をしてみようと試み、「前にも言つたが……と言いかけた。しかしそれは、彼女の腹いっぴの声量により、無残にもかき消される。

「え？ わつ、珍しい！ 口を聞いてくれたわ！！ みんな～！ フィーリアちゃんが喋つてくれたよ～！」

そんなマリンベールの言葉に、この部屋にいる全員が振り向いた。……あたしは見せ物か？ 少し泣いてもいいか、これ。まあ人間なんかの前ではもう泣くつもりはないのだが。

しかし、これはいい機会だ。だからあたしは、全員に向かつて言った。

「父上が約束させたのは、あたしに人間界へ行くようにしてほしいと言つただけだ。だからあたしは、もう別行動をとる」

「……あーらあ、随分勝手な小娘なのねえ。つまらないのは顔だけにしなさいな、お嬢ちゃん」

はあ……出たよ、このいかにもなキャラクターの女。

「こつは、先ほどから漁者に媚びを売つていて、お色気マンマンの踊り子だ。たしか名前は……ジュー・クリアウオーターとか言つたか。

クソ生意気な人間だ、あたしの一番嫌いなタイプである。見ただけで分かる……こつは忠誠心でここにいるわけではなく、ただ勇者が好きだから付いて来ているのだ。

……吐き気がするな。

あたしはお返しのため、虫酸の走る女を睨みながら……「ヤリと笑つて言つた。

「お前も、冗談は胸だけにすんるだな。……そこに魔力なんか詰めて、なんのギャグだ？ オバサン」

それを言つた瞬間、オバサン ジュエリー・クリアウォーターが青ざめた。多分、バレてはいないと思っていたのだろう。……馬鹿にするのも程々にしてほしいものだ、そんな明らかに魔力が見えている胸をさらけ出すなんて。魔族では、最高級の恥だぞ……そんなものは。

こいつが魔族じゃなくて、心からホッとする。

「貴女……！　“観た”のね！？」

「……観た？　それは人間の使う分析の魔法のことか？　あたしがそんなものを使わないとわからないほど、低レベルだと思ったのか……オバサン」

……たしかにあたしは人間で、魔族ではないのかもしれない。でもあたしは魔界で過ごして、日々鍛練に明け暮れた。とくに魔法に関する事は、人間の誰よりも、父上よりも知識や技術は高い。

この、ジュエリー・クリアウォーターとかいう女。ただ普通にしているだけで、所々偽装しているのが丸分かりなのだ。とくにあの哀れな胸。……哀れすぎてなにも言えない。

その時、突如誰かがあたしとオバサンの間に、割り込む。
「勇者だ。」

勇者はジュエリー・クリアウォーターを庇いながら、あたしを見て言った。

「俺の仲間を愚弄するな」

「先にあたしを愚弄したのはどっちだ」

「……魔族の、『やられたらやり返す』、か？」

「ああ。身体は人間でも、あたしは心の隅から隅まで“魔族”だからな」

クツ、と。

皮肉げに笑う。

「……だが、お前の父は人間に戻れと言った」

「違ひ」

「魔族であることは許されない」

「…………」

「…………お前は、人間だ。フイーリイ」

「あたしを…………フイーリイと呼ぶな！！」

「…………そう呼んでいいのは、父上と、仲のいい魔族だけ…………！…………たかが人間」ときに呼ばれるなど、許されていいことじゃない！…………虫酸が走る、気持ち悪い。

「あたしは魔王の娘で、魔族だ！…………この、魔族殺しが！！」

「…………」

「あたしは一人で生きる。お前人間に世話をされて、家畜同然になるならば…………死んだほうがマシだつ！……」

あたしは飛び出した。追いつかれないように、姿隠しの魔法をかけて。

……ムカつく。あのすましたような表情が。人の父親を窮地に追い込んでおきながら、あの態度！ ああ、腹が立つしちゃうがない！！

「フイーリアちゃんっ！ 待ってください！」

マリンベールの止めるような声すら、完全に無視して走る。……もう、放つておいてくれ。こんな地獄みたいなこと あたしには、耐えられないんだ。

頼むからもう、一人にさせてくれ。

「なんでっ あたしは」

走りながら、独り言を呟く。

「あたしは……！ びひじひ……」

なんで。

なんで、魔族じゃないの……？

「ひ……父上えつ……」

息が枯れるまで、あたしは永遠と走り続けるのだった。

走り続けて、小一時間経つただろうか。人気のない森の中、ちょうどいい所に湖があったので、あたしは休憩とばかりにそこで水を飲んでいた。

ヒリヒリして痛む喉を押さえながら、一人ごちる。

「……はあ

父上、何故あたしを、人間界に戻すと言つたの？ あたしが、耐えられるはずがないと、わかつていながら。……ヒドいよ、生きてくれ、なんて。

馴染めるはずがないとわかつて、どうしてそんなことを。

「……父上……」

湖に映る、自分を垣間見る。……母から譲り受けた黒い瞳、父上から受け継いだ黒い髪。まるで本物の異世界人だ。

太陽の光を綺麗に反射するその湖を見つめながら、あたしは人知れず溜め息を吐いた。

「どうしたらいこと……言ひださつ」

あたしは魔族で、でも人間で。絶対相容れる事のない存在の間に、あたしはいる。どうやって生きればいい？

「……はあ」

「」へ来て二度目の溜め息を吐いた時、それは唐突に現れた。

湖からひょっこり現れる、水色の小さな物体。……水の精霊か。久し振りに見たな。

「あれれ？ 貴女は魔王様の箱入り娘さん。あ、この度は魔王様がご臨終なされたとかで……お悔やみ申上げますな」

「……どうも」

「にしても何故人間界に？たしかに貴女様も人間ではありますけど、あれほどお嫌いでいらっしゃったはずでは？」

「……深い事情が、あつて」

「そうですか。それはそれは大変でござりますねえ。お悔やみ申上げますなの」

……、深くは言つまい。精靈とは、皆「のよつた感じ」なのだから。精靈に悪意はなく、感情を左右される事は全くない。

多少抜けていると思えば、見方は可愛くなるだらう。私はそう解釈をして、折り合いをつけている。

「ああ、そうそう。先ほど勇者一行が近くの町で、人を探しておりました。黒髪に黒い瞳だそうで、

「……へえ」

「どうやらまた異世界人が紛れ込んだ」様子ですねえ。そう言えば姫のお母様も異世界人だとか

「……ええ、まあ。あまり話は聞いた事ないですが」

「いやはや、今年の異世界人はどんな伝説を作ってくれるのでしょうね……楽しみです。あれれ？ さつまえぱ姫、髪をお染めになつたのですか。まるで異世界人のようですね」

「……。父上の申付けで、勇者に倒される前に、私の血を吸え……と

「はあん、なるほど。それで魔王様の力と色をお引き継がれ」

……もう一度言おう。深くは言つまご。もちろんあたしも、ツツ口ミたい気持ちはわかる。が、精霊全般はこんな感じなのだ。むしろツツ口ミを入れたら負け。絶対夜が明ける。ナイトパレードだ。

所々抜けていて、時に驚くほどに察しがいい。読めない、と言えばわかるのだろうか……精霊は難しい性格なのだ。

「わて、私はそろそろお昼寝の時間ですね。姫もこ一緒に？」

「……いえ

「そうですか、残念ですね。それでは最後に 水の加護が姫を守りますよつこ」

あたしは一礼をする。

これは、去り際の精霊の、決まり文句だ。意味がないわけではない……これをされたあとは、なにかと良い事はおきたりする。だから敬意を称して、お辞儀をするのが礼儀なのである。

水の精霊は、再び湖に潜り込んでいった。言っていたように、お昼寝をするためだろ？……お誘いを断つた理由はこれである。

さすがに、水の中で眠る事はできませんから。永眠はできるけど。

あたしは立ち上がった。

さあ、勇者達に見つかってしまう前に、ここから離れなくては。姿隠しをしているとはいっても限らない。向こうも一人ぐらい精霊と話せる奴がいるだろうし、ここに来たと話が伝わってしまう……それだけは避けなければ。

そう思つて、町と反対方向へ進もうとしたあたしは……小さな異変にふと気付く。

……誰かに見られている、といつこと。

「……」

あたしは立ち止まり、気配を伺つた。……この気配は、まだ子供だな。男の子だが、人間……ではない、か？ もしかしたら、ハーフかもしれない。

あたしは気配のあつたほうの茂みに、視線を向ける。そして、一言。

「誰だ」

「つえ……あつー」

バレた事に驚いたのだろう。小さな少年は、勢いあまって躊躇、顔面から地に衝突した。

……ふむ、ドジっ子属性とみた。なかなかいい位置にいるではないか。

あたしは少年の元へ行き、蹲つたまま立ち上がらない少年を立て、土などを風の魔法ではいつ。つぶらな瞳を潤ませたまま、少年は驚きと喜びに顔を綻ばせた。

「す、」「お姉ちゃん！ 風の魔法も使えるの？ さつき水の精靈さんと話してたから、てっきり僕と同じ属性だと思ったのに！」

「まあね。あたしに属性はないから、全部使える」

「す、」「いや……じゃあ、闇の精靈も？ 光の精靈も？」

「うん、見たよ。大精靈は、闇と光、あと火の三人だけ見た」

「うわあ……かつこいい」

魔族と人間のハーフで……この少年は、水の属性。親は、水系の魔族だったのだろうか。

「それより、こんな所でなにを?」

「えつ……あ、僕……その。友達が……精霊さんしかいなくて」

それで遊びに来たんだけど、先客がいて、精霊はお昼寝をしてしまった……と。

そういうわけか。

「あの……お姉ちゃんつてもしかして？」

「あ、違う違う。あたしは異世界人じやないよ。母が異世界人で……父上が」

魔王だった、とは言えない。あたしはしょうがなく、魔族とだけ
言った。

「魔族……、お父さん、魔族なの？」

「うん」

正確には実の父ではないけれど……まあ、子供に深い話をしても
しうがないだろう。あたしは黙つたまま、瞳をキラキラさせる少
年を見つめた。

なかなかのショタ。とても好物だ。……誤解を生みそのので言
つておくが、あたしはショタをとつて食うよつた危険極まりない人
種などではない。だから、視線で犯しておくれことにす。

「じゃ、じゃあ……！ 僕と同じ？ 僕もお母さんが魔
族で、お父さんが人間らしくって」

「…………うい？」

「あつ……うん。僕、孤児院育ちだから……話に聞いただけなん
だ」

少年はそう言つと、モジモジ照れくさそうにして……あたしを上目遣いで見つめた。今思い出したのだが、父上にもよく言われたつ。魔族の子供を拉致つてはいけないよ、と。

だがしかし、完ぺきな魔族じゃなく、ハーフ。その上……この子は、孤児院育ちと言つたつ。

……いかんいかん。戻れ、戻るんだあたし。

「あ。君、名前は？ あたしはフィーリア」

そう言えば自己紹介がまだだったと思い、あたしは少しほほ笑みながら言つた。ハーフだから魔力にも敏感そのので、なるべくそれを表に出さないように気を付ける。

少年は一度「フィーリア？ フィーリアお姉ちゃんつて呼ぶね！」と、可愛らしく言つたあと、これまた輝く笑顔で、自己紹介をしてくれた。

「んとね、僕の名前はガルガント！ 長いからガルつて呼んでつ

「うん。 よろこべ、 ガル」

「よろこべフイーリアお姉ちゃんっ！」

あたしの呼び名も長いんだけど……とは言わず、いちいち可憐い事をしてくれるガルに和みながら、あたしは久々に安らぎを感じた。

……アイツらといふと、気が休まなかつたんだよね。夜もなかなか眠れなかつた。いつ本性を表すのか、警戒していたから。

でも今だけは……それも、必要なさそうだ。

「そういえばお姉ちゃん、どこから来たの？」

「ん？ 魔界だよ」

「魔界！？ すつ！」おい！ 本当に！？」

「うん。 魔界から！」うちに来て……暮らしてみよつかな、つて

て

本音は……まったく来たくなかったのだけど。しかし魔王「きみ今、魔界はとても不安定になつていてる。少しつつけば消滅してしまつまう」と。

しかしこんな出会いがあるならば、それもまた興か……なんて思つてしまつ。こうしてこちらにだんだん慣れる事が出来るといいんだけど。そのためには、まず勇者達を振り切らないとね。

あたしはようやく逃げて来た事を思いだし、注意をして辺りを見渡した。近くに人も、いない。まだ追いつかれてはなさそうだ。

そんなあたしの急な行動に疑問を抱いたのか、ガルが、こてんつと首を傾げた。……くつそ、めちゃくちゃ可愛かつた今。

「？ お姉ちゃん？」

「……はつ、それどうじやなかつた」

「えつ……お姉ちゃん、急いでるの？」

「うん、実はちょっとね……勇者達から逃げてんの。ほら、アイツらつて魔族が大つ嫌いだからさ……あたし殺されかけて」

「に、逃げて来たの？ 大変……ビ、ビうつよつ……隠れなあや……」

「？ いや、まだそんな気配無いから大丈夫だと 」

「 わつきね、その、勇者さまが他の水の精霊さんと話してゐるの見たんだ。だから……」

ガルの言いたい事に気付き、あたしはハツとした。そう、彼らは誰の味方でも敵でもない……なんでも正直に答へてしまつんだ！しかも精霊同士は、以心伝心している。わつきあたしは、この湖にいる精霊と話をてしまつたから ！

やばい。

早く逃げないと、再び捕まるつ！

「 やばつ 　 どつじょうつー 　 どつかひ逃げつ 」

「 お姉ちゃんこひーちー 孤児院へ行こひー 」

「 あつ、ちよ、ガル！？ 」

言つが早いが、ガルはあたしを引っ張つて走り出した。ここは、ガルの好意に甘えよう たしかにあたしが孤児院にいるなんて、

奴らは思わないだろ「うし。

私達は勇者に追い付かれませんよ」と祈りながら、森の中をひたすら走るのでした。

長く続く森。あたしはガルに手を引かれながら、奥へ奥へと進んで行った。

……もう、どのくらい歩いたかも記憶にない。一応魔族と人間のハーフなだけあるのか、ガルはまつたく息が切れてしまはず、まだまだ余裕な顔で走り続けていた。あたしは……ううん、触れないでおこう。惨めになりそうだ。

「あ、見えたよっ。フィーリアお姉ちゃんっ！」

「「ほつ」」ほつ……あ、そう……それは……よかつ、た……！」

限界ギリギリなあたしである。

「「」まで走れば、大丈夫かな…… フィーリアお姉ちゃん、歩く
？」

「「」うん…… 歩く…… けほつ」

……なんて情けないのだろう。今まさに、父親が本当に魔族であつたらよかつたのにと思った瞬間だつた。といふか、魔王な父上が実の父親だつたらよかつたのに。無理なのは、わかってるんだけどね。

あたしは再びブルーになりつつも、「いや、あたしはたしかに父上の娘だ」と小さく呟いた。その証拠に、ちゃんと黒髪を受け継いだではないか。これ以上、なにを望む？

「あ、あのね、フィーリアお姉ちゃん」

「……えつ？ あ、なに？」

思ひに耽り過ぎたのか、咄嗟に反応しきれなかつたあたしは、数秒遅れて返事を返した。

……なにやら、ガルまで思い詰めたような顔をしてくる。あたしの気持ちが移つてしまつたのだろうか？ そしたらとても申し訳ない。

けれど、それは杞憂に終わつた。

「えつと……」

「？」

「ほ、ほら……僕……魔族と人間とのハーフだから……あんまり孤児院のみんなと、仲良くなくて、その」

「……、うん」

「だ、だから……僕のせいで嫌な思いしたら……『ごめんね』

ザクリ 鈍い痛みが胸を貫いた。

こんな……、こんな、まだ幼い子供だというのに。この子はもうこの歳で、そういう感情を覚えてしまつていいのか。なんて非情な世界なのだろう。

あたしは立ち止まる。そして目線を合わせるよりは、胸んでか

「う、しつかりと見据えて……笑顔で言った。

「嫌な思いなんてね、ドンドンかかっちゃえばいいんだよ?」

「え? ……で、でも……」

「だつてあたし、ガルの友達でしょ? ……友達ってのはね、迷惑とか楽しいこととか、半分こし合つものなんだよ」

だから、ヒ。あたしは言葉を続ける。

「あたしはガルのせいでどんな思いをしたって構わないし、全然気にしない」

「……」

「ガルもね、あたしがいれば……寂しいのや苦しいの、半分こじなるか?」

寂しいのや苦しいのが、半分こになる。幼い頃あたしが父上に言われた言葉だ。

母親が何故いないのかと、あたしが寂しくて泣いた時、父上が言ったんだ。「フイーリイ、愛しい娘。お前の寂しい気持ちや、悲しい気持ち……私が半分貰い受けよう。少しは楽になつたかな？」と、そう言にながら……あたしと同じく、泣きそうな顔をしていた。

言われた通り、なんだか半分こにされたような気がして……楽になつたのを覚えている。父上は魔王だったけど、魔法なんか使わなくて済むごい人なんだ、と思わされた日である。

あたしは、ポロポロと泣き出すガルを抱き締めながら……よしよしと何回も背中を擦つた。震える身体をしつかりと抱き、何度も「大丈夫だよ」と問いかける。

……可愛いなあ、やつぱり。父上も、泣いてるあたしを見て……こんな風に思つたんだろうか？ こんな風に、撫でていたんだろうな。

ガルを見ていると、やけに昔の自分が思い出される。自分に似てるつていうの？ ……でもそうすると、将来ショタでなく口り好きになるつてことなのかな。いや、そこまで似たら最早似てるのレベルではないか。

うん。

わづならなことつに祈るつか。

「あい、行こりう？ 孤児院にはガルの部屋とかあるの？」

「うん！ あ、あの……みんな一緒に嫌がるから」

「そっか。じゃあ一人でゆつたりできるね」

「……！ えへへ、うん……」

ぬうああああつ！ かーわーえーえー！ もう孤児院なんか行か
ずには拉致りたい。

……おつと危ない。こんなんだから大臣に「犯罪者予備軍」とか
言われちゃうんだ。予備軍どころかすでに実行した事ありますがね。
まあそれはおいといて。

ああ、そういうえば大臣も、やられちゃつたんだよな。……あの、
口づめるさい頑固じい 最後の最後父上を守るため、必死に道を
塞いで……殺られちゃつたんだつけ。もう、あの人の小言も聞け
ないのか。

悲しいな。もう、どこにもあたしの仲間がないなんて。……考
えれば考えるほど、勇者への恨みがつのつて 頭がおかしくなり

そうだ。ま、高貴なる魔族はそんなちっぽけな感情で行動に移したりしませんが！ ふんだ。

あたしはスクッと立ち上がり、今度はガルと手を繋ぎながらゆつたりと歩き出した。もう孤児院は見えている。

少し古臭い感じはするけれど、見た目居心地は良さそうな場所だ。……まあ、見た目は、ね。どんな孤児院の管理人が出て来るのだろう？ 入った瞬間、「あら、帰つて来たの？」なんてほざきやがつたら、もう孤児院ごと燃やして殺らう。やうひ、でなく、殺りう。ここ重要。

「ただいまー」

パツと手を離して、扉を両手で開けたガル べ、別に残念なんて思つていません。純粋にショックを受けただけです。

ちょっと小さめに呴いたガルだつたが、ちゃんと聞こえたのか中からパタパタと女人人がやつて来ていた。一見大人しそうなただの人間の女だが……どうだろ？ こいつも可愛いガルを苛める輩なのか？ だとしたらもちろん、ただじやおかないけれど。

しかし、あたしの予想とは「JJP」とく杞憂に終わる運命にあらざる。ガルの言つた言葉によつて、それが知らされた。

「あつ、ただいまお母さん！」

「もうー、また勝手に出掛けで！ 何度も危ないつて言つたでしょうが！」

お……お母さん！？

あたしは仰天して、一度見ならぬ二度見をしてしまつた。だって本当にビックリしたんだもの。

でもあたしは、途中で「あれ……？」と気付き始める。さつきガルに聞いた話では、たしか母親のほうが魔族だつたはず。でもこの人はどう見ても……というか、魔族特有の魔力をまったく感じられない。それに聞いた感じだと両親とも、もう他界しているような印象だつたのだが……。

あまり聞きやすい内容ではないため、ちょっとためらつあたし。でも聞くよりも前に、ガルが説明してくれた。

「フイーリアお姉ちゃん！」の人は、みんなのお母さんなの！』

「えつ？ みんなの？」

「あらあら、ガル、お友達を連れて來たの？ ごめんなさい、森の中大変だったでしょう。はじめまして、私はこの孤児院を切り盛りしてるキューディと申します」

「あ、いえ……ええと……はじめまして、ガルの友達の……フイーリアと言います」

……人間とともに話す事がなかつたので、あたしは少し戸惑つ。ガルはハーフだったから、まだ仲間意識はあつたんだけど……完全な人間とわかると、どうもね。

若干緊張ぎみになるあたしの横で、ガルは気付かず笑顔で“お母さん”に今日あつた事を伝えていた。

精霊に会いに行つたらあたしと出会つた事とか、あたしが魔族と人間のハーフだと、勇者に追われているとか……それはもうペラペラと。ちょっと焦り始めるあたしを見てか、キューディさんは安心させるようなほほ笑みを浮かべ、言った。

「大丈夫ですよ。落ち着くまで、ここに居て構いませんから。むしろ居ていただいたほうが、ガルのためになりますわ」

「の子もハーフで、ちょっと他の子供達と距離がありますからと、キューティさんは困ったように笑った。

「ああ、なんだ、よかつた。どうやらガルは、一人じゃないようだ。……あたしと違つて。

本当の母親ではないようだが、それでもちゃんと頼れる大人がいる。……すこしく安堵してしまうあたしは、やつぱり心配性で仲間意識が強過ぎるんだろうか？ しかしまあ、納得してしまう。大人までそういう対応だったら、普通帰りたくないもんね。うん…… 本当によかった。

あたしはホッとして、ガルの側へと寄る。

「キューティさんもああ言つてくれたし……ガルの部屋にしばらく泊めてもらえるかな？」

「うん！ もちろんつ

「ありがとう、ガル」

ああ、やつぱり居心地がいいな。なんでだろ？ もしかしたら、キコティさんの暖かい心のおかげなのかな。人間界でなんか過ごせるはずないと思つていたけれど、なんだか……ここなら大丈夫そうな気がして来る。

でもま、しばらぐ置いてもひつなら……なにか働くかないとね。

あたしはやつやく、キコティさん」「なにかお手伝いできそうなことありますんか？」と聞いた。住まわせてもらひつなぜそれ相当の働きをする、これ鉄則！

「あら、嬉しいわ。一人でやつているからとつても助かるの。そうねえ」

「えー！ フィーリアお姉ちゃん、僕のお部屋で遊ばないの？」

「ふふふ……もう、ガルつたらわがままね。フィーリアさん、今田はせひこの子と遊んであげてくれませんか？」

「えつ、でも……」

「明日から、ちゅうつだけ手伝つてください。今日せぬ箇せんとして、ね？」

……小首を傾げながら、優しくほほ笑まれる。大人しく頷いてしまつあたり、なんだかこの人には逆らえそうにないと思った。

これが……“お母さん”、なのかな。

「わーいつ！ お姉ちゃん、行こいつ

「うん！ じゃあすこません、お邪魔します

「ふふ、違うでしょう？ 帰つて来たら、“ ただいま” よ。あつ、でも今日はお客様さんだったわね。明日からは、ただいま、よ？」

あたしは照れくさそうに、「はー」と頷ぐ。すゞぐムズムズするけれど、それが不快感じやないことだけはわかつた。明日からは……ただいまになる、か。

魔界にある家に帰つても、そんなことを言ってくれる人はもういないから……なんだか少し、嬉しいな。でもやつぱり、照れくさいよ。

「フイーリアお姉ちゃん、早くーっ」

「はいはい。今行くつて

でも。

この繋がりが、のちに“人間はやはり愚かだった”といつ風に、強く思わせる事になるなんて……。

この時のあたしは、まったく思わないのでした。

草木も眠る丑三つ時。たしか異世界では、それを夜中の二時ぐらいだと言つらしい。丑の刻とは午前1時から3時までの頃を言い、その2時間を4つに分けて三番目 といふ意味が、丑三つ時。つまり、正確には午前2時から2時半の時間帯なんだとか。

父上が母にそう聞いたと言つていた。父上はかなり好奇心旺盛だったので、きつと昔は母に質問責めをしていたのだろう。そんな絵を思い浮かべたら、なんだかおかしくなつて笑つてしまつた。

遊び疲れたのか、ガルはスヤスヤ眠つている。あたしはガルの頭を撫でながら、窓から覗く闇夜に浮かぶ月を 呆然と見つめていた。そう、草木も眠る丑三つ時に。

「……はあ」

……夜は、一番好きな時間帯だつたはず、なんだけどな……。今となつては、どの時間帯も身体が重いよ。まあ、それは多分父上の

魔力を引き継いだばかりで、かなりの重量にまだ馴染めてないだけなのかも知れないので。

魔力は魔族以上、でも体力は魔族の平均以下。……結構落ち込む。結局は、あたしも人間なのか。

ガルから手を離し、あたしは窓際に向かう。少し冷えてきたし、窓開けたままじゃガルが風邪を引いてしまうだろう。ハーフではあってもまだ子供なんだから。

……こんな事してると、本当に“お姉ちゃん”って感じだなあ。兄弟なんているはずもないのに、どう対応すればいいのかぶつちやけわからないんだけどね。ま、愛でればいいのか。

と、その時。

「……んつ？」

窓の下　あそこはちょうど、玄関のあたりだらうか。二つの人影が蠢き中に入ったのを見て、あたしは少し警戒をした。

先ほどの影は、大人のものだ。だが　ここにはキューディさん以外、大人はいないとガルから聞いた。ならば、今のは誰だ？　……勇者、じゃないよね。

再び手に入れることのできた安らぎ　それを、またもや同じ人物に奪われるというのか？　そう思つたら震えが止まらなくて、あたしはただ息を潜めて探りを入れる。少量の魔力を、紐状にするかのように……孤児院全体に這わせた。そして、目的の人物に行き渡る。

「……？　これは……」

あたしは氣付く。

これは　この魔力は、勇者じやない。勇者一行のものでもなく、それ以前に……“人間じやない”。これは、完全な魔族だ！

「　？　なんで……こんなところに、魔族が」

魔族と共にいるもう一人は、間違いなくキューディさんで……。いつたい、どういうことだ？　と小首を傾げる。もしやキューディさんは以前、魔族を殺してしまつたとか？　そしたら撃を守るため、魔

族がここへやつてきてこてもおかしくはない。

いやでも、キューティさんは普通の人間な上、女性だ。とても魔族を殺せたとは思えない。でも実際魔族はここにいるのだし やつぱり、他に理由が見つからない。

……あれ？ でもそれは、つまり……その考えが正しかったとしたら。キューティさん……超危なくね？

「 つーー！」

あたしは一気に覚醒する。なに今までゆつたり状況把握なんてしてたんだ、馬鹿ッ！ キューティさんが死んだら、ガルだけじゃなく、この孤児院の子供達が……！

一瞬でパニックになるあたしは、きつと父上の時並に焦つたんだろ？ 気配のするリビングへ行かなければと階段を降りようとして踏み外し、どこの漫才だと言わんばかりの華麗な流れで、そこを転がり落ちた。

デスンとリビングに登場するあたし。……あたしはやはり、ヒーローにはなれなさそう。

「いっつ……」

「まあっ！ 大変だわ、大丈夫フィーリアちゃんっ！？」

「え？ フィーリア……？ ま、まさか姫様ですかっ！？」

えっ？ と、数秒ポカンとするあたし。

……待て、どういうことだ？ キュディさんがあたしを心配して駆け寄つて来たのはいい。あれ、でも緊急事態なんじゃなかつたんだっけ。今にも殺されそうになつてたんじやないの？ キュディさん。

ていうか、今、この魔族はあたしを……姫様と呼んだのか？ 誰……？ 今いつたいどんな状況なんだ。

そんなあたしの混乱を感じとつてくれたのか、目の前の魔族は片膝をつき、深々と頭を下げながら言つた。

「お初にお目にかかります、姫様。わたくしの名前はギルヴォー

ル。種族は夢魔 インキュバスです「

インキュバス。……なるほど、道理で彼の魔力から甘い香りするわけだ。インキュバスとは つまり男性の夢魔、淫魔のこと。地位としては魔族の中で少し低いのだが、世界にとつては一番重要な地位と言える働きをしているであろう。

彼らは誤解されがちだが、別に好きで“やる”ような淫乱ではない。世界から人間を消滅させないように、繁殖を促しているだけなのである。少子化になると困るからね。

それに彼らには、性別がない。たしか決まった年齢を過ぎたら自分が男として生きるのか、女として生きるのかを決めると聞いた事がある。

サキュバスが女の夢魔で、インキュバスが男の夢魔 決まった年齢を過ぎたら一応性別が別れるとはいえ、たしかいつどんな時にも性別を変えるはずだ。

夢魔は、サキュバスになつて人間の男から精を奪い インキュバスとなつて、女へ注ぐ。こうして人間を育てていつているのだ。決して自分の血が交ざった子供を作る事はないのだが、ただやつている事が“いやしい”というだけで……様々と誤解が多い。ちょっと可哀相な種族でもある。

ふむ、それでも。このインキュバス、誰かに似てるんだよな。さつきから気になつっていたのだが、なかなか思い出せない……

つい最近見た事あるよつな。

「お怪我はありませんでしょうか、姫様」「え？ あ、ああ……うん。大丈夫。それより ギルヴェールさん」

「そんな……どうぞ呼び捨てに」

「ううん、しない。あたしはもう姫じやないんだから。ギルヴェールさんも、堅くならないで普通に接してほしい」

勇者達とは明らかに違つて、この対応の差 父上が見たら笑うだろつた。あたしは心中クスリと笑いながらも、先ほどから質問したかつた内容を聞いてみた。

「ねえ、ギルヴェールさん。魔族の貴方が……何故こんなところに？」

……そう、それなのだ。夢魔 インキュバスであるうつ魔族が、こんな人っ気のない孤児院まで来て、人を訪ねている。最初は捷に従つてキュディさんを殺しに来たのかと思つたけれど、そうでもないようだし……。

彼らは人が沢山溢れる場所へ行くはず。ここへ来る意味は……なんだ?

ただの疑問として、質問したあたしだった。しかしギルヴェールさんは突如慌て出し、流れるような動作で、頭と手足を床についた。

……これは所謂、土下座、というやつですね? 異世界に伝わる、究極の平謝り方法なんだとか。父上が教えてくれたが、見るのは初めてだ。なんと美しいフォームだろう。

あたしが呆然として見つめる中、ギルヴェールさんは、その沈黙を怒りと受け取つてしまつたらしい。何度も頭を打ち付けながら、寝耳に水な言い訳を話しだした。

「も、申し訳ありません……！ 僕……い、いや私……夢魔のくせして人間の女に夢中になつてしまつて、それで子供まで作つてしまつて……！ でも以前頑張つて彼女 キュディを忘れようとした

たんですよー。」

「え？ え？」

「ですが……仕事をしようと思つて、人間の男から精を奪つるもの……女へいざ流し込んでやろうと思つたら、全然息子が機能してくれなくて！ なのにキューティに会つたら何故かギンギンで……」

「やつ……ひょつ」

セレニまでカミングアウトしきとは言つてないよ、あたし……

「本当に……！ 本当に申し訳ありません！ 僕のクララはキューティといつもハイジにしか立たせられないんです……夢魔としてサボるこんな馬鹿をお許しください……！」

「ちよつ、待つた今のネタの意味があたしからなによー。どういひことー？」

「ああ俺つてなんてダメなんだ……！ インキュバスとして終わつてる……サキュバスとしても生きていけない！ いや、女としてキューティに一度は抱かれてみたいと常々思つておりますが……」

「ねえひとまず話聞こつよー。」

「気持ちよく断言をしてくれるギルヴェールさん 下ネタところのが、なんとも救いがたいのだが。」 内容がすべて

しかし、今のでだいたい掴めて来た。どうやらこの一人は、ちゃんと愛し合っているようだ 人間と魔族、夢物語の恋愛を 目の前で見てしまうとは。下ネタはいただけないが、ギルヴェールさんのキュディさんを真剣に愛する心は、よく伝わったし……心配は全くなれやうだな。子供までいるらしいから って！

「子供オー？」

素頓狂な声をあげ、あたしは田をカツ開く。

「ううううう、アビアード、子供ー？」

かなりの時間差があつたものの、あたしはようやくそれを理解はじめた。子供まで産まれてるなんて……、そりや焦つて謝るよね。

何故なら、先ほども言った通り　夢魔は人間との間に、絶対子をなさない。夢魔は、下級な地位ながらも“魔族”としての誇りを持っているから。だからどの魔族よりも夢魔は人間を“愚か”だと見下している。

……そんな、夢魔が。
インキュバスが。

人間に　恋をした。しかもその人でしか興奮が出来なくなつてしまつという、御墨付きで。……まったく信じられない。むしろ、あり得ないだろ？！

それに大変なのはここからだ　　あたしが知識として知っている中で、人間と夢魔の間に子供が出来たなど……実例がない。どう育つか、どうなるのか、何もかもが　　謎なのだ。

人間にもし、それが知れたらどうする？　間違いなく玩具にされるか、売られて奴隸になるかの一択だろう。断じて、それだけは阻止せねば。

「……はあ……」

「申し訳ありません……姫様」

「……いや、別に怒つてないよ。恋愛は悪い事じゃないから」

それに、父上は人間である母に恋をしたんだ。なんの不思議もないだろう。……いや、驚いたけどね。

あたしは一度冷静にものを考えようと、小さく深呼吸を繰り返した。夢魔であるギルヴェールさんと、人間であるキューティさん。二人は出会い、愛し合い、子供ができる、そして産んだ。……はて、そういうえばその問題の……子供は？

……あれ、嫌な予感がするぞ。

“わわわわわ”、と。“わいわい”ない動きで首を動かし、あたしはキューティさんを見つめた。キューティさんは、一ヶ口つとほほ笑みながらたつた一言。

「やつくりでしょ、ひへー。」

……その言葉だけで、充分わかりましたとも……。

四（後書き）

タイトルの一一名がまったく登場しない件（笑）

次回勇気を必ず出します。

キューディさんに言われた「そつくりでしう？」というその言葉。そう、たしかにそつくり。そりやもう改めてお一方をみたら、なんですが気付かなかつたんだと思えるくらいそつくりですよ！　あたしは人間界に来てから、視力が腐つてしまつたのかと本氣で危惧したほどに。

多分、わざわざ言わなくとも気付く人は多い。そう、この二人は……ガルの、両親なんだ。

ギルヴェールさんから感じる甘い香りの魔力　よく目を凝らせば、“水”の属性ということがわかる。そしてガルの属性は……水。なにより、ガルの瞳はキューディさんにそつくりだ。あの優しいまなざし　ああ、本当に何故気付かなかつたのか。

つと、待てよ……？

たしかガルは、母親の方が魔族だと言つていたはずだ。そして、父親が人間。あたしと逆だという印象があつたら、聞き間違いはないはずだが……。

あたしはキューディさんとギルヴェールさんに向かつて、ガルに聞

いた事をそのまま話した。

ギルヴェールさんが答える。

「ああ……それは、カモフラージュといえばいいのかな」

「……カモフラージュ？」

「ああ……。なんせ、あの子はハーフだからね。しかも、夢魔と人間の」

ギルヴェールさんは　ポツリポツリと語る。

キューデイさんという人間を愛してしまった、夢魔であるギルヴェールさん。もちろん回りから大反対されて、色々な障害に囮まれたと言う。それでも諦めきれなかつたギルヴェールさんは、「自分は魔族から離れる!」と言つて、故郷から離れたんだそうな。それで一件落着かと思えば、今度は人間との障害……。しばらくは変装したりして隠れてたものの、ガルが三才の頃にバレてしまつたんだとか。

二人はギリギリに立たされた。迫り来る大勢の人間……このままで、自分達もとも、愛しい我が子まで命を落としてしまう。そんなこと、親として認めるわけにはいかない。苦渋の決断をした

ギルヴェールさんは 愛しい妻と我が子を逃がすために、たつた一人で人間達に立ち向かつて二人を逃がしたんだそう。

しかし、魔族とはいえギルヴェールさんが強い力を持つているわけでもなく もうダメだと思われた。愛しい一人を逃がせたもの、自分はもうともに歩む事は出来まい。そう思つたほど、窮地に立たされた。しかし。

……魔族を捨てると言つたにも関わらず、旧友や親戚が、駆け付けてくれた。そのおかげで命からがら、ギルヴェールさんは逃げおかげたらしい。

そして再び愛しい妻と我が子に出会えたギルヴェールさんはまたもや、苦渋の決断をする。キュディさんと話し合い……せめて我が子だけでも、長く生きられるように、ガルを隠す事に決めた。

「……ガルは、私達が本当の親という事を、知らないでしょう。キュディはみんなの母、たまに来るオジサンは……食べ物をくれる優しい人どまりです」

「……」

「それでも……私達はなるべく近くで、ガルを見守りたかった。だから孤児院なんかを立ち上げて、多くの子供達の中に……ガルを隠しているんです」

ハハツ、酷いでしょう？ と。ギルヴェールさんは今にも泣きそうな顔をして、言った。

「力がない私には、こういう酷い選択をとるしか、なかつた。ハーフと知れるだけならまだいい……“夢魔”と“人間”的子であることさえ、隠せられるのならば……私は……」

「ギル……私も一緒に決めたの。何回も言つているじゃない……」

「いや。すべて俺のせいだよ。……今までの行いのツケが、今回つて来たんだ」

深い事情がわからないにしろ、一人がどんな思いでここまでやつて来たのかは、よくわかつた。一人はガルが大切なんだ。それだけは、揺るぎない気持ち。

……いいなあ。両親かあ。

「……すべては俺がすべて巻起こした事。命をかけて、守ると誓

つたんですね。だから『ひつか』……」

「わっ わわ、聞こましたよ」

あたしは笑う。

「あたしはもう、姫じやないんです。だから、許す許さないの問題でもないし……ガルはあたしにとつても、大切な友達で、可愛い弟みたいなもんですから。誰にも言こませんよ」

深々と頭を下げるギルヴェールさんを見て、あたしは思った。父上は、こんな気持ちで……あたしを勇者に預けたのかな、って。

……わう思つと、ものすごく切なくなつた。

「あらやだ、もうこんな時間 そろそろ寝なくち

「もう三時か……。キューティ、俺はちよつと仲間のところに用事

があるから。また明日来る

「ええ。待つてるわ」

こんな物語みたいなこと、あるんだなあ。……人間界へ降りなくちや、こいついう事も知る事が出来なかつたんだ。

……来てよかつた、かも。多分。

「それじゃあ姫様、私はこれで」

続きを言おうとした、その時。

……こんな夜のふけた時間にも関わらず、玄関からノックするような音が響いた。私達の顔に警戒の色が走る。

「まさか……そんな。こんな時間に誰が……俺達のことがバレたのか？」

「……もしかしたら違うかもしれないわ。道に迷った人かもしね
ないし」

「二人とも、隠れててください。……あたしが出ます」

「早く！」と促すあたしは、緊張した面持ちのまま扉へと近付いた。一人は「すまない」と言つて物陰に隠れる。

それを確認したあたしは、一度深呼吸をしてから ゆっくりと、その扉を開いた。

「はーい。どちら……さ……ま……っ」

ピシリ。

あたしの今感じた効果音をあげるならば、多分それが一番適切な言葉だろう。多分今あたしの表情は、作った笑みのまま冷や汗を流し、固まっているはずだ。

冷静な判断など皆無。あたしは問答無用で、その扉を勢いよく閉めた。物陰に隠れていた二人を伺うと、その顔にはやはり「あ

の人つて……」みたいな表情が浮かんでいた。

まずい。これはまずいことになった。あたし、なんのためにここにいて、匿つてもらつてると思ったんだ。警戒もしず自ら現れちゃうなんて……本当にあたしのばか野郎。

再び繰り返されるノックの音を無視しながら、あたしは勝手に扉を開かれないよう精一杯の力を持って扉を押さえ付けていた。わあ、大変だ。コイツ本気で押し返して来やがる！

「んあつ、ぐあああああああ！」

「ひ、姫様……？」

「フイ、フイーリアちゃん……」

唾を飲み込み見守る夫婦の視線を……背中いっぱいに受けながら、あたしは今日一番の頑張りを見せる。この扉を開かせてはならない。だつて……もし開いてしまつたら……！

いきなり抵抗がなくなった扉。油断作戦か……！ と、そう思つたあたしは、真横にある窓の存在など気付かず、再び来るであろうと予想する衝撃に耐えるため、しつかり扉を押さえていた。だからあたしは馬鹿なのである。

窓からヒョイと首を潜らひか、こちらを見ている 勇者。そちらに背中を向けていたためか、まったく気付かないあたしは……その窓から器用に身体を通らせる勇者に気付かず、ひたすら扉を守つていた。

気付いた時には、トントンと叩かれる右肩。

「え？」

「……」

「……あれ？」

「……」

「お……おば……」

「俺は生きている」

……いや、お前むしろ人間じゃないだろ。どうやつたらそんな小さな窓から入り込んだんだよ。あそここの夫婦がアンタ見て絶句してるじゃないか。マジでどうやって入ったんだよ！

目ン玉をカツと開いて驚愕するあたしの横で、勇者はとても清々しそうに肩をポキポキ慣らしていた。……え、人間……だよね？あれ、この人同族だつたつけ。

白銀の美しい髪をサラリとほらい、勇者は孤児院の中を眺めまわしていた。夜のせいか、その青い瞳は少し色が深くなっている。とつても絵にはなる光景だ。化物まがいなことを、されなかつたら……だが。

「……」

「……」

ひたすら続く、沈黙。

あたりを眺める事に飽きたような勇者は、さて……と言わんばかりの視線であたしを刮目した。その、冷たい眼で見下ろされ……怖いのに、とにかく反抗したい気持ちに駆られる。コイツ 勇者を見てると、どうしても素直に従いたくなるんだよね。最初の印

象もあるかもしないけれど、それでもやつぱり……コイツが嫌い。

理由の掴めない感情のままあたしは、勇者になんだよと言いたげに眉を上げてみせた。奴も奴で、別に……とでも言いたげに見下ろしている。くつそ、足の骨折つて背え低くしてやりてえ。ダメかな。ダメだよね。

……いつまで続くのだろう。あたし達はずつと睨み合ひながら、なにかの機会を伺う。正確には、あたしは“逃げれる機会”をだけ。勇者に関しては、多分……“捕まえる機会”を、かな。知らないけど。

しかし、誰よりもその沈黙に耐え兼ねた人達がいるのを、あたしは忘れていた。

「あの……貴方は、勇者様…………ですよね？」

……疑問系なんだね、ギルヴェールさん。いや、気持ちはわかるけど。

「……ああ」

「ええと、あの……どのよつなじ用件で？」

あ、そうか。ギルヴェールさんは知らないんだっけ。あたしがこいつから逃げて来たってこと。キューディさんはガルから聞いて、“勇者に追われている”ということは知っているはず。ガルには咄嗟の嘘で、“命を狙われている”と言っちゃったけれど

あたしは焦りながら、勇者とギルヴェールさんを交互に見た。
…もし、勇者が“魔族”であるギルヴェールさんを、殺そうとした
…うどりある？ いや、愚問だな。答えはもううん、 “勇者を殺す”
…だ。

命をかけてでも、あたしは同族を守つてやる。それが…あたしの、“魔族”としての…いや。“魔王の娘”としての、意地だ。
…絶対に殺らせやしない。

「…………捕獲をしにきた」

「捕獲、だと？」

「ああ」

「…………やはり、勇者までもが…………」

「……？」

「貴様までドゥルーダムの手先に落ちるとは……！ そんなに魔族が憎いのか！？」

……う、うおおおおおお！ つまい具合に話が噛み合つてない！ 本当は噛み合つてないけれど！

あたしは大人しく、この成り行きを見据えた。どうなるかはわからぬが……少しでも勇者が手を上げたら、あたしも容赦はしない。全力で殺しに掛かつてやる。

「ドゥルーダム……？ “異世界の科学” とやらを盛り込んでる、あの先進国のことか……」

「知らんふりをするな。奴等に言われて、“捕獲” をしろなどと言われたのだろう……！」

「……？ 奴等に言われてではない。俺は、自分の意志で捕獲をしにきた」

「ハッ！ 自分の意志だと！？ 毛の先までドゥルーダムに染められた猛犬め……！ 絶対に、渡しやしない！」

「……なら、武力行使だ。手加減はしない」

「くつ……！ 一人とも、逃げるんだ！ ガルを連れて……」

……どうしてくれよう。この、うまい具合に噛み合つてこる、世界一噛み合わない人達を。

「あ、あの……ギルヴェールさん」

「いいんです、姫様。私も魔族の端くれ……貴女様に戦わせるような事はしない。ガルを連れて、どうかお逃げください」

「……！ 魔族……なるほど。お前は“夢魔” インキュバス
か」

勇者が……気付いてしまった！

鋭くなつた瞳に気付き、あたしはつぶたえた。やはり 勇者は、“魔族”が嫌いなのだ。このままではギルヴェールさんが父上のようにな……。

ボロボロになつた父上の姿が脳裏に浮かび、あたしは背筋を凍らせた。父親を失うなど……ガルが知つたら、きっと悲しむ。絶対にさせるものかっ！

あたしは、勇者とギルヴェールさんの間に立つた。二人の視線が……身体の前後に突き刺さる。

「姫様！？」

「聞いてギルヴェールさん。こいつはガルを連れて行こうとしてるんじゃないの。あたしを連れて行こうとしてるだけだから」

「え……？」

「大丈夫 大丈夫だから。もう絶対に 同族を殺らせはしな
い」

あたしは笑顔で言つてから、田の前の勇者へと向き直る。

「もう、絶対に。……殺らせない」

「……」

「……あれ以上……あたしの仲間を、減らされてたまるか

そう、それが “悪魔の子”、オコナム力を引き継いだ者のするべき事だ。あたしは魔族を守る。そして、その家族も守る。

魔王城にいた メイド、執事、庭師、料理長、大臣。もっともつと沢山いた……あたしの仲間。みんなは、父上とあたしを命懸けで守ってくれた。ならばあたしも 命懸けで守らなければならぬい。

「……一緒に来い、フイーリイ」

「……言わなかつたか？ あたしを、フイーリイと呼ぶなど

「……さあな」

「あたしをそう呼んでいいのは あたしが、その人を“特別”としている者だけだ」

ギラリと光る、勇者の瞳。……人間は、コイツを正義だという。これを見ても本当にそう言えるのか？ まるで、獣だ。人ですらない。

「……一緒に来るなうば、ヒーローは見逃せり」

「……」

「ヒーロー」

「……ちつ」

「それは、肯定として受けとるが？」

片方の眉を上げながら問う、勇者。……どこまでも気に食わない。ああ、本当に殺してやりたい。でも、捷に従つならば 殺しちゃつても問題ないんだつけ。

……いや、我慢しろ。あたしはなんのために、生かされたんだ。父上の気持ちを踏みにじるな。

あたしは溜め息を吐いて、勇者を視界から逸らした。……一分一秒でも、コイツなんかを視界に入れたくない。できる」となら、存在すら認めたくないのに。

「行くぞ」

「……」

「姫様！」

「フイーリアちゃん！」

あたしを止めるような声。……ま、ギルヴェールさんを救えたんだから、儲けもんだよね。うん、これなら父上も喜んでくれそうだ。

あたしは苦笑しながら、「ガルによろしく言つてください」と残して……勇者を追つようにしてその場を去つて行つた。

……あーあ。逃げれたと思ったのに、結局これが。なんでわざわざ、あたしを連れ回すんだよ。まあ、“魔王の娘を手下に従えた”とでも思つてるんだろうけどね。……ハハツ、本当にあたし家畜みたいだ。切ないなあ。

遠くなる孤児院を見つめながら、あたしは惨めな気持ちで歩くの
だった。

五（後書き）

これからも少しずつ勇者に奇行をさせようと思っています。

次回も勇者出ますので、気付いたら是非描をしながら笑っても
つてください。

「……はあ

聞こえないよ！」吐いた、小さな溜め息。ぐぐぐと草を踏み締めながら、あたしは今……町の方へ向かっている。完全無表情の冷血悪魔。勇者の背を追いながら。真っ暗闇の中、もの憂鬱げに。

「……」

「……」

会話などない。だが……さすがにこの静かな夜道でなんの会話もないし、少々居辛くも感じる。まあ勇者なんかと話す内容なんて、これっぽっちもないのだけど。いや、しかし、これは……居辛いどころか、究極に気まずい。暴言を吐いて勇者達の元から逃げたのも

あつて、なおさら。

でも、勇者も勇者だ。わざわざあたしを見つけに、此所までこなくていいだろうに。そのまま放つておいてくれたら、どれほど楽だつたか……。そりや、人間からしたら“魔王の娘”とは、魔族に良い打撃を与えるだろう。くわえて人間も大いに喜ぶ。

……そこまで、嫌われているとは。何故人間はそこまで愚かなんだ？ 自分より強い力を持つものを、何故そこまで恐れる。しかも人間は勘違いばかりが多い……自分が強いと思い込めば、弱い者を虜げ上に立とうとするし。本当に強い力を持っている奴もそうだ。

人間に対する不満を、心の中でダラダラと流し続けるあたし。貴様なぞそちらのドブに足をツツコニコの不甲斐なさに落胆し失業者になつてしまえ と、勇者を睨みながら考えていたせいだろうか。殺氣の混る視線に気付いた勇者は 急に立ち止まり……振り返った。

その、月明りに照らされ光り輝く 青い瞳。鋭く細められた瞳に見据えられたあたしは、本当に声にだして罵倒しかけた口を……自然と噤んでいた。危なかつた、マジで。

しかし。勇者は本当に、作り物のようだ。まるで精密に仕上げられた人形のよう。シンメトリーで不自然さがまったくないはずなのに、逆にそれが不自然に感じてしまうほど かなり、完ぺきに仕上げられている。

あたしは多分……コイツ以外に、勇者らしくない勇者を知らないだろう。今まで勇者まがいな事をしてきた熱血人間とは違つてコイツは、“仕事”をこなすかのように淡々としている。それ以外に、生きる意味がないかのようだ。

……いや、ちょっと違つか？ むしろ本能で動く、野性的な人間。熱血とは違うけれど、熱い何かを宿し 目的を果たしているようだ。それが“人間”的ためを思つてはいるのか……“魔族”への憎しみからきているのか。あたしには、わからなかつた。

勇者という“人間”が まったくわからない。

「……フイーリイ」

しばらく見つめ合つた 否、睨み合つたのぢ。勇者は懲りりもせず、あたしの愛称を呼んだ。

もううんあたしは舌打ちを返す。

「あたしの愛称を気安く呼ぶな。……吐き氣がする」

ピクリ。

勇者の眉が、不機嫌そうに潜められる。

「……じゃあ、なんと呼べと?」

「フイーリア。……もしくは魔王」

「魔王はもういない」

「いふ、いふ。あたしは……父上の力を譲り受けたのだから」

「往生際が悪い。お前はもう人間だ」

「……」

「それと、フイーリアよりフイーリイのまづが言いやすい。それ
が嫌なら」

「……?」

「マグロと呼ぶ」

……なんで魚なんだよ！？

「もしくはシャケ。もしくはサバ それも嫌なら、サンマだ」

「……。ケツの六手え突っ込んで奥歯ガタガタ言わせてやるづか
「リラ」

「お前は女だらう、汚い言葉を使つな。まったく、理解できん…」

…」

そりや お前だよ！ と叫び倒し地団駄を踏みたくなるあたしは、
おかしいだらうか。魚の名前で呼ばうとするやつより、よっぽどマ
トモだと思つたが。

せめてクジラとかサメとか、イルカとかあるだらうよつ！ なん
で完全食い物系の海の生き物なんだ！ いや美味しいけどね…！

立ち止まつたままこちらを呆れて見る勇者に対し、あたしは
憤慨したように顔を歪ませる。やつぱり、理解不能。勇者という人
間がサッパリわかりません。それとも、人間とはこういう生き物な
のか？ ……自分が一応同じだと思つと、鬱鬱になる。

そして、そんなあたしに勇者は追い討ちをかけた。

「 わあ、ビバアムヘ。」

「 ?」

「 フィーリイ　お前は魚か、否か」

「 否だよー！　つてか何氣に父上のセリフをパクんなつーー。」

あ～ああもうつー！

誰がマイシをなんとかしてくれーー！

「 せうだ、フィーリイ」

「 ……おつ勝手にしね。……」

「 マグロ」

「 せうこつ意味じやないー。」

「 フィーリイ。せうこえびせうきの奴等はなんだつたんだ？」

ド

ウルーダム……がどうのと言つていたが

……勇者つて、疲れるタイプの人間だつたんだな。もちろん疲れるのは一いち側。

あたしは諦めて、勇者にあそこへ行つた経緯から話した。その間、余計なチャチャを入れずに、勇者はちゃんと話を聞く。ガルガントという少年に会つた事、ちょっと嘘を混ぜて追われていると言つた事、あの夫婦の事情など　すべて話し終えたあとで、あたしは真剣に勇者の表情を伺つた。

……もし今ので、勇者があの夫婦を“敵”と見なすならば。あたしは、全力で戦うつもりだ。父上が敵わなかつた勇者に勝てるとは思つていなが　それでも、あたしは“魔族”的心を忘れたわけではない。

勇者がどの行動を取るか。あの夫婦には悪いが、見定めのため少し協力してもらつた。……大丈夫、もし最悪の事態になつてしまつても、絶対勇者を逃はしない。相打ちに持ち込んでやる。

だが、勇者は。

あたしが考へているよつた事には、ならなかつた。

「そつか。あの夫婦も大変だな」

「……それだけ？」

「？……あの夫婦も大変だな、とても可哀相に」

「言葉の少なさでなくて」

なに、「コイツ馬鹿なの？死ぬの？」

「よくわからんが、俺は別に狙つてなんかいないぞ」

「……本当に？」

「ああ。別に、俺の敵ではなさそうだしな」

……少し、いやかなり、拍子抜けだった。想像では……もつとう、魔族にたいして恨みとか持つてそうだったから。

でも。それならば、何故勇者なんかになつたんだろう？　勇者は魔族を滅ぼす存在だ……なのに魔族をみすみす逃すだなんて、こういつちやなんだけど　勇者らしくなさすぎる。

少し興味が沸いたあたしは、今まで嫌悪していたのも忘れて普通に、素直な疑問を問い合わせていた。

「ホントに勇者？」

「……ふ。よく言われる。基本的にいつも疑問系で問われるな」

「だるいね。今まで父上を襲つて来た偽者勇者のほうだが、よっぽど勇者っぽいし」

正直な意見に、勇者は初めて笑みを浮かべた。……その顔を見張るような美しいほほ笑みに、少なからずドキリとする。

……イケメンとは、実にお得だ。多分大抵の犯罪も、そのお顔でパスされるのだろう。勇者の将来が不安だ。

「まあ、好きになつたわけでもないしな」

「……？　じゃあなんで勇者に？」

「……。人探し、だな」

そう言って、勇者は何故かあたしを見つめたあと……含み笑いを返した。

……意味がわからん。なんであたしを見て笑う？ ていうか、人探しで勇者になつただなんて……それで倒された父上つて、いったい。あたし、惨めだ。

「……」

「……悪い、こんな理由で……お前の父を追い込んで」

「……別に。その人探しは、終わったの？」

「ああ、見つけたよ。なかなか懐いてくれなくてな……ずっと不機嫌で、よく牙を向かれる。手を焼いているんだ」

「……？ ふうん……猫みたいだね」

「ふ……ああ、そうかもしねない」

「Jの勇者が手を焼くほど、手強い探し人。いつたい誰だろう？間違いない、勇者一行の中にいるはずだ。マリンベール？違うな、幼馴染みと言っていたし。じゃあ、ジュエリー・クリアウォーターか？……あればどっちかといふと、犬だ。

あと一行のメンバーと言えば……、聖職の小さな少女と槍使いの青年、エルフの女くらいか。……どれも、猫といった印象は受けないが。いつたい誰なんだ？

「勇者にも手名付けられない奴つているのか……」

「……まあな」

「凄いなあ」

「……ああ、こりいろと凄いよ」

再び含み笑いをする勇者を怪訝に見つめて、あたしは首をひねつた。……へんなの。

しかし、どうやら勇者はそこまで悪人じゃないことだけはわかつた。それを知つてなんになるんだとも思つし、憎らしい気持ちがなくなつたわけじゃないけれど……前よりはムカつかない、かな。

父上のためにも、人間になろうと努力はしたい。そのためにも…
…勇者のことを少しづつ、許していかないといけないだろう。今は
殺してやりたいくらい憎いけど、もうちょっとしたら 噛み付き
たいくらいに、ね。

はあ……出来そうにないなあ。

今朝まで居た 正確には昨日になるのだが あの宿舎の一室の前、あたしと勇者は今……小さな攻防を繰り返していた。

お題はもちろん、“この部屋に入るか入らないか”、についてである。

「んぎつ、ぐぐぐつ……い、いやだ……！ あんな奴等に……ぐつ……謝るべりご、ならあーーー！」

「我が、儘を……！ ぬつなつ……！」

「こ……ぬぐー 離せこの魚介類好きめーーー！」

「くつ ショタ好きに言われたくないーー！」

「な！ 何故知ってるーー！」

「企業秘密だー！」

「こんな小さな戦いを初めて、どのくらいの時間が過ぎただろうか……。と、りあえずわかつて、いるのは、窓から覗く空が白み初めていと、いうこと。ふむ、つまり小一時間は経つて、いるといふことか。なかなか迷惑なぐらい粘るな、あたし。もしかんまだ諦めないけど。

まあ、まだ一応夜中という事もあって、若干声は押さえめにするという、それなりの常識は心得て、いるあたし達。いや、だからこそ大きな真似も出来ず、ドングリの背比べとも言えなくない戦いをするはめになつて、いるのだが。あ、ドングリの背比べといふのは父上に教わった「トワザ」というもので

「ハイハイ。君達いつまでも夫婦漫才して、ないで、さつさと中に入つてくれるかなあ。一時間も通行止めされてる僕のためにもなつてよー？」

え？ ど、あたし＆勇者は、ふと聞えた飄々とした声に導かれ、そちらを同時に伺つた。

そこにいたのは、勇者よりも見上げるほどテカイ身長、スラリとした体格、性別の区別がつかないほど中性的な甘いマスクを被つた……黄金の青年が。

……あ、黄金といふのは別に、服装のことではない。今はまだ少

し暗いのでわからないと思うが、太陽の元へ出ると「待つてました
我が主役の時！」なんて言つていそなくらい、彼の“金髪”が眩
しいからである。名前が日茶苦茶長かったので、覚えられなかつた
のだ。だからあたしは“黄金”と呼んでいる。……心でね。

彼は腰まである長い髪を乱暴に搔いて、退屈そうにあたし達を見
ていた。……年上のお姉さん達の前じや、いつも凜々しくしている
くせに。この腹グロ二重人格め。

勇者の次の次ぐらいに嫌いな人物だったので、あたしは自然に表情
を歪めた。それに黄金野郎も気付いたのだろう。彼は意地の悪い
笑みを浮かべて、一步、また一步とあたしに近付いて 言つた。

「嫌そうな顔してくれるねえ だからガキは嫌いなんだ」

「近寄るな、目が潰れる」

「ハハッ、まあ僕くらい顔が整つてると……君なんかの目、じゃあ
許容範囲外だらうしね」

「ホントにな。暗闇で生活してきたあたしには、まだ直射日光は
かなりキツい。だから早く退け」

「いれだからガキは嫌だね。淑女なら日傘の一つでも持たなくち
や」

「日傘で防げるレベルを優に超えてる。だから退けつて

「はあ……まつたぐ。君はホント陰気臭いねえ、ガキならガキらしく無邪氣であればいいものを。どうにかならないのかい？」

「勇者、お前の仲間はまだあと四人いたな」

「ああ、だが早まるな」

……ひつ。

……どうやら勇者に読まれたようだ。頷くだけならイケると思つたのに。あああ、ムカつく。「イツ本当に父上の専属執事にソックリだ。この黄金野郎もあの執事みたいに、「淑女としての嗜みを忘れるべからず」とか、「そんなですから知能に著しい問題を抱えるのですよ」とか、二ツ「リ笑つて嫌味を言うタイプだ、絶対。ついで今されたじやないか。

……証拠が残らなければ、やつちやつてもいいかな。いいよね、腕の一本くらいなら。あ、勇者に遮られた。くそう。

「はあ……それより、もつと早く声をかけてくれてもいいだろ」
「ベルヴァロスクエッド」

これ以上あたしの怒りを増させないためか 話を変えるように、放たないようになつに、しつかりと両腕を拘束しながら。用意周到な奴め。

しかし。ベルヴァロス……なんだつて？ 前にも聞いた事のある文字の羅列のようだつたが、未だ全部を覚えきれない。長すぎだろ名前……何故縮めないんだ。あ、でもそういうれば マリンベールがその理由を解説してくれたような。ええと、なんだつたか……ああそうだ、「フルネームの方が威儀でるだろ？」って言つてゐるのよー。面倒だからたまに“金髪”とか“ゴボウ”って私呼んでるのよね」と言つていた気がする。気がするじゃなくて間違いなく。だつて「ちょっとゴボウ！」って呼んでいたのを見たし。そのあとかなり説教食らつてたけどね、マリンベール。

だが、マリンベールがそう呼んでいるなら、あたしもそう呼ぼつか。眩しいし、黄金と呼んでも差し支えなさそうだな。……いや、それでは本物の黄金に失礼な気がする。ならなんて呼ぼう？ だが……ゴボウも本物に失礼な気がして来たぞ。しかしそう思つとすべてに失礼な気もしないでもない、といつか。ああ、キリがない。

真剣に悩み過ぎていたのだろう あたしは、気付いたらいつの間にか……部屋の中に入つていた。しかも、勇者に荷物担ぎをされて……何故荷物担ぎなんだ。別に期待してたわけじゃないが。

しかし ハツと氣付いた頃にはもう遅い、といつやつで。中にいた勇者一行達は、入つて来た勇者に担がれたあたしを見た途端……それぞのの反応を返した。

その声の音量にビッククリしつつ、あたしは身体を縮こまらせた。

中でも声の大きかったマリンベールは、担がれたままのあたしを見るなり、一番に駆け寄りながら心配そうな面持ちで言った。あたしはあたしでとにかくキヨーン。

「ああ、よかつた！ フィーリアちゃん、怪我とかしない！？ てゆーか、勇者つてば女の子を荷物担ぎするなんて……そこは普通お姫様抱っこでしょ！？」

「……？ お姫様抱っこ？ なんだソレは」

「はあ！？ アンタ……お姫様抱っこ知らないのあつ！？」

「……別に間違つてはないと思つが。元魔族の姫を抱っこしていたわけだし」

「バツカかこの究極ド阿呆勇者が！ アンタ今までどうやって“男”を学んで来た！」

「？ ……マリンベール、落ち着け」

「うがあああああつーー！」のマイペースがあー！ ちよーいらつべへりりりー

……それは「もつとも。

「オイオイ、マリンベール。朝っぱらからひるむこばー？ 乙女
じゃないねえ」

「うつさいわこのウルトラナンセンス！ ピボウはゴボウらしく
黙つてなさい！」

「だからあ、僕にはベルヴァロスクエッドっていう名前があると
何度も」

「ああもう、はいはい！ デクノボウクエッド！」

「ベルヴァロスクエッドだ！」

……すごい。あの黄金野郎よりも優位に立っている。マリンベー
ルって、案外凄い人だつたのか……。かなりお喋りで少しウザいな
あと思っていたが、改めなければ。……うん、マリンベールとはこ
れから仲良くしていこう。

感心するあたしの横で ちなみにまだ担がれているが 段々
バトルが白熱するマリンベールと黄金野郎。旅の間基本的にまわり
をそこまで見ていなかつたが……多分コレはいつもの事なのだろう。
他の連中は慣れた様子で、朝のモーニングとシャレこんでいた。慣
れ過ぎだろう。

やつとあたしをソファに降ろした勇者は、その真横に座りながらも……一人を余裕で無視していた。そして、テーブルに置かれたパンを手に取り優雅に頬張っている。時々あたしに差し出しながら。

二人のバトルを見逃すまいとしていたあたしは、その差し出されたパンを見ずに頬張る。そしてまた差し出してくれるので、あたしは一人の言い合いを見逃す事なく観察出来た。……うつむ、餌づけをされている気分だ。しかし便利なので拒めない。ヨシとするか。

「だいたいねえ！ わざわざフルネームを呼ばせる方が威儀ないつての！ いつたいどこの宗教よ、気持ち悪い！」

「はあああん？ この僕を田の前にして、気持ち悪いだと？ つたく、これだからガキは！」

「ハンッ！ この若作りがなあに言つてんのよ！ この三十路！」

「三十路い！？ 僕はまだ二十九だつ！…

「四捨五入したら三十路でしょうが！ 往生際悪いのよこのの中年が！」

「わざわざ四捨五入をする意味がわからん！ そんなどから男が寄つてこないんだ！」

「なんですか！？ オッサンにピチピチ少女のなにがわかるのよ！ オッサンはオッサンらしく隠居してゐるのクソじじい！」

「せめてオッサンで止めや…… まだじじいじゃなにぞ！」

……ほほう、ますますマリンベールの好感度が上がっていくな。あのナルシスト野郎をあも言いくるめられるとは。

あ、今勇者がくれたフルーツ美味しい。食べたことないや。多分、表情に出たのだろう。……他の食べ物を挟んでちょくちょく差し出してくれた。うーん、うまい！ むつ？ 本格的な乱闘が始まった。いけ、そこだ！ マリンベール、そいつをやつつけろ！

と、あとちょっとでマリンベールがナルシーに首絞めをするところだったのに、第三者が唐突に現れてしまった。エルフの女ロックハートだ。

「そこまで。マリンベール、やめなさい。下の階の人迷惑が掛かるでしょ！」

「えーっ！ いいじゃないロックハート、あと氣絶させるだけよ！」

「うう。やつこひじとせ部屋でやつた。ほひ、まだ朝食が食べ
掛けだ。やつせとお食べ」

「...えーつ」

ドスンツ、と。羽交い締めにしていた黄金野郎を、残念そうに手放した。……もう氣絶してゐるじゃないか、凄いなあマリンベール。

「…………さて、ヒ。勇者、お姫様も戻つて來たし。早々にこいをでるかい?」

ロックハートの視線が、あたしに移される。……妙に気まずい。そしてそんな気まずさにチャチャをいれるがの如く、哀れ女が言つた。

「ていうかあ、あんな大口を叩いて置きながら戻つて来るとか。
恥ずかしくないのかしらねえ」

「……ジユノリー嬢、そういうことは言つていけなによ

「はいはい。貴女本当に口ひるがいわねえ

……くそ、この女。勇者よりもムカつくな。おっと、勇者がまた腕を掴みやがつた。何故わかつたんだよ。

そんな勇者はあたしの腕を掴んだまま、確認のためロックハートに問い合わせた。

「ロックハート、パリシユまであと歩こで二口だつたな

「ええ、勇者。……ああ、そういうえば先ほど、黒鳩郵便で何者かわからない方から便箋が届いていたよ

「なに?」

「ただ、裏にドクロの絵が。……しかもこの絵は

パサリと、テーブルに置かれた小さな便箋。この、ドクロの絵はまさか。

「なるほど。アイツか」

「どうする？ 寄つてもいいが、間違いなく厄介な頼みごとが待つていいと思つよ」

「……はあ。無視するわけにもいかないだろつ。田的でをいったん変えて、オールドビリに向かう」

「わかった。なら、すぐにでも出よつか」

……オールドビリ。そこはかつて 母が住んでいたといふ、町。父上が教えてくれたが……いや待て、何故そんな所へ行くのだ？ だってこの便箋に書かれた絵は 魔界にいたあたしでも知つてゐるほど有名な、あの大海賊のマークではないか。いったい、どんな繋がりが。

あたしが食い入るように見つめていたせいか 勇者は気付いたように、その便箋の封を開け、中身を見せてくれた。そこにあつた手紙に書かれた文字…… それはただ一言、「来い」とだけ。

勇者は言った。

「古い馴染みだ。こちらではけつこう有名な奴でな……一番よく聞く話は？」

「異世界から呼んだお姫様と駆け落ちをした、大海賊。お城に突撃して姫をさらつたんでしょう？ 今はもうその海賊業を止めてるつて聞いたけど」

「……なんだ、知つてるのか」

勇者は驚いたように目を見開いた。あたしが人間界のことを何も知らない、箱入り娘だとでも思つていたのだろう。馬鹿な、これでも努力の末、父上の目をかいくぐつて調べたりしたんだよ。

あたしはその便箋をまじまじと見つめながら、その努力の数々を思い浮かべた。……うーん、父上って、ホントに地獄耳ならぬ地獄目だつたんだよなあ。あとちょっとという所で捕まっちゃうんだ。まったく、どういう目えしてたんだが。……いや、もちろん視力も受け継いだから、凄さはわかっているけれど。

それにしても　かの有名な大海賊が、古い馴染みだなんて。勇者、本当に凄い人だつたんだなあ。

大海賊……その名も“クレイジーブルーキャット”、通称、お騒がせな海の猫とも呼ばれているらしい。いろいろ呼び方はあるのだが、今のほうが個人的に気に入つてたのもあり、記憶していたのである。

彼らの船長エーファンという男。昔、それはそれは女つたらしな奴だつたらしく、聞くところによるとまさに“女の敵”と言われそうな人格の人間だつたんだとか。

そんな彼の目に現れた一人の少女 サヤコと呼ばれた異世界の人間は、ちょうど城から逃げたとして来た真つ最中だつたらしい。噂では、異世界にただ一人残された妹が心配だつたから抜け出したとか。

そんな出会いから始まつた二人、様々な障害があつた末 エーファンの方がいつの間にか少女を溺愛し、それに気付いた少女もだんだん惹かれていつた。

しかし突如現れた城の人に船員の人質を取られ、泣く泣く城へ。

愛する我が女を助けるべく、エーファンは城に挑戦状を叩き付けた そして命からがら抜け出した少女とエーファン、そして一緒に戦つた船員達。

長い航海を経て、少女が出した結論は やはり、元の世界へ帰らねばならないという言葉だつたらしい。

少女とエーファンは約束を交わす 「いつか必ず、お前の世界にも名が轟くような海賊になつてみせるから。それまで……男は絶対つくんなよ」 「ええ、私は貴方のせいでもう他を愛せないもの。

「いつまでも待ってるわ」……。

なんて夢のような話だらう。初めてこれを聞いた時、少しうるつと来てしまったほどだ。まったく、いい男じゃないかエーファン！ 人間だけど、嫌いじゃないよそういうの。

あたしは想像に胸を膨らませる。たしかあの後エーファンは、海賊業を休業してると聞いた。何故かは知らないが、いやあ、まさか生で会えるとは、サインとかもらえないだらうか。

会えたらちよつと頼んでみようと思つていたら、何故だか勇者があたしをジットリとした視線で見つめていた。……なんだよ、氣味が悪いな。

視線が合つた事に気付いた様子の勇者は、そのジットリとした視線のまま、恨みがましく言った。

「人間界のことなのに、何故エーファンを知ってるんだ」

「……？ まあ、有名だつたから」

「けつこう詳しそうだが？」

「……そりや調べたし」

「何故調べる」

「あ？…………何故って…………あ…………」

「…………」

「…………特に、理由は、ない」

「嘘だッ！」

「やめ……」

「ななな、なんなんだ！？」

急に覚醒をした勇者に驚き、あたしはこいつの間にか横になっていたマリノベールに、ギュッと抱き付いた。

「わつ、嬉しい！ 私を頼ってくれた！」

「…………」

「なーにー勇者ー、羨ましこのあー、ふつ、ドーマンドーマーー。」

「……三木の時道端に落ちていた小石を鳥のフンと間違え　　」

「ちよーーっとお、タンマアーー！　勇者アンタ、それ卑怯よーー。」

……フンと間違え、なんだ？　凄い気になるぞ。

しかしいいのだろうか　こんなに馴染んでしまって。今でも、勇者達が同胞を殺したのを覚えているというのに……いやでも、父上は人間に戻れという事を望んでいるだろう、いいんだ、これで。

あたしは吹き出る想いに蓋をして　立ち上がり、窓の外を覗いた。きっとここにいて、あたしはいつの間にか魔族だったことも忘れていくのだろうか。この先には、いったい何が待ち受けているのだろう……？

一人、打ち寄せる孤独に苛まれながらも、あたしはボーッと町を見た。

……人間の住む、小さくも大きくもない、普通の町。平々凡々と生活をして、戦う事さえも忘れていく　平和な奴等。あたしは、ソレになってしまつところのか。……なんと皮肉なのだろう。

道を行き交うひとごみを見つめていたあたしは、自然と溜め息を吐いていた。……あたしも、最初から人間だったら……今こんなに

苦労することはなかつたんだろうか。いや、でも、あたしは父上といられて幸せだつた。だから……これでいい、ます。

……ああ、わからない。いつたい何が正しい？ こう迷つてしまふのも、やはりあたしが元は人間だから……なのだろうか。まったく、本当に皮肉だな。

無邪気にフラフラ走る子供を見つめながら あたしは再度、溜め息を吐いたのだった。

ん？ フラフラ、……？

あたしはその、危なつかしく走る小さな少年を見つめて、小首を傾げた。父上の視力のおかげでハツキリと見える、その少年の顔。あの子は

「ガ ガル！？」

突如叫び出したあたしに驚いた、勇者達。しかしあたしはそれに反応は返さず、ただフラフラ走る少年 ガルを見つめていた。

……ガルは、相当疲れているのであろう。走るというより、早歩きといった速度で……精一杯身体を動かしていた。そして度々、町の人には「助けて」と問い合わせている。……傷だらけの、まま。

勇者達の、止めるような声。あたしはそれすらも無視して 悠々と窓から飛び降りた。そして倒れる直前だったガルを、抱き留める。

「ガ、ガル！？ どうしたのその傷 ！」

「あ……その声……は……、フィーリアお姉、ちゃん……？」

声にだそうとして、あたしは胸を詰まらせ、その口を閉じた。
……なんということだろうか。ガルは……今、目が見えていない。失明してしまったようだ。

……何故、人々はガルを助けなかつた？ 皆、見て見ぬフリをしている。こんな幼い子供が……傷だらけで叫んでいたと、いうのに。

ガルが、ハーフだから？

「あ……姉、ちゃ……」

「ガル……つ、喋つたらダメだよ。手当にするから大人しく……」

「お姉ちゃん、ん……助け、て……お父さんと……お母、さん
が……」

あたしはその言葉に驚いて、手当てをしようとした手を、止
めてしまう。

「ガル……なんでそれ」

「……えへへ……知つてゐる、よ……？　だって……」

ぼくの、パパとママだから。……ガルはそう言つて、にへりと笑
つた。

……ガルの「助けて」という言葉で、だいたいわかつてしまつた。
間違いなくガルは、ドゥルーダムの連中に襲われたんだ。そして、
あの夫婦はガルだけでも逃がした……と。

あたしは自然に流れていた涙を、乱暴に拭う。泣いてる場合、じや
ない、ガルが助けを求めてるんだ……あたしが何とかしなくては。

あとを追つて来た勇者達。その中にいた幼い聖女……プリエステルは、ガルを見た途端顔色を変え、すぐさま回復魔法を掛け始めた。

「酷い出血です フィーリア様、この子はハーフですね？ 属性はおわかりになられますか？」

「水です」

「わかりました 少し手伝つていただけますか、ロックハート様」

「ええ」

道端。幼い少年を囮み手当てをしていくというのに それでも、町の人間は無関心だった。あたしはそれを見て、自然と呟く。

「やつぱり…… 愚かだ」

「…… フィーリイ？」

勇者が問う。

しかしあたしは、続けた。

「人間の行動が 理解できない。半分とはいえ、同族だろう？」
何故無視できる

「……」

「何故 何故、なんだ。まだ年端もいかない、こんな小さな少年が…… 傷だらけで助けを求めていたというのに」

「フィーリイ……」

「あたしには……！ わからないつ……何故、何故そんなに非情で、愚かなんだ！！ どうして無関心になれる！？」

「……」

「人間には……“心”がないのか……！？」

乱暴に拭つたはずの涙が、一つ、また一つと……地面に吸い込まれていった。もう拭うことすらも忘れて、あたしはただただ嘆く。

人間は愚かだ。魔族とは違い、平氣で同族を殺める事ができる。むしろそれが生き甲斐と思う輩もいて、“心”が不安定な生き物なんだ。しかし……それもまた、悪いところと決め付ける事はできない。だから、人間は面白い。

……父上が昔、そう教えてくれた。だからあたしもそう思うようにした。でも、あたしにはわからない……“人間は面白い”？面白くなんかない。人間は、ただ非情で非道、魔族よりも魔族らしい……悪魔のような存在だ。

あたしにはわからない。何故子供を簡単に見捨てられるのか。

……わかりたくも、ない……。

「……くつ、ダメです……なにか強い呪いが？　いえ、呪いの反応ではない？　これはいったい……！」

「プリエステル嬢、出血が止まりません。このままでは」

あたしは、ガルに近付き……跪いて、言つ。

「ガル、聞える?」

「……！ フィーリア様、お下がりください……」の子は多分も
う喋る事も……」

「……聞え、る……よ……お姉ちや……ん

あたしは、涙を堪えながら、続けて言つ。

「あたしはね、実は……魔王の娘だったの」

「魔王……の? へ、え……やつぱり……お姉ちやん、は……凄
い……なあ」

ポタポタと落ちていく、あたしの涙。ガルの血だらけになつてい
る頬に、滴り落ちていく。

ガルは、呟いた。

「あれ……？ 雨、が……降つて、るん……だね」

「つ……うん。ちょこっとね」

「そつ、かあ……。お父、さんと……お母さん……だい、じょぶ
かな……」

自分の命が消え掛けている時に、何故この子は人の事を心配
しているというのか。何故非情な人間が溢れかえる土地で……こん
な純粋な子が、死にそうになっているというのか。

人も、世も、すべてが無情すぎる。

「あのね……ガル

「……うん……？」

「ガルは多分、もう……生きられないかもしね

「！？ フィーリア様！」

「 ガル。生きたい？」

あたしはブリエステルの言葉を無視して、ガルに問う。

「…………う、ん…………生きたい…………よ…………」

「…………方法は一つだけ、あるんだ」

「えへ、へ…………知つてる、よ？ 使い魔…………だよ、ね…………」

「！」

「ほぐ…………いつぱいべんきょ、したんだあ…………」

あたしは、我慢さえも忘れて ただ泣いた。

使い魔。それは魔族が、同じ魔族を従える…………召喚の術のようなもの。契約をした仕える側の魔族は、その時点で成長を止め……

……契約者が死ぬまで、絶対に死ぬ事はできないと言う。しかも契約者の魔力の力に比例し、身に着く力は違う。ガルはハーフだが、曲がりなりにも“夢魔”的子。夢魔は昔から、使い魔として適任な人材だ。人間の血が入つていようと、抵抗は薄いだろう。

あたしは 今度こそ、涙を拭いた。

「 ガル。ううん、ガルガント」

「……うん……お姉ちゃん」

「ガルガントには、その覚悟がある?」

……ガルは。

先ほども浮かべたような、気の抜ける笑いを浮かべた。

「え、へへ……。ある、よ……」

「……やり方は、わかる?」

「呪文……の、こと……? うん……いつ、か……なつてみたい

なあつて、思つて……覚え、たよ……」

あたしはそれを聞き、迷う事なく 自らの腕に切り傷を引いた。
そして、傷だらけなガルの腕を……そつと握る。

「一緒に、ね」

「う、ん……」

あたしは瞼を閉じて、滑らかに、その呪文を唱えた。涙を流さないよう、悲しみで声を震わせないよう 必死に我慢をしながら。ただ、ひたすらと。

ねえ、父上。あたしはね……やっぱり、人間として生きていくのは 不可能なんぢやないかって思うの。だってね、人間ってホントにあり得ないんだもの。平氣で同族を見捨てられるのよ? 笑っちゃうよね。

……あたし、理解……できないよ。たとえ人間でも、あたしは子供だけは見捨てなかつたと思う。なのに……人間は子供でも、魔族を平氣に殺せちゃう。まるで、虫のように。

その違いは……何？ それは、ここで暮らしていたらわかることなのかな。あたし……わかりたくないな。

長い長い、呪文のあと。

白い光に包まれたガルは……小さく瞬いて、あたしの胸の中へと収まつていった。途端に感じるのは、様々なガルの感情。

両親に対する心配、愛情、悲しみ そして、人間へ対する……憎しみ。小さな身体で、ありとあらゆる感情を一纏めにしていたガルの心は。今、あたしとともにいる。

……大丈夫だよ、ガル。あたしが絶対に、一人を助けるから。

そう念じたら、心なしか ガルがホッと笑った気がした。

「フィーリア様？ 今のは ？」

「フィーリアちゃん？」

「お姫様 」

「 フィーリイ？」

プリエステル、マリンベール、ロックハート、そして 勇者の声。あたしはゆっくりと瞼を開き、降り注ぐ太陽を見つめて……言った。

「愚かなる人間に、復讐を」

あたしは立ち上がり、歩き出した。
勇者がそれを、止める。

そう、結局はわかり合えないのだ。何故ならあたし達は 人間と、魔族なのだから。

「フィーリイ、落ち着くんだ。俺達も行く」

「驕るな、人間。お前達無能に何ができる？ それとも今度はあたしを殺すつもりか、愚かな人間め」

「……！ 違う！ 聞くんだ、フィーリイ！！」

「触るなといつただろう。 吐き気がする」

もう、止められない。

ガルから流れ出る、人間への激しい憎しみは やがてあたしへと感化し、元からあつたあたしの憎しみと同調し、そして溢れ出る。止められやしない。止められないんだ。

あたしは、フィーリア・エンジェル・マールヴォロ・オコナムカ。魔王の意志を受け継ぎし 魔族の子。人間と馴れ合つなど、許されない。

「わかった。フィーリイ」

「勇者様ー!? なにを言つておられたのですか！ フィーリア様、落ち着」

「ブリエスティル。……いいから」

勇者はブリエスティルの言葉を遮り、あたしを見据えながら言つた。

「フィーリイ」

「なんだ？」

「…………お前の憎しみ、全部俺に譲つた。その全て、俺が受け止める」

「ふ、勇者！ アンタ何言つてんのよーー！」

「黙つてくれ、マリンベール。……さあ、お前の憎しみをよこせ」

あたしは、勇者を冷たい表情で見据える。

魔族の撃。血縁や親しい者が辱められ、または命を落した場合。その者を……殺しても、いい。ならば勇者も……その対象者なわけだ。

ゆつべつと上がる右腕 あたしは、勇者へと伸びた。

伸ばして。伸ばした手を……あたしは、ためらわせた。あと
ちょっと伸ばし、その首を捻れば 勇者を殺せるというのに。あ
んなに殺したいと思っていた勇者に、好きにしろと言われたのに。

……何故、ためらう?

「 フィーリイ 」

「 つ…… 」

「たしかに、俺も人間だ。魔族のように強い心は持っていない」

「 …… つ、喋るな…… 」

「 だけど、フィーリイ。俺達はそれでも、生きている。こう
いう生き方で、自然と折り合いをつけてるんだ。人それぞれ……い
ろんな性格をしながら」

「 黙れ…… 」

「だから……“人間”という括りでなく、“個人”を見てくれないか？」
「フィーリイ」

伸ばした手を掴まれて、ギュッと握られる。そしてその手は、そのまま勇者の胸へ移動した。ドクンドクンと伝わる、鼓動。あたしやガルと変わらない、緩やかな、リズム。

「つ……うう……」

「！ フィーリイ」

「あたしは……！ それでも、わからない！ 何故……どうして、大切な人を殺され、その殺した者を八つ裂きに殺してはいけないのか！ 何故だ！ 答えろ勇者！－！」

規則正しく鼓動する、勇者の“命”。

何故彼らは大事な人が殺されて、我慢ができる？ 何故我慢をする必要がある？ 悔しくないのか？ 苦しくないのか？ 悲しくないのか？ ちっぽけな存在のくせに、何故そこで我慢をする？

それほど、人間には“心”がないのか？
……。
れよ、勇者……。

答える。答えてく

「憎しみは、怖い」

「……怖い？」

「ああ。自分のせいで憎しみに囚われ、歯向かつたとして……そ
の人はもしかしたら、死んでしまうかも知れない」

俺は、それが一番怖い そう呟く勇者の心臓は、少し不規則に
振動していた。それが、“怖い”という意味。

「憎しみのあとに残るのは、絶望だ。それを果たすまでは生きる
希望があつても、その後にはなにもない」

「なに、も」

「そり。……なにも」

それが、人間の考え　いや。“勇者の”、考えなのか。

そうか……勇者という人間は、“その後”を考えるのか。“今”ではなく、“続き”を。

その答えに衝撃を受けるあたし。

……考えてもみなかつた。人間は短い命の中、そういう結論に辿り着くのか。短いからこそ“これから”的に、“我慢”をする。そういう……ことなのか。

あたしも、一応は人間だ。寿命は奴等と変わらない。だけど魔族として育つて来たあたしには　考えられない事。そんな導き方が、あつただなんて。

そうか……これが父上の言つていた、“人間は面白い”という意味か。たしかに　面白い、な。

ガクリと膝をつくあたしに、勇者がそつと近寄つた。頬に伸ばされた手を払う事もできないあたしは……ただ静かに、涙を流した。

そして、ポツリと呟く。

「それでもやつぱつ……憎こみよ……殺してやりたい……」

「…………」

「どうに持つてけばいい?……消えてくれないんだ

勇者は、頬を撫でる手を……ゆっくりと頭に持つていく。

「消さなくていいんだ。胸に刻んで、一生忘れるな。そして沢山刻んだら、殺す以外の方法を探そう」

「…………殺す、以外の…………?」

「そうだ。死んだらそれで終わり、後悔や恐怖に苦しんで、改められる事ができない。……どうすれば奴等がコツテリ反省するのか、一緒に考えよつ」

そう言つて 勇者は。
あたしに、手を差し延べた。

「復讐をするなとは言わない。“命”を奪わない復讐をするんだ」

「命を……奪わない、復讐」

「そう。後悔させなきや、意味がない」

勇者はそう言つて……少し意地の悪そうな笑みを浮かべた。あたしはそれを見て、クスリと笑う。

……オイオイ。まつたく、勇者がそんな悪役みたいなこと言つていいのかよ。ああ、そうだった。勇者は世界一勇者らしくない人、だつたつけ。

あたしは差し延べられた手を掴んで、立ち上がった。うん、父上、あたし決めたよ。“人間”を許すんじやなくて……まずは、知ろうと思う。そして人間を、じやなくて“勇者”を。少しづつになりそうだけど……頑張つてみるよ。

“ごめんねガル。こんな勝手な主人で……許してくれる?”

ガルが言った。

「フィーリアお姉ちゃんと僕は、一心同体だから。僕も同じ気持ちだよ」……と。

世界は眩しい。

きっと、近い未来　また今日みたいな日が来るのだろう。それでもきっと、今みたいに勇者があたしを説得してくれる。あたしは、そんな勇者に賭けてみようと思う。憎しみを無くすことは出来なくとも、少しの間……“忘れ”られるように。頑張ってみようと思う。

眩しい朝日を身体中に吸収したあたしは　氣合を入れるために、自らの頬をぱちんっと両手で叩く。さあ、いひしけやいられない。早く、ガルの両親の元へ行かなくちゃ……

あたしはぐるりと背を向けて、勇者に言った。

「ほら、ちゃんとしないで行け」ガルの両親助けなくちゃ

「……」

「ふ　ああ、そうだな」

あたし達は、走った。田舎はもううんあの孤児院。待つてね、今、必ず助けにいくからーー！

あたしは、勇者と一行とともに、森の奥深くにある孤児院へ急いで向かうのだった。

深い森の中。

あたしと勇者、マリンベール、ロックハート、黄金野郎、プリエスティル、哀れ女は……ひたすら休まずに、孤児院を目指していた。最初、戦闘要員以外を連れて行くのは……という意見も出ていたようだが、「怪我人がいるかもしれない」との勇者の言葉により、結局全員で行くことになつたあたし達。

父上の力が段々馴染んで来た今　　あたしの体力は、ある意味底無しとなつていて、足の筋力も格段に上がつてるので、その気になれば一人で先に向かえそうだ。

父上が、こんなに凄いとは思わなかつたが……、それを追い詰めた勇者は、どれだけ凄いのだろうか？　想像すらもばかられる。

あたしは一人勇者に恐怖を抱きながらも、やはり凄い奴だと心中笑つてしまつた。やはり勇者とは、こうでなくちゃ。

ひたすら走る中　　その勇者の背を見つめ、しんみりと思つ。

そんな勇者が何故か突如立ち止まり、行つた。

「来るぞーー！」

素早く反応したあたし達。マリンベールは勇者の右横へ 黄金野郎は左横へ行き、援護を。ロックハートは後方支援の一人を守る態勢に入った。しかし先に“ソレ”に気付いたあたしは、叫ぶ。

「戦わなくていい！ ソレはあたし達を敵にしてないから、ワキに避けてれば問題ない！！」

その言葉に反応した勇者達は すぐさまワキに避け、迫り来る巨大なモンスターを顔面蒼白で見送った。

……今のは『デカイ』。戦ついたら、多分無駄に時間が掛かっていただろう。すぐに反応をしてくれる連中でよかつた。

再び難なく走り出す最中 不思議そりに、プリエステルが質問してくれる。

「何故、わたくし達を狙つてないとおわかりに?」

「え? だつてモンスターは、自分を生み出した親を殺すためだけに生まれたんだから。当然でしょ?」

「親?」

勇者が聞き返す。

その反応に、あたしはもしゃ と勘ぐつた。いやでも、まさか。モンスターの出生を知らないなんて……そんなわけがないよね? いくらなんでも、自分達がその“原因”なのだから。

しかし、その疑惑は正しかつたようだ……。未だ不思議そつとするプリエステルのかわりに、ロックハートが問い合わせてきた。

「お姫様、いつたいどうじう ? 親とはいつたい 」

「……え? 貴女はエルフ族でしょ? いくらなんでも貴女は知つてゐるはず 」

「……申し訳ない。私は、人間に育てられたんだ」

人間に……そうだったのか。いやでも、これは人間も知ってるものだとばかり。

とりあえず、人間がモンスターにたいして持つていてる知識とはどういうものなのか、あたしはそれを知るため まずはそれを聞き返した。

それに、哀れ女が答える。

「モンスターって言つたらあ、アンタら魔族が生み出して人間を襲つよう仕組んだんじよ？ それ以外になにがあんのよ！」

「お前ら人間は、それを眞面目に思つていたのか？ …… そこまで無知とは思わなかつた。どうしてトコトン馬鹿なんだ」

「なんですつてえ！？」

「ううう、と。哀れ女の横でロックハートがなだめた。

素直にその馬鹿さ加減に感心してしまったあたしは、なんだか無性に疲れてしまい、ポロリと口にする。

「はあ……。人間つて凄いな……」

「……、まあ、人間は短命だからな。知らされる知識なんて魔族ほどない、と言つ事だらう。フィーリイ、教えてくれ」

勇者のその言葉を咀嚼し　そして、反芻する。人間は短命……だから知らされる事が少なくて、多分、知らされても曖昧になる。そういうことなのかな。

……溜め息を吐いたあたしは、諦めたように説明を始めた。

「　モンスターは、魔族が作り出した物じやない。人間が作り出した物だ」

「えええつ！？　人間！？」

マリンベールが、驚きに叫ぶ。

「そう、人間。モンスターの根源。それは、人間から生まれた負の感情。妬み、憎しみ、悲しみ、怒り……様々なものだ。魔族にももちろんある、でもそれは割り切つたものだからすぐ切つて捨てるんだ。でも、人間はそうもいかない」

あたしの説明を聞く勇者達は、皆呆然としていた。本当に予想外だったのだろうか。そんなところにまた、呆れてしまう。

モンスターの出生、それは人の骨だけとなつた屍に、負の感情がこびりつき、やがて借り物の命を得てしまつことから始まる。そして、そのモンスターになつてしまつた屍は……借り物の心つまり負の感情を元に、産みの親を襲いにいくのである。

「何故、こんな醜い姿で生み出したのだ」……と。

「だからモンスターは、下手に刺激さえしなきや……襲つて來たりしない。アイツらが殺したくて堪んないのは、産みの親。ただ一人なんだから」

……まさかそれを、“原因”である人間が知らないとは思つても
みなかつた。あたしもそつだし、多分父上も……てつくり知つてい
ると、そう思つていただろう。そりや思つはずがない　自分の責
任なのだから。

まさか、魔族に責任転嫁されているのは……うん、面白いや。多分。

……しかし、それを信じる事が出来なかつたのだろう。哀れ女が、
またもや哀れ発言をする。

「そ　　そんな嘘よ！　ハッタリだわ！」

「……はあ。じゃあ、アンタの説明によるとモンスターは人間を
“見境なく”襲うらしいけど。さつきのモンスターはなんだつたの
？」

「そつ……それは」

いた。

「ほら、出ない。……モンスターの姿形の禍々しさ、あれが人間の“心”的表れだ。そしてモンスターになつた“元人間”は、醜く親に襲いかかる」

お似合いじゃないか、と。あたしはそう吐き捨てた。

だから、あたしは何度も言ったのだ “人間は、同族同士で殺し合いをする”……と。モンスターも名前が違うだけで、元は人間。それを醜いから化物だと言って、人間は打倒す。それが自分達の“表れ”だと気付かずに……醜いのはどつちだ、つてね。

あたしは溜め息さえも吐くのが億劫になるほど、精神的に疲れてしまつた。

「勇者が言つた通り 人間には人間の、“我慢”に美学があるんだとは思つ。でもそんな我慢の先にあるのが、……モンスターだ」

「……」

「ただの我慢だけで済むならいい。それを、募り募つて“悪意”に持つていかないようにさえすれば。……モンスターは言い換えたら、“悪意”の塊なんだよ」

それが モンスターの正体。それを聞いた勇者達は、しばらく黙り込んでいた。あたしは走りながらも、その沈黙を静かに受け取る。

……勇者があたしの、人間に対する憎しみに 考える時間を与えてくれたように、あたしも待つてやろうつじやないか。それがあたしに出来る、勇者への……恩返し？ みたいなやつかな。

しばらく沈黙したのち。

不意に、黄金野郎が口を開く。飄々とした雰囲気はなく 至極、真剣に。

「魔族はそれを……いつから知っていた？ 君はそれをいつ知ったんだい？」

「いつから？ ……さあ。当たり前のように知つてたから、正確

には覚えてないけど」

そう、勝手に染み込む 普通一般常識のようだ。あたしはそれを、最初から知っていた。それが……当たり前のことだつたから。

だから、人間がまさか知らないとは……。今さつき知った新事実に、勇者達だけでなくあたしも呆然としてしまつた。父上もし生きてて、今を知つたら……多分タレ目がタレ目じやなくなるほど見開いて、「そんなバナナ」とか呟くのだろう。

……あ、そんなバナナとは、異世界に伝わる“ダジャレ”というもので、ちょっとしたギャグみたいなものらしい。何故バナナのかは知らないが、聞くところによると基本的ダジャレとは年齢が上になつてきた者しか使えない、高等ギャグとかで 笑えるか笑えないかの瀬戸際を楽しむ、非常にシユールなギャグだという。これで笑いがとれたら、その日絶対にいい事が起きるんだとか。父上はショッちゅう試していたが、あまりにしつこかつたので大臣がキレたりしてそれはもう大惨事に つて、そんな話はどうでもいいんだ。

心の中でクスクス笑うガルに気付いたあたしは、今は孤児院に向かう事を考えなければ……と気持ちをすりかえた。

フルフルと頭を降つて、父上の生み出した様々ダジャレを外に追い出す 中毒性があつてなかなか離れないため、あたしは自分と小さな戦いに励んだ。ちょっと、ガル、今の「シユールにならないようにしゅるんです」はなかなか可愛かつたぞ！ 父上よりも上出

来じゃないか！！

そんな、真剣味の足りなくなつてくるあたしとガルの横では
かなり真面目な表情をして、勇者とプリエステルが会話をしていた。

「王国に帰つたら それを伝えねばな」

「わたくしも一緒に伝えれば、きっと信じてくれるでしょ。し
かし驚きですね……モンスター出生にそんな内容があつたとは」

「ああ。……これも、フイーリイのおかげだ」

名前を呼ばれてハツとする。……いかんいかん、いつまでも永遠
にふざけるわけにはいかない。しつかりしろ、あたし。

「まだまだ人間が知らない不始末がありそつだ これからも、
度々教えてくれるか？」

「え？ ああ、うん、まあ……聞いてくれなきゃあたしもわから
ないけれど」

人間が何を知つてて、何を知らないかなんてわからないし。あたしはそう咳いて、肩をすくめた。

その代わりに今度、人間界でオススメの食べ物を教えてもらおうか。魔王城での料理ももちろんうまかったのだが……基本的にあたしは、人間界の食べ物も食べてみたいと思っていた。ちなみに魔王城の料理は、父上の好みで毎回“和食”というものだった。母直伝なんだそうな。

あたしも作れるのが“和食”だけなので、やはり一応女としては他の料理も勉強しておきたい。人間界は基本“洋食”と聞くけれど、いつたいどういうものが洋食なのだろう。……え？ ガル、なんで驚いてるの。“和食”とは何、つて？ 人間界にはないの？ うそ、あると思つてたのに！

「 そろそろだ。みんな、隊列を組め」

勇者の指示するような声。気持ちをきりかえたあたしは、口をキュッと一文字にした。……ガル、準備はいい？ 殺さずに復讐、頑張ろうね。

先頭に勇者。その真後ろにはあたしがいて、あたしの両横にはマリンベールと黄金野郎が。その後ろには、ロックハートに守られる後方支援の二人。キッチリと組まれた、完璧な隊列。

あたし達は森を抜け とつとう、孤児院へ躍り出た。そこで見たものとは……。

「……ひ……ど、い……」

小さな声で呟く、マリンベール。……そうか、彼女は孤児院育ちだと言っていたか。それならば、この中でかなりダメージを受けているといつても過言ではないだろう。

あたしは面影すらもなくなつた、孤児院の 跡地を見つめて。一人呆然と涙を流した。

ダジャレは高等ギャグなのです。

それを教えたのはもちろんフィーリアの母（笑）

孤児院があつた場所に呆然と佇む、あたし、そして勇者達。田の
疑う光景に何の言葉も出ないあたしは　ただひたすら、この惨事
について考えた。

これは……どういうこと？　ねえ、ガル　　ここから逃げて來た
時、すでにこじうだつたの？

その言葉を受け取つたガルは、突如目の前に姿を表した。小
さな光に包まれて、あたしは初召喚を果たす。いきなり現れた傷だ
らけだつたはずの少年に驚いた勇者達は、咄嗟に戦闘体制に入つた。

あたしはそれを「大丈夫」と阻止し、目線が合ひつようにならむ。

「ガル

「うん、話すね」

ガルは、今まであつたことを たどたどしく話した。

朝方、大きな物音で眠りから覚めたガル。横にあたしがいのに気付いて下に降りたのだが そこにいたのは、何者かに捕らえられている両親。一人が自分のために頑張っていることを知つていたガルは、すぐさま飛び出したらしい。しかし大人と子供では力に差がありすぎて、ガルは一度そこで気を失つてしまつた。起きた時には、自分は外にいて、孤児院はこうなつてしまつていたんだとか。

両親は自分の横で悪者に見張られながらグッタリしていただが、ガルが気付くとわかりすぐさま言った 「ガル、お前だけでも逃げなさい」、と。即座に首を横に振つたガルだったが、ギルヴェールさんの魔法により……ガルはあの精霊のいた泉へ飛ばされてしまった。

精霊に助けを求めたガル。だが精霊はどちらの味方もしないというのを知らなくて そうしている間に、数人の悪者に囲まれてしまつたんだとか。しかし、ガルはこれでも夢魔とのハーフ。目の前には湖があり、自分は水の属性 なんとか抵抗はしたものの、無傷では勝てなかつたらしい。

でも、今こんなところで弱つている場合じゃない。ガルはいつの日か、二人を本当の“お母さん”と“お父さん”と呼ぶためにこの状況をなんとかしなければ、と考える。そして出た行動は……町の人々に、助けを求める事だつた。

「僕ね……町の人達に、嫌われるの……知つてたんだ」

「……ガル」

「でも、きっと助けを求めれば……手助けしてくれると思つてて」

「……」

「でも、やつぱり嫌われ者だったみたい」

えへへ、と。今にも泣きそうな顔をして笑うガルが　そこには
いた。

「あ　でもね、今はそれでよかつたって思つんだ」

「……え？」

「だつて、フイーリアお姉ちゃんに会えたんだもん！　……フイ
ーリアお姉ちゃんだけが僕に声をかけてくれた。それに、小さな夢
も叶えてくれた」

小さな、夢。

それはガルと同調していたあたしから……わかる事。ガルは、いずれ使い魔になつてみたいと思ってたんだもんね？ 使い魔になるか聞いた時も、たしかそう言つていた。

なんて優しい子なんだろうか。きっとガルは、あたしがガルを使い魔なんかにしてしまつた”と感じているから……わざわざそう、言つてくれたんだよね。まったく、そこまで優しくしなくてもいいつてば。

あたしはガルを撫でて、これからのことを考えた。

少し前までは、たしかにここにガルの両親がいたはず。ならば、いつたいどこに連れていかれたのだろう？ 並外れた嗅覚で匂いを追いたかつたが、残念ながら 魔法ではないなにかで破壊された孤児院からは、酷い匂いが立ち込めていた。これでは嗅覚が使えない。

くそ、鼻のつく匂いだ。しかしどうやら、人の焼ける匂いだけはないことからして……孤児院にいた全員は、連れて行かれたと考えていいだろう。少し、ホッとした。

あたしは孤児院を眺め回しながら 何かないか、と思案した。奴等はどちらへ向かつた？ 国に戻つたか？ いや、でもここからドゥルーダムは遠いと勇者に後から聞いたし ならいつたい、何処へ？

そんな時だつた。

勇者が唐突に、「モンスターだ」と言つたのは。そんな気配がなかつたので驚いたあたしは、ガルを抱き締めて逃げる準備に入った。しかし、いつこうに現れない。疑問符を浮かべるあたし達。

そんな様子のあたし達を見てか、勇者は氣付いたように「すまない、そういうことじゃないんだ」と言つた。……じゃあどういうことだ？ 視線で問うあたしに、勇者は先ほど説明したモンスターの話を蒸し返し始めた。

「モンスターは、負の感情　　“悪意”から生まれるんだつたな

「え　うん、そうだけど」

「じゃあ……これだけの大惨事が起つたんだ。さつきのモンスター、もしかしてついさつき生まれたんじゃないか？」

続けて、勇者が問い合わせる。

「モンスターが生まれる瞬間というのは、いつたいどんな時だ？」

「……！ 戦争とか、命が多く……奪われた時。それも卑怯な手を使って、恨みを買うと なおさら」

……そう、つまりは。

“恨み”を強く感じたら モンスターは生まれる、ということ。さつきのモンスターはデカかつた……きっと、様々な人間の小さな恨みが募り悪意となつて 生まれたのだ。生み出したのは多分……子供や、敵の大人達。

あたし達は身を翻した。もちろん向かうのは、先ほど出会ったモンスターの向かつていた方角。

ガルを胸に抱いたまま、あたしは我先にと走る。人間の子供が生み出したモンスターほど 怖い物はない。純粹だからこそ……正直なんだ。早くしなければ、人間の言つモンスターのように“見境なく”なつてしまふ ！！

「勇者あッ！ 時間がない！ あたしはガルと一緒に先に行く！」

「！ 待て！ それならせめて ロックハート、お前なら フィーリイの足についていけるな！？」

「ええ！」

「フイーリイ！ ロックハートと先に行けーー！」

あたしは頷いて、走るスピードを早めた。ロックハートはその後ろで、しつかりついてくる。

「急ぎましょう、お姫様！」

「もちろんーー！」

願いを込めながら あたしとガル、そしてロックハートは……モンスターに向かつっていたであろう道のりを走る。

簡単に引き離されていく、勇者達 だが今はなんとしても、ドゥルーダムの連中に追いつかなくては。

ガルを抱えているあたしの横。ピッタリとついてきているロックハートが、不意にあたしへ問い合わせてきた。

「お姫様、貴女は戦闘要員とみて大丈夫かな」

「もちろん ！」

「お姫様の戦闘体型は魔法でよかつたね、属性は？」

「あたしに属性はない。でも、今はガルのぶんの力がかさ増しされてるから 水系が一番得意かも」

「オーケー。なら、私と相性はピッタリだ。私は雷だよ」

「 ！ たしかにピッタリ」

あたし達は互いの得意な魔法、体術を教え合い、これから起ころう戦いのため 気を引き締めた。

……ドゥルーダムの目的、それは間違いなく、ガルなんだろう。ならば、ガルは隠して置くべきだろうか？ もう一度あたしの中に戻つてもらつて いやでも、ふとガルを再び召喚した時、使い魔になつたと知れたら……かなり面倒だ。間違いなく、あたしまで標的にされてしまう。そしたら勇者達にまで迷惑がかかる。

それに……。

「お姉ちゃん、僕、自分で言ひつよ？……お母さんとお父さんには
んに

「ガル……」

「僕はもう人間として暮らせないし、成長も出来ないけど……でもまだ生きられる」

……でも、きっと二人は悲しむのだろう。大事な息子が使い魔として、一生を拘束されるだなんて。あたし、二人に顔向け出来ないよ。

ガルを抱える腕に、少し力を込めながら あたしは二人への罪悪感が募つた。使い魔なんて、魔族にはあんまり良い印象がないからね……。主人の命令は絶対服従だし、だからと言って主人が死ぬまで命は拘束されるし、なにより成長出来ないし。子供のガルは……精神は成長しても、このままとなってしまう。

少し、見てみたかったな。……大人になつた、夢魔として少しエロくなるガルを。

……。

残念な性格だな、あたし。

「……！ お姫様」

「？ なに？」

「見えるかな？ ここから数十キロ先で、先ほどのモンスターが……黒装束の者達と戦っているのを」

それを聞いたあたしは、すぐさま注意してそちらを伺つた。見えるのは……ほんやりと浮かぶ数人の、大きな影。いくら視力は上つたとはいえ……やはりエルフには敵うまい。「若干」と答えるあたしに反応したロックハートは、詳しく説明をしてくれた。

どうやらロックハートによると、その黒装束の奴等は馬車を背にして戦つてゐるらしい。その馬車から覗いた人影には、数人の子供と傷だらけになつた二人の成人男女がいると 多分間違いなく、ギルヴェールさん達だろう。

見つけた、とほくそ笑むあたし……しかしロックハートの言った次の言葉により、あたしはその笑みを凍らしてしまつた。

「なつ！」

「えつ？ い……いきなりなに」

「い……今、黒装束の奴等の一人が……」

「……うん?」

「……モンスターの打ち出した“魔法”により……死亡した

は? と、声にもならない声を、あたしはあげた。

魔法? そんな馬鹿な……それはあり得ない。今の反応からしてロツクハートも知つてていると思うのだが、モンスターとは……“魔法”を扱えないのだ。あるのは“負の感情”だけで、“知能”はないから。

魔法とは知能から生み出される、高貴なる技。……モンスターに操れるわけがない。多分、火を吹いたかなにかだらう それをロツクハートは見間違えたのだ。

あたしはそう結論づけたのだが、ロツクハートは始終困惑顔それを横目で見ていたあたしは、一つの、“あり得ない”仮説を思い付いた。

「いや……でも、まさか」

「お姉ちゃん、どうしたの？」

「？……お姫様？」

「……いや、あり得ない……まさかそんなことが……」

一人の声も届かぬほど、あたしはその“仮説”にのめり込んだ。

ソレは、あたしが今まで思つて來ていた……“常識”を覆すもので。でも、モンスターが魔法使つたというのがもし本当ならば辻褄が合つてしまつのだ。とても信じられない仮説……あたしはそれを確かな物にするため、ロックハートへと声をかけた。

「ねえ、人間に育てられたとしても、エルフなんでしょう？ 黒い靄みたいなの、見たことない？」

「黒い靄？ それは心臓辺りから溢れ出る……線状の、羽ペンほど大きさのやつかな」

「……うーん。あたしは魔力が桁外れでも、一応人間でハツキリとは見えた事ないから……形状や大きさはわからないんだけど。うん、多分それ」

人間から出る、黒い靄 あたしにはうすぼんやりとしか見えないのだが、普通人間以外の生物にはそれがハッキリ見えていいるという。人間でも見える人つていうのは、多分異世界人ぐらいだと父上が言つていた。

そしてもし……それが人間から出でているのを見た時。「その人はかつて恨みを買つような悪事を働いた者か、相当卑劣な惡意によりどん底になつてしまつた恨み募つた者だらう。絶対近付いては、いけないよ」と、よく言われていた。

つまり、モンスターを生み出す事となつた親……なのだろう。そりやお近付きにならないほうがいいわけだ。だつてとぼつちり食らうもの。

それをロックハートに説明したあたしは、「今、一番濃霧は、誰に見えていますか?」と問う。

ロックハートは言つた。

「黒装束の奴等だね。あと薄く、子供達にも……」

「……なんだ。じゃあ思い過ご」しか

ふう、と。

あたしは安堵の溜め息を吐いて、「あと」と言葉を続けるロックハートの、次に紡ぎだされた言葉に……耳を疑つた。

「 傷だらけの、成人男性からも出ているね。しかもやけにハツキリ、誰よりも濃い」

「…………ま、じ…………で？」

ロックハートは、こくんと頷いた。

魔族が、モンスターを生み出す事は、絶対あり得ない。いや、絶対ではないけれど……もし生み出したとしたら、前代未聞の事態だろう。

魔族は人間のような悪意は持たず、感情に正直だ。人間から恨みは買うかもしれないが、“魔族”が生み出す事だけは絶対になかった……はず、だけど。

もし魔族が……人間を共に住み、その心に“感化”されていたらと

したら？……魔族がモンスターを生み出す事はない、本当にそれが言えるのだろうか。

……確証はない、でも可能性はある。父上が以前教えてくれた事だ 世界に生きている生物は皆可能性を秘めている、と。

異世界には、物理学者という人達がいるらしい。そのとある物理学者は……シユレーーディングガーと書いて、ある“可能性”という言葉を導き出した。

それが、シユレーーディングガーの猫。というもの。

それは物理学というより、哲学？ というものとも呼ばれているらしいのだが……。異世界の理屈はわからない。とにかく頭のいい人間が生み出した話。

まず、蓋付の箱がある。その箱に猫を閉じ込めてから、なんと毒ガスも箱の中に充满させるのだが 普通、その箱に閉じ込められた猫は死んでいると思うだろう。だが、何かが起こり生きてるかもしれない。

生きてると思えばその猫は生きているし、死んでいればその猫は死んでいる。それが……シユレーーディングガーの猫。頭のいい人間が導き出した、答えた。

本当はもつと複雑な内容だつたのだが……要はこんな感じだつたはず。あたしが言いたかったのは、“可能性とはありとあらゆるものを探めていく”、ということ。

父上はそれを語りながら、「私はあり得ないという言葉を信じれなくなつた」と言つていた。そう、だから……あり得ないというと自体、あり得ないのだ。

あたしは過去を思い返しながら、浮かんでいた“あり得ない仮説”を……信じるしかなくなつた。

シユーレー・ディインガーの猫、詳しく述べ……というか正しい説明。

蓋のある箱を用意してその中に猫を一匹入れ、箱の中には猫の他に放射性物質のラジウムを一定量と、ガイガーカウンターを一台、青酸ガスの発生装置を一台一緒に入れる。

もし箱の中にあるラジウムがアルファ粒子を出すと、これをガイガーカウンターが感知して、その先についた青酸ガスの発生装置が作動し青酸ガスを吸つた猫は死んでしまう。

でも、ラジウムからアルファ粒子が出なければ、青酸ガスの発生装置は作動せず猫は生き残る。

一定時間経過した後、猫の生死は？……というのが、シユーレー・ディインガーの猫です。

たしか合つてるはず……間違つてたらごめんなさい。

猫大好きな人にはちょっと酷い話ですね。つまり私もかなりダメージを受けました……。orz

しかも最初シユーレー・ディインガーでなく、シユーリングガーと言い間違えたりしてました……ああ恥ずかしい。

お気に入り登録ありがとうございます。嬉しいトランショングな
ぞ登りになつてまいりました！

ズンドン更新してこまますので、読みにくことは思こますがよろ
しくお願ひいたします！

「……魔族がモンスターを生み出した。前代未聞どころか、新境地すぎる」

あたしはそう呟いて、頭を悩ませる。

魔族の影響を強く受けたモンスターは、多分それなりに知能も受け継いだのだろう。魔法も扱えるわけだ。……どうしようか。これはかなり厄介だ。

まったくギルヴェールさん　　人間の夢魔の初子供誕生だけではなく、魔族の初モンスター誕生までやってしまうとは。アンタ、ホント伝説として語り継がれるよ！　この大バカ！

パニックになるあたしの横で、ロックハートさんもだいたい事態を飲み始めたのだろう。困惑顔のまま、あたしに疑問を投げ掛けてきた。

「お姫様、そんなんに問題なのかな？ たしかにモンスターが魔法を扱えるのは凄いけど」

「……問題も問題、大問題だよ。っていうか問題外」

あたしは言った。

人間が生み出したモンスターは、たしかに魔法が扱えない かわりに強大な属性の力を秘めているせいで、ものによつては……まあ火を吹いたりとするわけで。知能がないから歯向かえば大きな被害が出るし、気性が荒いから手が付けられない……たしかにどちらにしても厄介だった。

でも、魔族が生み出してしまった場合。

……モンスターは少量の知識を得てしまうだろうし、なにより“考える力”があるわけだから、それはズル賢さとかも含まれるわけで。普通のモンスターを相手にしてる時と同じように戦つたら、確実に大目玉を食らう。

人間のように魔法を扱うための媒体や呪文は必要ないし、なにより身体的能力も大幅にアップ。つまりそれに余計な知識があるのだから怪我無しで望むのは、無謀すぎる。

しかも、今は“魔族”的力だけじゃない。人間の子供達の純粹な悪意と、人間の大人の奥深い悪意 今はそれも混ざり合っている。あれを放つておいたら……いずれ、一つの町を容易く滅ぼしてしまうだろう。

それを搔い摘まんで説明したあと、ようやく本当に今の深刻さを理解したのだろう。ロックハートは青ざめながら、「勇者達を待つた方が」と言い出した。

……確かに、来るのを待ちたい。でも。

「……その間に、間違いなく子供達は

死んでる。
そう呟いた。

「……待つのも無理、勝つのも無理。いったことどうすれば……」

頭を悩ませるロックハートは、腰にある刀を強く握り締めていた。

あたしはそれを見て、一言。

「勝つなんて誰が言ったの？」

「……え？ しかし……」

「ボーッと待つんじゃなくて、戦いながら待つてればいいだしね。
勇者達が来るまで、持てばいい」

…………もちろん、それも簡単じゃないのはわかっている。それでも
やうなくては、皆の命が危ないんだ。

同族の尻拭いは、魔王の娘が片付ける…………いや、一人で
勝つよつに臨んでやるわ。

わう言つて苦笑するあたしを見てか、ロックハートは…………関心し
たようにほほ笑んだ。

「……お姫様は、強いね」

「やうへ、まあ…………责任感はたしかに強ことは間違ひナビ

「いや、责任感だけじゃない。心も強によ…………私は戦いとなる

と、さうもね。だからこつも後方支援の護衛をしてるんだ

やう呑くロックハートは、たしかに何かに恐れているよいつに見えた。

心が強い、か。……そつなのかな？

「！　お姉ちやん、見えて來たよ……」

「……うん……やない。ガルは、馬車にこの馬を頼むよ」

「うん。」

「いくよ　ちやんと戯つてね、ロックハート。」

あたしは初めて、口に出して……仲間の名を呼んだ。

「！　ええ、もちろん」

父上……見ててね。

あたし、絶対人間達と馴染んで見せるから。だからそのために戦うよ。

“魔族”の心を忘れずに “人間”になつてみせる…。

「 いつけえええつ…！」

あたし達は、戦場へ躍り出る。

木に燃えうつる炎に熱され、吹き荒れる暖かい風を感じながら。

あたしはガルを後ろに離した。ガルはすぐさま木陰に隠れ、モンスターに見つからないように大回りしながら、馬車へと向かう。それを確認してからあたしはモンスターへと視線を移す。

……黒装束の奴等は、突如現れたあたし達に気付いて、苦い顔をした。いや、あたしを見て、か？どうやらあたしの存在を知っているっぽいな……なんで知ってるのかあとで締め上げて、詳細を聞き出さねば。

「ロックハート！ いつどんなタイミングでこいつが魔法を使うかわからない 大気の流れに気をつけて！ こいつは風と火を扱う！！」

「承知した！」

最悪のコンボだ……風と火だなんて。せめてそこは、ギルヴェールさんと同じ水だけの属性であつてほしかった。この二つの属性はどこから来たんだ？ ……わからない。前例がないだけに、理解しきれない。いつたいどんな作用があるのか。

あたしは同じく風の魔法を操りながら、モンスターが同じく風を操るのを防いだ。せめて風だけでも扱えないようにしないといつ炎を合わせて、周りに広げるかわからない。

時たまに水の魔法で応戦して、あたしはモンスターの注意を引いた。今だけは黒装束の奴等と手を組まねばならないだろう 奴等もそれがわかつていいのか、うまい具合に援護に回りはじめた。

ああ 勇者、早く来い！ モタモタしてると裏切るぞーー！

「くつ う、わああつーー！」

その時だつた。

三人いたはずの黒装束の一人 大柄な男が、突如悲鳴を上げて倒れこんだ。そしてそのまま痙攣をして……動かなくなる。

モンスターにやられた？ ……でも確實に火ではいし、風も防いでいる ならば今、モンスターは“なに”をした？ いきなりだったので、あたしはまったくそちらを見ていなかつた。

奴 モンスターから感じ取れる属性は、火と風だけ。風は間違いなく防いでる。ならば火で、なにかをしたのだろうか。……しかし、燃やし尽くすだけの“火”で、いったいなにができるんだ。痕跡も焼痕もなく、どうやって。

「お姫様！ 避けてつーー！」

「ーー？」

あたしは咄嗟に身をひるがえす。途端の事だつたがなんとか避けたあたしは、ドクリドクリと波打つ心臓を押さえ付けた。

……あたしがさつきまで居た場所。そこには、綺麗に咲き誇つていたはずの花があつたのに。今ではなぜかしおらしく、萎びていた。

「……」

ロックハートがもう少し遅く気付いていたら、あたしは多分……あの花のようになつていいたのだろう。なんて、恐ろしいんだ。

「お姫様、水の魔法をモンスターに一雷だけではあの厚い皮膚に効かないようだ！」

「わかった！」

何故燃えたのではなく、萎れたのだろう？……？　いや、考えるのはあとだ。今は言われた通り、水の魔法をモンスターに掛けなければ。

あたしは手を繻して、身体中にある魔力を　腕にためた。そして、放つ。

「水も滴る最悪モンスター！！」

瞬間、ザハアツと脳天から水を浴びる　巨大モンスター。瞬間ロックハートが、電撃を打ち出した。

「乱舞せよ　古の神の聖なる雷よー　カウス、モネ、イ、シニー！」

「ロロロロと唸る、天空。先ほどまでは晴天だったはずの空は、ロックハートの呪えた魔法により、暗く、どんよりとした雲に覆われ……眩い雷がチラついていた。

瞬間、その雷は モンスターに向かつて、放たれる。

エルフの魔法 初めて見たのだが、やはり魔族と近いだけはある。威力がハンパなさすぎて、目をうすく開けているのがやつとだつた。本当に神様がいたとしたら、こんな風に怒るのだろうか？……父上は魔王でよかつた。いや、それでも父上の怒りも酷かつたけど。

あたしは瞼をしつかり開いた それだけ食らえれば、少しあは効いているはずだ。そう思っていた。
だが。

「 ！ ロックハート！」

あたしは叫び、風の魔法でロックハートを吹き飛ばした。乱暴になつてしまつたが、対応は正しかつたようだ……少しも食らつてなかつたモンスターは、気付いてないのか、ニヤリと意地の悪い顔で地面を繰り返し足踏みしていた。

……しかし、あたしが同時に使えるのは三つの属性まで。

同じ属性のものは同時に扱えないから……。

風が扱えるとわかつたモンスター。

ギリギリの瞬間あたしは空間を歪めて、来るであろう衝撃に備えた。

「グオオオオオオ……！」

凄まじい地響き　台風のように旋回する風　悪魔のように舞い上がる炎　。

空間を歪めただけでは防ぎ切れなかつたのか、馬車は吹き飛び黒装束の奴等も飛ばされて、ロックハートまでもが木に打ち付けられ氣絶してしまつた。

……今、意識を保つてるのは……あたしだけ。

「…………ち…………父上つ…………」

……父上なら、いじうこう時じうするなんだ？ どうすれば生き残れる
………… どうすれば生き残れる？ どうすれば、命を助けられる？

あたしは必死に考えた。考えるんだ、あたし。奴は何故雷が効かなかつた？ いくらなんでも、水を浴びながら雷を食らえば、麻痺くらいはするはず 何故平気なんだ。

あたしは、ジリジリと後退する。モンスターはまるで喜んでいるかのようだ……あたしへ、一步一歩近付いて来た。

くそ、モンスター、どこに遊ばれるとよ。どうしたらいいんだ……！

その時。

ふわりと空から舞う無数の花びら。それは突如あらわれて、まるであたしを守るかのように、身体に染み込んでいく。

それはとても、あたたかい魔力で 何故か脳内に、見たこともない女性の顔が浮かんだ。

「……！」

あたしの中に入り、混ざり、溢れ出るソレ。

わからない……わからないけれど、自然とあたしは泣いていた。この人は……あたしがすごい会いたかった人、な気がする。無邪気に抱き付いて、頭を撫でてもらいたくなる。そんな感じがした。

ああ、わかつた。

この人は……あたしの、お母さんだ。

「……あ……あ」

震える身体。
熱くなる頭。
滴る汗。

比喩の難しい 気持ち。

それがすべて重なりあって……、小さく鈴の音が頭に響く。自分の身体なのに自分の身体じゃないような感覚がして、でも気持ち悪さはなくて。

ぼんやりとする意識の中、あたしは呆然と呪文を吐いていた。

「イア……チ……アハラ……、キ……トン……ナ……サア……『」

……知らない。

こんな呪文は聞いたことがない。でもたしかにあたしが喋つていて、これは強力な魔法だということを知つていた。

「ヒリシオ……モオワ……ワキトニアーー！」

呪文を唱え終えたあたしは、ガクリと膝をついた。……誰かが、頭を撫でたような気がする。

まわりが歪み始めた。ぐにゃりとなる視界の中、モンスターはなんども叫びながら……魔法を放っている。しかしそれは誰にも当たりずに、全部自分に跳ね返っていく。

これは、現実ではない。幻を見せる魔法だ。モンスターはそれをわからずに、自らを傷つけている。そういう魔法なのだ。

「……なるほど」

自らを傷つけるモンスターを見て あたしは、今になつて奴が使っていた魔法に気が付いた。

奴が使っていたのは、火を応用した“熱”だ その熱で水分を蒸発させ、干からびさせていた。花が萎れたのも、黒装束が倒れたのも……その、目に見えない“熱”に水分を取られてしまったから。

……まったく、ただそんだけだつただなんて。今気付くあたしもあたしだよ。つか、このモンスターまじチートすぎ……普通そんなこと出来るかつての。

自分で自分を死に追いやるモンスターは、やがて力尽きたようだ。その場に倒れた。じゅわじゅわと、その場から跡形もなくなっていく。

……ははは、勝ったし。

「あー……ねむ、い……」

さつきの魔法　いくら規格外な魔力があるあたしでも、相当奪われてしまつたようだ。父上の専属執事がもしここにいたら、多分「昇天なさるなら跡形もなく消えてくださいね」とか言つんだろう……ああ、アソツが死ぬ前に一度殴つておきたかった。

思い出すとなんだか腹がたつて來たので、少し眠気が収まる。ふん、あんな奴でもたまには役に立つじゃないか。

ロックハートや馬車の中の子供達を向おつとしたあたしは、ゆっくつと重い腰を上げて。

「魔王の娘　　その命、もらいに貰ひたる」

二つの間にか気がついていたのか、それともフリをしていただけなのか。

目前に迫つて来ていた黒装束の男は、その鋭い切つ先をあたしに向けて……振り下ろしていた。

……うそん。

そりやないよ、アンタ。

銀色に輝く鋭い刃 それが振り下ろされるのを、あたしはただ呆然と見つめていた。まるでソレはスローモーションのように、ゆっくりと近付いてくる。

あとほんの少し……あたしに体力と魔力が残っていたら、よかつたのに。

突如遠くなる視界に、背中に走る痛み あたしは苦痛に顔しかめた。……ああ、刃物って、こんなにジンワリする痛みだったのか。しかも何故か痛いのは背中だし……。

……?
背中?

そんなあたしが、勇者に突き飛ばされて地面に背中を打ち付けたと気付いたのは……マリンベールに抱き起こされてからだった。

「貴様、ドゥルーダムの王国お抱え研究員とやらだな ！」

「なつー？ ゆ、勇者……………か？」

……銀色に輝く、サラリとした勇者の髪。雲から覗きだした太陽は、その勇者の白銀の髪を照らし まるで、ビビゾの国の王子様のように思わせた。

密かな願いを語つならば……白馬にでも乗つて参上してもらいたかった。

……いや、やつぱ訂正。青い瞳をギラギラさせる王子様なんて見たくないよ。アンタは本当に勇者なのかよ、ドゥルーダムの奴等にまで疑われてんじやんか。どこまでも残念勇者だな。

「フイーリイ、大丈夫か」

「……アナタに突き飛ばされたため背中が痛いと吐露します」

「大丈夫だな」

「オイー」

「なくそ、なかつた事にしようとしてやがる…」

「さあ、ドゥルーダムの研究員。すべて吐いてもらおうか」

「つ……我らは“孤高の狼”の僕 情報は一切受け渡しはせん——」「……

。せぬせひ三三ひ。

彼は、その刃を自らに向けて……喉をかぎ切った。溢れ出る血を全身に浴びる勇者は いつの間にかなんだけど、真の魔王のよう で。

ちよつと、かつこよかつたかも。

ふと思つたアホな感情に気付いたあたしは、それを心で踏みつぶした。……アホらし。これだからイケメンつてやつはお得だな。

そんな、勇者にたいして悪口とも褒め言葉とも取れる暴言を、心で吐いてるあたしの目の前で　　勇者は右腕で、顔に付いた敵の血を雑に拭う。

そして一度あたりを見回し……少し離れた馬車を見つけてから、

振り返つて言った。

「ベルヴァロスクエッド、マリンベール。一人は馬車を

「うん。」

「はいはい」

「ジュヒリー、お前はロックハートを頼む」

「うふつ、愛する人のためなら喜んで〜」

「プリエステルは、馬車にいる怪我人の手当てを

「はい、わかりましたわ」

それだけ言い終えると、勇者はあたしに悠々と近付いて来た。
…つたく、遅すぎでしょ。本当に裏切つてやうつかしり、『ライシめ。

片膝をついて、息を切らして恨みがましくしているあたし。
勇者が手を差し延べた。その、勇者の額から滴り落ちる、血とは違う透明な滴。
…ま、汗だくだくになりながら走つて來たみたいだし……許してやるか。

差し延べられた手を掴み、あたしは「遅い」と付け加えながら立ち上がる。勇者は不機嫌そうに、眉間に皺を寄せた。

「しょうがないだろ。これでも普通の人間だ」

「あたしも人間ですう。……うへえ、血いついた……最悪ー」

「お前な……」

「てゆーか、勇者汗臭い」

「……」

「あ、加齢臭？」

「俺はまだ二十一だ」

即答で返される。

あたしはそれを鼻で笑った。

ジットリとあたしを睨む勇者を無視して、フラフラになりながらもとりあえず馬車へと近付いた。ガル、大丈夫かな……戦う事に集中してたから、なんも見てなかつたんだよね。無事ならいいけど。

途中勇者の肩を借りながら歩くあたしは、気を失わないよう懸命に歩いた。まだ、眠るわけにはいかない……旨を安否を確かめるまでは、あたしはひたすらそうつajiで、歩く。

「オイオイ 馬車倒れてんじやないか。こりゃ全滅だろー

「ぶつ飛ばすわよ」の「ボウー」見てないで、さつやと扉開けなれーつー！」

「つたく……わかったわかった、君はもう少し慎ましさをだねうぼわつ！」

ザバーッ、と。

黄金野郎が馬車の扉を開けた途端、何故か水が流れ出した。頭から被つた黄金野郎は、ゲホゲホ咳き込みながら手足を地に付いている。

一瞬笑いそうになるのを堪え、あたしは中から“使い魔”の存在を感知する 間違いなく、ガルだ！

そうわかつた瞬間、次に流されて来たのは数匹のいやいや、数人の子供達だった。慌てて子供達に駆け寄るマリンベール。子供達は泣きながら、マリンベールに抱き付いた。

「わあああん！」

「怖かったよおー！」

「うひ、ひつぐ、お姉さんアイシラの仲間じやないよね？」

「うん、違うよ。わあ、うかうかおこで、怪我してるとおはあいつの
お姉さんのはづく行きなさい！」

手慣れた様子で、子供達を先導するマリンベール。やつと正常になつた黄金野郎は今度こそ中に入り込み、中から「おー、手伝えー」と勇者を呼んだ。

……おかしい。なんで自力でガルは出でこないの？ 多分せつくり出した水は、ガルが衝撃から皆を守るためにやつたやつに間違はないだろう。

その問題のガルが、何故すぐに出てこないんだ……？ あたしは不安になり 手をギュッと握り締めた。

「うわっ、おー、暴れるなつてー！」

「黙れ人間……！俺に……彼女に触るなつ……！」

「ちいっ！勇者、ちゃんと押さえろ！」

「ああ……！」

中から聞えた、黄金野郎と勇者……そして、憤るようなギルヴェールさんの声。不安は 当たつてしまつた。

やがて馬車から出て来た勇者達は、一人がかりでギルヴェールさんを引つ張り 地面へと問答無用で押し倒した。……すごい傷だ。これで生きてるなんて……やはり魔族なだけはあるのか。

冷静さを欠いたギルヴェールさん。先ほどから「離せ人間！」と叫んでいる。なにがあつた？ 何故そこまで怒つている？ ガルは。

馬車から一向に顔を出さないガルが心配になつたあたしは、軋む身体にムチを振り、その中へと入り込んだ。

そこで見たものは……。

……グッタリとしているキューティさんに、泣きながら縋ついている

ガルだつた。

「ガル……！」

「お……姉、ちゃ……」

「大丈夫！？ 早くキューディさんの怪我を、プリエステルに治してもらつ」

「そう言いかけたところで……あたしは、よつやく氣付いてしまつた。一瞬で、血の氣が失せる。

……あたしは静かに、キューディさんの口元に手をやり、頬に触れ、首に触れ、手首に触れ。最後の最後に心臓のあたりに触れ、あたしはそれを……確信する。冷たい身体、開かない瞼、空氣の振動がない口元、動かない……心臓。

キューディさんは 死んでしまつていた。

「……そんな、ことが

「うう……ううう、お母、ねえ……」

「嘘でしょ……皿を開けてよ、キコイトヤねえ……」

なんのため、カルがこゝにまどやついたのか。……こつか一人を、本郷の“お母さん”と“お父さん”と呼ぶためなのよ。

残酷、すげえ。

「カル……」

「わいわいませ……生きてたんだ……生きてたんだよ……！ ちや、ちやんと……」

「……うるさい

「それで、ほぐ、お母をさうて……呼んで……」

「う……うう」

「全部知ってるんだよって……嘘つたんだよ……！ わ、笑つてくれて……抱き締めて、くれて……」

「……うう、うう」

「なのに……なんで……？ なんでお母さん……動かないの……つ？」

あたしは ガルを抱き締めて、わんわんと泣いた。小さな身体は今にも壊れそうなくらい、震えていて。……滴る大粒の涙は、枯れる事なく流れ続けている。

その感情があたしにも流れ込み、その信じられない光景に ただただ現実逃避をしたくなつた。

その時、外からは激しい水音が聞える。馬車の外、勇者の「それ以上やつたら傷に障る！」というような声が。ハツとするあたしとガルは、一旦キュディさんをそこに横たえたまま 馬車を飛び出した。

馬車から出たあたしが見たもの。それは、先ほどのモンスターよりも大きく作り上げられた、水の化身で……それはとても目の疑うような光景だった。

一瞬、発動している人が……ギルヴェールさんだと、わからなかつた。

ガルが力一杯叫ぶ。

「お父さん！ やめてっ！」

「」うちへ来るんだ、ガル！！ 人間なんかに惑わされるな！」

「ギルヴェールさん！！ お願い……落ち着いてっ！ 話を聞いて！」

「……！ 姫様……」

ギルヴェールさんは間一髪、その化身を勇者にけしかける前にあたしに気付いた。

「ギルヴェールさん！」

「姫様、俺 私は……今でも、キュディを愛してる……！ でも人間が許せない……！」

「……！ うん、わかるよ」

「ともに ともに、人間を討ちましょー、今度こそ魔族が頂

点に立つべき時！ 人間という腐った人種を、この手で！…」

痛いくらい伝わる ギルヴェールさんの悲しみ。それは無数の針のように、あたしの心へ突き刺さる。……チクチクと痛いような、抉られているような。そんな、鈍い痛み。

……あたしも、もちろん人間が嫌いだよ。それは今でも変わりないし、キュディさんを見て心変わりがしそうになつた。でも、さつきガルが止めてと言つた時……あたしは何を考えているんだと気付いたんだ。

ガルは、父親を止めた。それは人間を殺さないため。……ガルだつて憎いはずなのに、それでも今“我慢”をしている。

主人が使い魔の言葉に気付かされた。……今度こそ、あたしは間違えるわけにはいかない。

不安そうに見つめる勇者に、あたしは苦笑を返す。なんて顔してるんだよ、勇者。勇者は勇者ひしく堂々としてなきやダメでしょうが。

あたしはガルとともにギルヴェールさんへ近付きながら、試すようにな……問い掛けた。

「人間が、憎い？」

「憎い」

「人間を、殺したい？」

「殺したい」

「撃を、果たしたい？」

「果たしたい」

「子供達も、殺すの？」

「つそれ、は」

言葉に詰まる、ギルヴェールさん。

一定距離で立ち止まり、あたしは再度問い合わせた。

「子供達も　殺すんでしょう？　人間なんだから」

「……………でも…………子供、達は…………」

「 ねえ、一緒に人間を滅ぼそうか？ まづは…… その子供を殺さなくっちゃねえ」

あたしは手に魔力を溜める。

「ま
待つてくれ！姫様！！」

それを、大声で止めたギルヴェールさん。あたしは困り顔で笑つて、溜め息を吐いた。……じつは苦手なんだよなあ、勘弁してよ、もう。

その意図に気付いたギルヴェールさんは、たちまち水の化身を打ち消してしまった。力なく、膝をつく。

「ギルヴェールさん」

「……姫、様」

「あたしね、ある人に言われたんですよ。……人間という括りで見るんじゃなくて、人間の個人を見ろって。子供達を庇つたギルヴェールさんなら、その意味一番わかるでしょ？」

……ギルヴェールさんは知つてゐるはずだ。たとえ人間でも、この子供達はただ純粋で、精一杯生きていて、優しい子達なのだと個人を知つてゐる。

こういう事だよね、勇者？ チラリと勇者を伺えば、彼は優しげにほほ笑み……頷いた。

それにあたしも、ほほ笑み返す。

「もう馬鹿な事、言わない？」

「……はい。申し訳ありません、姫様……」

「よろしい。……それじゃあ、今度はガルからお説教

ポンとガルの頭を叩いて、ウインクをした。

「お父さん……」

「……ガル」

「あのね、お父さん。僕夢が叶ったんだよ」

「え……夢?」

「うん。一人をちやんとお母さんとお父さんって呼ぶ夢」

「……」

「あとね、もつーつ」

不意に、ガルがあたしの手をキュッと握った。

「本当の“お姉ちゃん”的な人の　使い魔になることー。」

そう言つて無邪気に笑うガルは 今日一番、晴れ晴れとした笑顔で……すぐ眩しかった。

ははは、なるほど。“お姉ちゃん”のような主人、ね……嬉しい事言つてくれるなあ、もう。少し滲んだ涙を拭きながら、手のひらにある小さな存在に力を込めた。ああもう、まじ可愛い。

「使い魔 そうか、前に言つてたもんな」

「うん！」

「そうか そうなのか。それなら……」

立ち上がるギルヴェールさん。目の前までやつて来て、再び片膝をついて頭を下げるその人を呆然と見つめながら……あたしは首を傾げていた。

ギルヴェールさんは、言つ。

「親愛なる姫様 いえ、魔王陛下」

「え？ いやいや、あたしは魔王の座を引き継ぐつもりは……」

「いいえ、貴女は私達魔族の生きた証。……陛下、後生の頼みがござります」

あたしは、「後生の」という言葉についつまる。それ以上の卑怯な言葉は、ないんじゃないかな。……でも、あたしはこれから言われる頼みを断つたりなんかしないよ。

言わなくてもわかる。ガルの事だよね？……そんなの、言われなくたつてずっと側で見守るよ。大事な弟なんだからね。

勝手に勘違いをしていたあたし。その次に吐き出された言葉に愕然となることになるなんて……あたしはこれっぽっちも気付かないのだった。

「私はこれでも成人しているインキュバス お望みとあらば人間の女一人、容易く陥れる事も情報を聞き出すのも可能。……是非とも、お側に」

「うとうと、もう……は？」

素で聞き返してしまった。

あまりの事に呆然とするあたしは、数秒ほど 脳内が空中散歩に出かけてしまっていた。

……たとえると、アレだ。隣の近所の人が実は幼い頃に生き別れた兄弟でそれを知らずに互いの子供が結婚してのちに兄弟と知る、みたいな感じの衝撃。え、わかりにくい？

「え、いや、でも、そんな」

「陛下 聞き入れてもらえないでしようか。孤児院は焼け落ち最愛の妻を失い……どん底に叩き落とされ……形見の息子は使い魔として生きる事になつていて……ああ、私これからいつたいどうしたらしいと言つのでしよう……」

「……それ、泣き落としーーー？」「イツめぢやめぢや卑怯だーーー！」

「ぐつ……わ、わかりましたよ……」

「そうですかあ！ それはよかつたーーーこれからずっと一緒にだなあ、ガルーーー！」

「うんーーーお父さんーーー」

くそおーー なんて晴れ晴れとした笑みで会話してやがる、この親子ーー！…………ああ、なんて厄介な事になつたんでしょう。グスン。

あたしはガックリと肩を落して、この切り替える早すぎる親子を見つめた でも、まあ、よかつたな。父親だけでも生きてたんだから。

そう思つたあたしは、なんとなく苦笑した。

「 よし。それじゃあ、とつあえず宿に一旦戻るか」

鶴の舌葉に頼いたあたし達。

「ベルヴァロスクエッジドとマコンベールは、子供達の取引先を頼む

「まつかせてーー！」

「うげつ、そんなの」の小娘一人にやらせなよ。僕、子供嫌いなんだよねえ」

「何言つてんのよ、むしむアンタのまつが子供でしちゃうが。脳内

「あああン！？ つたくだから君は」

「あーハイハイ。さあ皆いつちあいこで、このおじちゃんが怖い人から守ってくれるから、離れなこよつこよつねー」

「おじちゃんちつな！ お兄さんだーー！」

その光景を見て、みんなケラケラ笑つた。あたしもそれを見ながら笑つて。

「フイーリイ！？」

勇者の、切羽詰まつたような声。ばすんと地に倒れる直前、あたしは誰かに受け止められる。……気が抜けて、とうとう限界が来ちゃつたみたいだ。

多分ギルヴェールさんが受け止めてくれたのかな? 「ごめんなさい、使い魔契約は起きた時つて事で。迷惑かけて申し訳ないけれど……あたし、もう寝ます……。

父上のような力強い腕に抱かれながら あたしはゆっくじと、意識を手放したのだつた。

翌日。

昼時に田を覚ましたあたし。気付けば横には、ベッドにもたれ掛かりながら寝ている勇者がいて……その寝顔にじばらく見惚れていったあたしは、ようやくハッキリしてきた頭で、昨日倒れた事を思い出した。

ガルに心配させちやつたかな。悪い事をしたかも。でも限界、ギリギリだったんだし、許してくれるよね。

あたしは起き上がり、勇者の近くで「眼福あざす」と祈りを捧げた。いやあ、朝からいいもん見たわ。こうじてりや普通に勇者に見えるし、なにより美しさが倍増。もう勇者喋らなきやいいの。ていうか、なんで宿にみんないないんだらつ。

頭をポリポリ搔いて欠伸をするあたし いつたいあれから何があつただろ? 子供達はどうなつた? ギルヴェールさんは?

……と思つたら、どうやらこりこりは新しく借りた部屋のようで、みんながいるのは隣の部屋だとこう事がわかつた。だつて、隣からマ

リンベルと黄金野郎の痴話喧嘩が聞こえるもの。毎日大変ね。

バキバキ肩を鳴らし身体の調子を確かめてから、少し立ち上がりた。うん、良好良好！ 魔力も半分以上回復してるし、視界も体力も絶好調だ。

毛布を引っ掴んでスヤスヤ眠る勇者を伺つてから それをゆつくり、肩にかけたやる。寝ずに看病でもしてたのか？ まさかね。

「……ふつ

あたしはソロリと音をたてずに歩き、部屋を出た。……隣からはまだ二人の声が響いている。飽きないなあ、あの二人は。

声の響く部屋の前も通り過ぎたあたしは、宿の階段を降り、外へと出た どうしても行きたい場所があつたから。

あたしはそこへ向かつて、歩いて行く。

町から離れ、森の中。来たかったのは、初めてガルと出会つ

たあの場所……湖だ。

湖の前に立つたあたしは、「おーい」とその存在に声を掛けた。それは、湖からひょっこりと現れる。そう、水の精靈だ。

あたしはその場に座り、水面から少しだけ顔を出す精靈に、一言お礼だけを言った。

「ありがとうございました」

「……おやおや、魔王様の箱入り娘さんじゃないですか。お倒れになつたとかで、心配しておりましたなの。ところで何故お礼を？」

素知らぬ顔をする精靈に、あたしは苦笑した。つたく、精靈つてホントに素直じゃない奴ばつかで困つたなあ。

昨日のことを思い返しながら、あたしはその“お礼の意味”をしつかり答えてやつた。

「馬車の中を守つてた水。あれ、最初ガルだと思ったんです。でも違つた」

「……」

「だつて、馬車の中にいたガルがあんなタイミングよく出来ませんもの。あとから気が付いてやつても、怪我は酷くなつてたはず」

クスクスと笑うあたし。もう一度しつかり、お礼を言った。

「本当に、ありがとうございました。ガルや、子供達、ギルヴェールさんを助けてくれて」

ちょっとと氣まずそうに、視線をキヨロキヨロさせた　水の精霊。

精霊はたしかに、誰かの味方になつたりなどしない。でも心がないわけじゃないんだ。彼らだつて、誰かを心配する感情がある。

……きっと、ガルがギルヴェールさんによつてここに飛ばされた時。助けを求めたガルの言葉に、揺らいでしまつたんだろ？。

よかつたね、ガル。ちゃんと言葉は届いていたみたいだよ。

クスクス笑い続けるあたしに業を煮やしたのか、精靈はちょっと
つっけんどんになりながら言い訳を並べた。

「べ、別にそういうことじゃないですよ。ほら、姫に加護を授
けましたからね」

「はは、そうですか」

「……。それに、あの子は……友達ですか？」

そう言つて、精靈は照れたように咳き込んだ。

「で、ではこれで失礼しますな。お昼寝のお時間ですからね…
…姫も」一緒に？」

「いえ」

「即答ですか。残念ですね。……それでは最後に」

あたしは、立ち上がった。気持ちを込めながら、深々と礼をする。

「水の」加護が姫を 盾を、守りますように

ちやふんと音を立て、湖の奥深くへ潜つていく精霊。……ハハ、
相当恥ずかしかったのかな。珍しいものを見たもんだ、あたし。

スッと立ち上がり、一度伸びをした。何も言わずに出ちゃったから、騒ぎになつてないといいな。怒られる覚悟だけはしたほうが良さそうだ。

湖に背を向けて、あたしは “仲間” のいる場所へ、笑顔で帰るのでした。

十四（後書き）

第一章的なもの、完です。

次回番外編挟みます。

番外編・悪魔なあの子（前書き）

下ネタ的なもの多め

お気を付けください。

俺の名前はギルヴェール。姓？ 位の低い魔族に、そんなものはない。まあ……しいていうなら、“インキュバス”かな。

夢魔は成人したら、サキュバスかインキュバス つまり女が男かを選ぶ事が出来るのだが、それまではぶっちゃけ同性類的なもん。まあ、どっちかを決めたからと書いて、もう一度と変身できないわけじゃない。建て前上はどっちにする？ みたいな感じ。

……俺はそれで、“インキュバス” 男を選んだ。理由は簡単。女が好きだから。

女を見てた方が興奮するし、なんたって柔らかくて触り心地がいいし……そんな理由で決めた俺なわけだけど。

……今、ひじょーに困っている事がある。それは男として生きると決めた俺にとつては、かなり深刻な内容。男止めますの勢いでいかないと、俺は“インキュバス”どころか“サキュバス”にもなれない……そこまで深刻な状態なのである。

その、困つてこぬ内容とは。

……何を隠そ、俺の血體の“イチモツ” 息子ぢやんが、スタンダップしてくれないとこいつのだー。

これも全部……。

「あんの悪魔めーー！」

悪魔 のようでただの人間な、一人の女。俺はこいつのせいです……こいつの残念インキュバスになつてしまつた。

ああ神様……いや信じてないけど、とにかく誰か様。どいつもかしてここの血體のビックマグナムを、機動修正してくださーー！

「ああむー、なんなんだよおあの女ーー！」

……しかし、そんな都合のいい誰か様が現れるはずもなく。俺は最近、こうして部屋でうじうじ悩みまくってるわけなのだが。ああ、ホントに誰か答えを教えてくれないか？

何故、あの女を見ると興奮するのだろう。

何故、あの女を見ると抱き締めたくなるのだろう。

何故、あの女を見ると切なくなるのだろう。

何故、俺は今あの女の事ばかり考えているのだろう？

理解不能な自分の気持ちに、今、俺は頭を悩ませている。あの女は何者だ？ 実は凄腕の魔術師とかで、奴は俺に呪いを掛けたのだろうか。それとも俺がイカれただけか。

……どちらにしても最悪で、考えられない事だった。あの女は魔力の欠片もないし、なにより俺は正常だ。パニックになりすぎて、逆に今は至極冷静になっている。

そう イカれたわけではないのだ。頭も、大事な大事な……イチモツも。何故わかるのかって？ そんなの簡単だ。

だって、あの女の淫らな光景を思い浮かべるだけで……簡単 に元気になっちゃってくれるんだから、な。

ああ、想像をしだすと止まらない もしあの女を好きに出来たら、俺はもうすべてを投げ出すことさえ厭わなそうだ。

好きに出来たら、何をしよう? 縛り付ける? 砧め回す? それとも無理矢理やつて泣かす? とにかくめちゃめちゃにして壊したい でもその反面、大きな優しさの塊での女を包み込み……湯けさせてみたいとも思う。

壊れやすそうなその身体をゆっくり撫で上げ、柔らかなソレに顔を埋め、じっくりと時間をかけて焦らしていく。そしてしばらくその綺麗な瞳を見つめて、頬を撫で、その桃色に色付くふるつとした唇を少し乱暴に奪い……舌を入れ混ざりあう。ああ、なんて興奮するんだ。

あの女は、どんな顔をして俺を求めるだろう? 恥ずかしがりながら柔順に従うだろうか、反抗的な視線を向けて涙を浮かべるのだろうか、淫らになつて貪欲に求めるのだろうか どれをとっても素晴らしい。

熱くなる心を押さえて、俺はその幸せな一時を味わつた。優しくしたい、でも泣かせてみたい そんな矛盾した感情が、俺の心を搔き乱す。

あの女、マジ悪魔。この俺をこんな風にするだなんて……もしや本当に魔術師なのでは? それとも、実はサキュバスとか。

いや、いや、落ち着け俺。それはただの願望だ。……願望？　願望なのか？　なら俺は……それを、望んでいるのか。

……何故だらう、わからないことだらけで、俺の頭は完全ショート才前だ。もひ、わかんねーよ……俺つじぱりしちゃつたんだ。

それもこれも……やつぱりあの女のせいだ！――

俺はその恨みを晴らすため、あの女の元へいく準備をした。何回も鏡を伺っては変なところがないかを探り、服のほこりを見つけては丁寧につまみ、見た目を厳重に確かめる。

……よひ、これである女も懲りるだらう。つて、何に懲りるんだ。まあ、いいか、会えれば。

俺は不安と期待を胸に秘めながら　魔界の家を飛び出した。もちろん向かうは、あの女のいる人間界……！

この時間なら花屋でバイトをしているはずだ　事前調査済みである。下級だからってナメるな、俺は泣く子も惚れるインキュバス様だぜ！！

そうして俺は、人間界へいる“あの女”の元へ……ワクワクドキドキしながら向かうのだった。

人間界。

俺はとある路地裏で、心を落ち着かせていた。説明しがたいのだが……あの女の店の近くまできた途端、何故だか動悸が治まらなくなつたのだ。しかも息切れまでしてやがる。

さぞかし今の俺は、ハタからみたら「ハアハア」と氣色の悪い変態に見えていいのだろう。……ま、このインキュバス様の甘いマスクと色氣で、お得作用がでますけどね。その証拠に通りすぎる女達の目が、うつとりと蕩けていた。

「つと……いかんいかん、早くあの女に会いに行かねば……」

俺は、早まる鼓動を無理矢理押さえ付けた。

……ああ、緊張する。なんでこんなに緊張するんだ？ しかもやけに苦しいし。でも それがいやに、心地いいといふか。俺、マゾヒストだったのかな？ むしろ仲間にはサド公爵と呼ばれていたのだが。

くそつ、こんなサドとして純真だった俺をこつも惑わし、狂わせるとは ！ あの悪魔め！ 今に見とつ！

俺は路地裏から飛び出して、余裕を纏つたかのよつに優雅に歩き出す。向かうのは、前方に見える敵地 花屋だ。遠目からでもあの女が働いているのが見えて、俺は小さく「うう」と声を漏らした。

……か、可愛い……！

あたたかで、麗しくも妖艶な顔、はち切れんばかりの豊満な胸、ゆるりと流れめるような滑らかな腰、ふっくら弾力のありそうな尻。うわああつ、今はダメよマイポークー！ こんなところで元気になつちゃあかんですううううう！

「 あら？ まあ、ギルヴェールさん。また来てくださつたんですね

店の前でわたわたする俺に気付いた、あの女 キュディ・ホンベルト。彼女はふわりとほほ笑みながら、言つた。

「ふふ、社会の窓が全開しますよ

「わああああいー！」

俺のばかーん！

鏡を見ていつたいナニしてたんだよーうーーーって、ほこり取つてたりしましたね。くそつー！

俺は泣きたくなる気持ちを押さえ、なんとか気丈に振る舞うように心掛けた。……………」で負けではない、いざ、勝負の時！

「キューディ」

「はい、なんですか？」

「『趣味はなんですか』

違ああああうー！

俺、気付け。この女に惑わされるなー！とにかく聞かねばならぬいのは、こいつの正体だ。いったい俺にどんな呪いをかけているのか……確かめるーーー！

俺は自分を叱咤しながら、「趣味ですか。菜園ですかね」と答えるキューディの言葉をしつかりインプレットしながら、再度問い合わせ

る。

「ねえ、今日終わつたら時間あ

「ふふ、ありません」

「スピード回答！ 最後まで聞いて！？」

「あ、いのお花どうですか?」

「そ、それよりさ、今日仕事何時に終わるのかな」

「年中無休です」

すごいね！ でも嘘だよね！」

一
五
五
は
い

笑顔でどんなに大嘘だな！！

くつそー！

見た目だけの超絶どS悪魔めえ……でも、負けるわけにはいかないんだ。この正体不明の感情に名前を付けるまで、俺は引き下がるわけには。

少し冷静にならうと、俺は深呼吸を繰り返す。熱くなるな、冷静に、優位に立て。今まで俺は数々の女をオトしてきた、百戦錬磨の男だらう？

「こんなかが人間の女一人惚れさせるだなんて、わけない……」

「…………？」ギルヴェールさん、どうかしましたか？　あ、お花の匂いがキツくて気分が悪くなりました？」

心配そうに気遣う、キューディ。俺はその麗しい顔を硬直したまま見つめ、この感情に、たしかな名前を見つけてしまっていた。

何故、今氣付いたんだ。アホすぎる、マジ馬鹿。いくらなんでもここまで来て、やつと氣付くなんて。俺、やつぱり……イカれていたのかも。

「そう……『恋』に浮かされて、イカれていたんだ。

急激に恥ずかしくなった俺は、顔をカアツと真っ赤にさせる。今、絶対リングみたいになつてるよ。なんて恥ずかしい奴なんだ……俺は。

キューディは……そんな俺を少し不思議そうにしつつ、その柔らかな手のひらを額にあて、言った。

「ギルヴェールさん、大丈夫ですか？ 少しおやすみになられた
ほうが」

「…………しました」

「えつ？」

「恋…………しました。貴女に」

夢魔、ギルヴェール。俺は今まで生きて来た中で、最高最大
の大恋愛をしている。

それは……悪魔のようで人間な、一人の女の子。

「…………あら、奇遇ですね。私もギルヴェールさんに、恋をしちゃ
つたみたいなんです」

これから先、どんな人生が待ってるのかなんて……俺にはまったくわからない。それでも俺は多分、後悔だけはしないんだと思う。キュディと出会えたこと いつしかキュディと結婚できたら、子供を作つて、その子供をいっぱい甘やかしたりして。

……そんな父親に、いつか、なりたいなあ。

悪魔なあの子 番外編。

完。

番外編・悪魔なあの子（後書き）

ギルヴォールとキュディの恋愛の始まりでした。

短くてごめんなさい m (ーー)m

番外編・あたしの天敵（前書き）

勇者達が来る、フイーリアのちょっと前の話。

「チ、チ、チ、チ。規則正しい古時計の音を静かに耳に馴染ませながら、あたしはその他の音が聞こえないかと慎重に慎重を重ね……」クリと唾を飲み込んだ。

魔王城のとある使われていない一室。普段は物置部屋になつているそこで、あたしはどこぞのスペイカと問われそうな服装に身を包み、今こつして、ソソソ身を潜めていた。

何故、魔王の娘である者がそんな事をしているのかつて？もちろん、決つている。……鬼のように迫り来る“アレ”から逃げるため、だ。

「ひーめーやーまー！ 今日こそ逃がしませんぞおーー！」

……わりかし近くで聞えた声。これは、大臣だ。

「魔王陛下が何度も“人間界へ行くな”と行つているにも関わらず！ 本当にもう今日は、容赦致しませぬ！！」

あたしは迫り来る大臣の気配をしつかり感じ取り ついでに怒気も感じ取り、必死に自分の気配を押し隠した。

……そう、今あたしが追いかけ回されている理由は、それだ。人間界に済む憧れの大海賊の情報を集めようと思つて、度々お忍びで人間界へあたしは向かっていた。帰つて来るたんびにバレているので、不思議には思つていたのだが……なるほど、行く時点でバレていたのか。あたしは悔し涙を少し流す。

しかし、泣いてはいられまい。今日はこの口うるさい大臣に加え その息子である、嫌味たつぱりの縦長男まであたしを追いかけ回しているのだから。父上の専属執事、ベイクドールだ。アイツだけはなるべく接触を免れたい。大臣だけなら逃げる自信はあるのだが。

あたしは段々怒りだす大臣の声色を聞き取りながらも、奴の気配を必死に探る 奴は神出鬼没なのだ。油断していたら、簡単に後ろを取られてしまう。

「見つけましたよ、姫様。わあ、魔王陛下にこいつてり搾られてもらいましょつか……もちろん、私の説教のあとでですが」

……こんな風に、ね。

あたしは、悲痛な叫びをあげるのだった。

執務室。

父上は書類に目を通しながら、ズンマイヒトでも言つたげにひびいていた。

ていうかどうしてあの部屋から現れたの！？ マジこいつあり得ない。化物以外の何者でもないというか……ホントいつも思つていたのだが、いつたいぢりやつてあたしを見つけているのだろう。不思議すぎる。

あたしは説教を聞き流しながら、ひたすらそんなことをぼんやり考えていた。しかしそれを見逃す父親ほど、奴は甘くなかったのである。

「姫様、もちろん今の話を聞いておられましたよね？」

「……えー？」

「まさかとは思いますが、『自分に負があり説教をされていたのにも関わらず、それを聞いていなかつた……なんて。有り得ませんものね？』

「あ、どうしてやるうかこの小娘。……そんな視線がバシバシ伝わり、あたしは冷や汗をだだ漏れさせていた。うわあん！ 助けて父上！－！」

「いじつなつたら……」

「ひつ－……い、いじつなつたら？」

「……一度と人間界などに行かれぬような、“ちょっとした”罰を与えなければなりませんね。そ、行きましょうか」

「いやーん！－！ おちぢぢ父上えええーつ－！」

首根っこを掴まれてズルズル引っ張られていくあたしを、父上は

ハンカチで涙を拭いながら見送る。今生の別れか！ そうなのか！？ いやあああせめて罰は大臣の考えたものにして！ ベイクドルのだけは絶対嫌だよおおおおー！

と、叫びは虚しいもので。引きずられながら何処かへ向かう中、連れ去られるあたしを見てか……通り過ぎるメイドや兵士達は顔面蒼白になっていた。誰か、「とうとう姫様までもがアレを……」と言っていた。

アレってなんですかああああああー！？

「ええい、一々動かないでください小賢しい！」

「おつまえあたしのこと姫様とか言つわりには口汚いなーーー！」

「ハツ、いくら魔王の娘とはいえ餓鬼は餓鬼。たった十年そこらしか生きてないションベン臭いお子様に、何故この私がそこまで丁寧に話さねばならないと？」

「『チピチの少女捕まえてションベン臭いだとおーーー！』

「まったく先が思いやられる。姫様は姫様らしく慎ましくあるべきです。……ハンツ、無理か」

「フシャーーー！」

むうかあつうくう「ハハハハ… マジでこいつを姫様と本氣で思つてないだろー。いや、いいんだ、いいんだけどね別に。それはあたしも思つているのだし。……でも他人から言わるとムカツク！ そしてバイクドールに言わると余計にね…！ くそつ、いつか「イツに」「ぎやふん」と言わせてやりたい。今ビキ「ぎやふん」だなんて言う人はいないと想うけど。

あたしはひたすらバイクドールを睨みながら、ブツブツ文句を呟く。もちろん聞こえないようにだつたのだが、あたしはそれでも「イツの地獄耳を理解していなかつたのか…。結局、自分が「ぎやふん」と言つ事になつてしまつた。

「わ、姫様？ これから楽しい罰を受けてもらはせよつか。
ぎやふん」と言いたくなるような……ね

「ぎやふん…」

「素晴らしい返事をありがとうございます。では、わたくしの部屋に入つていただきましょうか

お約束の「ごとく」ボケを入れたあたしを華麗にスルーしてくれるバイクドール。ちょっと涙が出たけれど、今から泣いていたらこれ

からがもたない。なぜなら、これからもつと酷いことが起きるはずなのだから……。この男が考えた罰、並大抵のものではないはず。想像するだけでも恐ろしい。あたしは氣を引き締めながら、なおかつ首を掴まれた猫のようなまま 田の前の部屋に入つていつた。

……その、部屋には。

『わやふんを通り越す、声にもならない驚きの悲鳴をあげるような“アレ”がいた。アレって？ いや、これだけの比喩で絶対みんなわかるはず。そりや男女問わず嫌がるはずだよね……。あたしもさすがに、台所の嫌われ者と仲良くするなんて……できないもの。

カサカサ動く黒光りのそれを視界にとらえた瞬間、しばらく思考がショートしたあたし。しかし、やはりそれも長くは続かない。だつて“アレ”が近づいてきたんだもの。

あたしは一気に覚醒をして、モンスターも顔が真っ青になるような叫び声をあげた。そして嫌味とばかりにバイクドールが持ち上げていたあたしを下におろすので、すぐさまよじ登つた。もちろん、縦長なバイクドール様に。背中にピッタリくつづくさまは、さらセミのように見えただろう。しかし今のあたしに、そんな恥は皆無なのである。冷静にGを見つめるバイクドールにも多少恐ろしさはあるが、今では少し頼もしい存在だ。

「やつをもし今離してしまつたら、あたしは多分氣絶してしまつ。……なんとしてでも、張り付いていなければ。

「姫様、これでは罰になりません。降りてください、じんわり重

いです

「嫌だアア！ ていうか黽つてこれなの…？ ま、まさかとは思
うけど……！」

「最初、退治をお願いしようとは思いましたが……私もそこまで
鬼ではあつませんからね。一時間ここに一人で我慢してもらいまし
ょう」

「えつちにじる無理ですうううう…！」

「うなれば、と。あたしは絶対にベイクドールから離れまい……
と言わんばかりに、しつかりひつついていた。どれだけ振り回され
ようが、この手を離してなるものか。離したら最後、あたしの足か
らじわじわと……この生きる力があたしに迫り来るのだろう。そ
れだけはなにがなんでも嫌だ…！」

そんな強いあたしの意思が……掴まれている全身に伝わったのか、
ベイクドールは諦めたように嘆息する。たしかに、鬼とはいえコイ
ツも甘いところがある。大抵の泣き落しには応じてくれるのである。
大抵のは、ね。それも本気で嫌がつてなきゃダメなんだけど。

しかし今回は、わかつてくれたようだ。ベイクドールは「仕方な
い」と呟いて、あたしを背に抱えたままその地獄の部屋から遠ざか
つてくれた。……あれ、なんで田から鼻水が出ているのかな、あた
し。

「……まつたぐ。これでは罰にならないじゃないですか」

「いえ充分罰になりました」

「どうしちゃうかね……他になにかあればいいのですけれど」

「だからもういいってばー！」

と、どれだけあたしが説得しようとも、簡単に聞き入れるわけがない。そんな最初からすぐ諦めるような性格ならば……コイツはここまで捻くれた人物になつてはいないだろう。だから“鬼”と呼ばれているのである。あたしは今まさにそれを痛感し、しがみつく腕に力を込めていた。あ、なんでまだしがみついてるのかつて？　はは、腰抜けちゃつて。腕にしか力が入らないの。その証拠に足はベイクドールが掴んでくれていて、最早おんぶのような形になつていた。

そんな時、不意にベイクドールが咳きだす。

「ん？　……ちが、困りましたね」

「え、ネタ切れ？ 珍しい……あの“人の心を抉る天才”ベイクドールが、オシオキ法を思いつかなくなるなんて。うーん、それともボケた？ ていうかベイクドールって何歳？」

「年齢は言いたくありません。しかしボケてもいません。本気であの部屋に閉じ込められたいんですか姫様」

「申し訳ござりませんでした」

取り返しがつかなくなる前に、あたしは素直に謝った。

だつて怖いんだものこの人！ ベイクドールが一度決めたことを諦めるなんて、普通ありえないんだから！ だからさつきのは奇跡とも言えるんだ。その奇跡を無駄にしてはいけない。

あたしは取り付くような笑顔を浮かべて まあおんぶされているので顔は伺えないが、それでも表面上氣のいいフリをしつつ……あたしは「何が困ったの？」と聞いかけた。ずっと目の前を真つ直ぐ見つめているのでなんだろうとは思ったのだが、あたしの肉眼ではなにも見えなかつた。肉眼で見えないだけで、この先にはもしかしたら何かがあるのだろうとは思うけど……とにかくあたしは聞くしか方法がなかつた。

ベイクドールは少し言葉に詰まつたのち、「何でもありませんよ」といふ。

「えー！ 何もないこたあないでしょー！」

「つたぐ、背中に張り付いたまま叫ばないでください。落としますよ」

「姫様は大事に扱つてくださいー」

「ああもう、一々やかましい姫様だ。……姫様が気になさるような問題ではございません、わかりましたら少し大人しくしていただけますか？」腰抜け姫様

「…………」

否定ができないだけに、ものすごく悔しいー！…………まあ、ベイクドールが「問題ではございません」というのなら、あたしはそれを一応信じるけれど。ベイクドールだけじゃない、大臣や先ほどあつたメイド、兵士……この城にいる者達は皆、『魔王とその娘を守る』、それが使命として生きているようなものだ。

すなわち、命も投げ出す覚悟が出来ている……この城にはそんな者の集まりだから、あたしは嫌なのである。あたしだって、守る側にいたいから。この城のみんなを、あたしだって守りたいんだ。……そんな事言つても、どうせベイクドールに鼻で笑われるだけなんだろうけど。それでもあたしだって、命を捨てる覚悟はある。みんなを、守るために。

……しばらく無言になつたまま、あたしはベイクドールにおんぶされたまま、長い廊下を歩いていた。ベイクドールも気付いているのかな？ あたしがそういう風に魔族のみんなを思つてゐるつて……。だから、意地でもそんな事させないようにしているのだろうか。いや、嬉しいんだけどね。

はーあ、寂しいよなあ。仲間ハズレみたいじやん？ そりやあたしはぶつちやけ人間なのだけれど、でも、心は魔族なんだから……。あーもう！ だから姫様扱いは嫌いなんだよ！

我慢が効かなくなつたあたしは、もう素直に文句を垂れ流ししていた。「だいたい、あたしだつて魔法は父上より強いんだから！」とか、「運動神経だつて悪くないし！ つーか身体動かしたい！」とか。ベイクドールはそれを、静かに聞いて……といふが、スルーしている。それでも、あたしは続ける。

「みんなあたしを姫様姫様つて！ 姫様が戦つちやいけないなんて誰が言つたのさー！」

「……」

「あたしだつて父上を守りたいし、何より魔族の意思を継いでるんだから、少しくらいお手伝いさせてくれたつて！！ 頭力チカチすぎなんだよー！」

「……」

「もー！ 父上のアホ！ 大臣の間抜け！ ベイクドールの史上最強性悪クソオヤジ！！」

「ちょっと待ってください、なんで私の悪口だけそんなに長いんですか？」

……バレたか。

このノリで言いたいこと言こまくれると思つたんだけど。そういうまくは事が運びそうにないな……さすがベイクドール。聞き流していふように見せかけて、なかなかやるじやないか！ ……なんてふざけるものだから、結局あたしは問答無用で落とされてしまったのだけれども。

落とされたせいで痛む尻を撫でながら、あたしはムスッとしながらベイクドールを見上げた。ベイクドールは魔王立ちをしながらも、どこか読めない表情を浮かべて……ポツリと言つた。

「貴女は、魔王様の娘様です」

「でもあたしは

「人間です。この城の者、全員が知つております」

読めない表情のまま、ベイクドールは言葉を続ける。

「そして、人間である上に、私達“魔族”にとつて……大事なお姫様なのです」

「……」

「魔王様は貴女様を娘のように思い、我が父である大臣は貴女様を孫のように思い、私も姫様を、妹のようにお慕いしております。そんな方に、危ない事をさせるとお思いですか？ もしそう思うのであれば、姫様にはもう一度……一般的な知識から勉強してもらわねばなりませんね」

……感動的瞬間なのに、感動できないのは何故だろう……。

「……姫様」

「……」

「貴女様は、我々“魔族”的……生きる希望なのです。これから世界……姫様には、変えていつてもうわねばなりません」

「父上に任せればこーじゃん。どうせあたしは何もできませんよーだ」

「ほんと、幼い頃から見てまいりましたが……ずいぶん口上たえが達者になりましたね。誰に似たのやら」

そう言つてクスクス笑うベイクドールに、あたしはふんっと顔を背けた。あたしの口が汚いと言つならば、それは間違いなくベイクドールの影響であろう。うん、間違いなく。

あたしは立ち上がりながら、溜め息を吐いた。……知つてゐんなもあたしを大切にしてくれているといつのは。だつて、だからあたしも、みんなを大切に思えたのだから。そうでなきや、あたしは魔族のみんなを好きになんてなつていなかつただろ。……。一番好きなのは、もちろん父上だけど あたしはみんな、大好きだ。魔族のみんなが。

見上げるほどドカいベイクドールを見つめながら、あたしは始終黙り込んでいた。見つめるといつより……睨む、だけれど。しかしベイクドールがそんなことで怯むはずもなく、「ふ」と笑つては……あたしの頭を撫でだした。あたしは田を点にする。

「まつたく、特別ですよ？」 実は先ほど、我が父から連絡が入つたのです

「…………え？」

「ビリヤリ勇者が」の城に到着したとの事で

「……？ そ、そんな…………！」

「ですが、これは姫様に関係ない事なのです。…………いいですか姫様」

ベイクドールは、あたしの頭から…………額に手をさしりした。

「我々は…………いえ、私は、必ずや魔王様、そして姫様を…………フィーリアを守つてみせる。それが私の生きがいで、心に誓つたことだから。私の可愛い妹、これからも…………くだらない人生を歩み、幸せに生きてくれ。私はそのために、今から犠牲となつてこよつ」

「まつ…………！」

「…………おやすみ」

…………そして、あたしは。

ベイクドールの放つ魔法によつて眠りに落ち、気付いたときには部屋にいた。あちこちから乱闘の音が絶えまなく続き、確認しようとしても部屋から出られず……。やつと出られた時には、城にいる魔族が“父上”だけとなつていて。

ベイクドールが言つていた、犠牲といひふ言葉。…………その言葉の意味が、あたしが考へてゐるものと同じなりば……。多分もう、ベイクドールは生きとはいひのだらば。勇者にてダメを刺されそうになつてゐる父上に駆け寄りながら、あたしは心で謝つた。

「こんな妹で、」めん……と。

「父上から離れりぬるおおおおお……。」

ねえ、ベイクドール。

あたしね、言いたいことがいっぱいあるの。あるのにね、出でこないの。ちゃんと田を見て言いたかったことや、恥ずかしくて言えないようなことまで、いっぱいあつたはずなの。……なのに、なんでかな？ 今ね……何故か胸が詰まつて、言葉が見つからなんだ。

……でも、もし生きててくれているならば。あたし、どんなことでも聞つからや。うふ、まずは……そつだなあ。

ベイクドール。

……あたしを、妹にしてください。

あたしの天敵 番外編。

完。

番外編・あたしの天敵（後書き）

妹思いな意地悪大好きお兄ちゃん、ベイクドールでした。

天敵はベイクドールともとれますし、勇者ともとれますね。

次回から第一巻始めます（、・・・、）

十五（龍書號）

第一章です。

深い森を抜けた。抜けた途端に見えたのは、真っ青に広がる
果てしない海と……ガヤガヤと賑わう街。ここが……オールドビリ、
世界最大の港街。まだまだ歩かないと着かない少し高い山の上で突
つ立つたまま、あたしはその賑わつている凄さといつのを痛感した。

……そして何より、ここは母親が住んでいたといつ街。つまりこ
こは……あたしが生まれた地。言い知れない気持ちに胸が暖かくな
り、あたしは自然と真剣な顔になつていた。多分ここに、母や……
本当の父の墓もあるのだろう。

不意に、肩車されているガルが口を開いた。

「すごいねえ！ 僕、ここに来るのは初めてなんだ！ 一回来て
みたかったの」

「あたしも初めてだなあ。噂にはいっぱい聞いていたんだけど」

「ねえ、お父さんは来たことある？」

ガルはあたしの中にいるギルヴェールさんへと問いかけた。途端光に包まれて現れるギルヴェールさんは、肩車をされているガルを見ながら、微笑んで言つた。

「ああ、あるよ。」ほな、母さんが昔花屋として働いていた場所なんだぞ?」

「えつ! そつなんだ!」

「……それより、ガル。姫様に肩車なんかさせて……」

「いいよギルヴェールさん。あたしが無理矢理やつたんだし」

「姫様、何回も言つてますが……呼び捨てで構いませんよ

「でもなあ、なんか年上に呼び捨てつていつのも……」

渋るあたし。だつて、ねえ? そんな呼び捨てだなんて……申し訳なくて呼べないよ。

しかし、そんなあたし達の後ろ……『年上』といつ葉に反応したのか、マリンベールと喧嘩をしていた黄金野郎が、すぐさま言つた。

「そりこり割には、僕にたいしてすく失礼な態度だと思つんだけど？」

「……お前は論外だろ？ が、パツキン」

「？ ぱ、ぱつ……なんだいそれは」

「つえー！ ゴボウつたら知らないの？ つわー、あんたを本当におっさんだと確信してしまつたわ～」

……そして、再び言い合いが始まる一人を無視して、苦笑をしつつギルヴェールさんに「徐々に慣れていきます」と返した。そしたら勇者が「短く、ギルさんとかでいいんじゃないか」というので、あたしはそれに頷く。たしかに、ギルさんだったら愛称みたいで固くないし、なにより長くないので言いやすい。どう？ と首を傾げて問いかけたら、ギルヴェールさん ギルさんは、ニッコリ微笑んで嬉しそうに頷いた。よし、これで気兼ねなく呼べる。

あたしは再び歩き始める勇者達を追いながら、港街オールドビリを見つめた。オールドビリは、あの有名な大海賊の出身地とも言われている……言われているだけで、正確ではないのだけど。ただ、大海賊エーファンの“クレイジーブルーキャット”は、ここから最初まつたというのは確かだ。その証拠に、この街には奴等の海賊

旗がテカデカと広場に飾られている、らしい。すべて集めた情報によるものだ。

少しだけワクワクするあたしの少し前、先程からジットリとした視線を送つてくる勇者をなるべくスルーしながら……あたしは頭の中で様々な計画を立てた。まずエーファンに会つたらサインをねだらうとか、とにかくいろいろ。だつて、ファンだもの。潔く生きる男は人間とか魔族関係なしに、惹かれるものがあるからね。魔族の女性中でも、エーファンとは一度見てみたい人間ベスト一位だつたし。

……ああ、楽しみだ。

「勇者。オールドビリの入口が見えた。せっかくだし武器の新調や魔法の補助アイテムを購入しておこう。そろそろ私の刀やブリエスティル嬢の杖を手直ししておきたい」

元気になつたロックハートが、自分の武器を見つめながらそう言った。ロックハートは、あの日からしばらく寝込んでいたそうだ。無理もない……あんな巨大モンスターの攻撃を食らつて、普通に起きている方がおかしかつたんだから。それを言つとあたしが普通じやないみたいに聞こえるけれど、それもまあ運が良かつただけと言えるだろう。……そう、それを踏まえて、この街に来たからには少し調べたいことがある。

……あたしが使つた、正体不明の強大な魔法。あれは確か、異世

界人だけが扱えるような魔法だったはずだ。異世界人は魔力を必要とせず、あたりにある魔力を使って、魔法を放つ。だからどれだけ使おうが、本人がそう簡単にばてる事はない。現に父上もそれだけは使えなかつた。

だが、あたしは使つた。それは父上よりも魔力が元からあつたし、何より今は父上のぶんの魔力を受け継いでいたから。……それでも簡単に氣絶してしまうほど、魔力の消耗は激しかつたのだけれど。

でも問題はそこじゃない。

何故、あの時あたしは知らずに使つていたのか。そして、いつの間にあの魔法を知つていたのか。……突如舞つたあの花びらは、なんだつたのか。あたしはそれを調べるために、母の住んでいた家を探らねばならない。きっと、何かあるはずだと信じて。

ロックハートの問いに答える勇者をぼんやり見たあたしは、どうやってそれをバレずに実行しようかと策を練つた。……しかしそれに気づいたのか、勇者は少し訝しげにしながら、一言だけ言った。

「ダメだぞ」

「……！？ な、なにが……」

「ヒーファンには会わせない。あいつには、俺とマリンベール、あと……」

「はいはいっ！ 勇者、私もついてくっ！」

「わかつた。あとはジューリー、この三人で行く」

「なんだ、そっか。……えええええ！？ やだよ、あたしも行く！！」

せっかくあの大海賊に会えるというのに、そんな機会を逃せるものか！ あたしは勇者に講義をするが、勇者は絶対に首を縊には振らなかつた。しばらく一緒にいてわかつたのだが、勇者、案外強情だ。しかしそれをわかつていようとも、あたしもあたしでそれは引けなかつた。

しばらく、あたしと勇者の問答が広がる。

「なんであたしがついて行つたらダメなのさーーー！」

「なんでも、だ」

「嫌だ！ あたしだつてエーファンに会いたいーーー！」

「なぜ？」

「そ、それは……。」「へ、好奇心……？」

「……絶対連れていかない」

「うひーと勇者ー、いいじゃない、フイーリアちゃんも連れていくば

「黙つてろマリンベール。いいか、絶対にフイーリイは連れていかないからな」

「俺はそんなジジヤないし、モンスターにやられた時弱くもない」

「まつたくもー、勇者……子供みたいな」と言つてないで連れて
つてあげればいいでしょ？ ほんと、あんたつてばどんだけフイー
リアちゃんが 」

「……あらあ？ この幼馴染の私が、気付かなかつたとでも言つのかしら？ ねー、ロックハートー」

「ふふふ。勇者が動搖するとは、予想は本当にあたっていたようだね」

「なつ、ん……一 カウント一〇では、なくてだな……つまり俺

「ねーってば！ あたしも行きたいー！」

「ちよつと小娘！ アンタが勇者に付いていこうなんて百万年早いのよ！ 勇者のお供はジュエリー様一人で充分なの」

「うつさいこの哀れ女が！！ 勇者何かどうでもいい！ あたしはエーファンにだけ会えれば……」

「……絶対連れていくものか」

「ええええー！？」

…………そうじうじているうちに、あたし達はやつとオールドビリの入口前にやつてきていた。入口とはいえ見張りがいるわけでもないので、誰でもようこそ！ と言わんばかりの感じではあるのだが……。うん、本当に人が多い世界最大の港街なだけはある。人通りが多くて、ここにこるだけで活気がビシビシ伝わってくる。

ついていくのを諦めたあたしは、これも一つのスキだと思うこととした。勇者達がエーファンに会いに行く間、あたし達は買出しや宿取りを頼まれたので、そのスキに調べに行くことができるだろう。勇者達三人が港へ向かっていく背を恨みがましく見つめて、あたしは気を取り直すよつに頬を叩いた。

念の為、ギルさんやガルにはあたしの中にすでに戻つてもらつている。だから心の中で会話が可能になったことで、あたしは気兼ね

なく相談をし始めた。もちろん、ビリヤードから逃げ出すか…
についてだ。

「では、私とプリエステル嬢は武器屋へ。ついでに補助アイテムも購入しておこう。ベルヴァロスクエッドとお姫様は、宿のほうをお願いできるかな」

「年上のお姉さんの命令ならば喜んで」

「ありがとうございます。では、頼むよ」

見事な受け答えで黄金野郎の言葉を流したロックハートは、プリエステルとともに港街の中へと入つていってしまった。

…………つうか、あたしこいつと一緒になのかよ。

「つうか、僕コイツと一緒になのかよ」

……考へてゐることとは同じだつたようだ。黄金野郎はとても不快そつにあたしを見下ろしたあと、ふんつと言つてから一人歩きだした。お、これは逃げれるんじや……。

そつ思つて身を翻そつと思つたのだが、やはりそつまくはいかず。ぐわしつと首を掴まれてしまつたあたしは、気付いたらゆらゆら揺れながら……黄金野郎と街中を奥へと進んでいた。あれ？ テジヤヴ。悪さをする直前で見つかつてしまつた猫の「ぐく、あたしは掴まれたまま無言になる。

黄金野郎が呟く。

「つたぐキミ、今違う方向へ行こうとしただり？ これだから餓鬼は……方向音痴は勘弁してくれよ。僕はそういう面倒なのが一番嫌いなんだ」

「……ちつ」

「ま、餓鬼でよかつたことと言えば……掴みやすくて助かつたことくらいかな」

……なぜだらけ、今とでも、猫のよつに威嚇をしたくなつた。ううむ、やつぱりこいつはあの専属執事に近いものを感じるな。うん、す「ぐく反抗したくなる感じ。唯一違うと言えば、こいつはあの専属

執事のように怖くないとも言つべきか。それは犯行がしやすくて
おつと間違えた、反抗がしやすくて助かる。

あたしは、いつかコイツに驚くような反抗をしてやるひと心に誓
つた。

密かに決めた作戦を今は胸に秘めつつ、あたしはこれからどうしようかと策を練り直した。そして、掘まれたままオールドビリの街並みを眺める。そこらかしこに店が並んでおり、普通の民家が見当たらない……多分見えない奥の方にあるんだとは思うが、それでも見えるところに店ばかりあるせいで本当に“世界最大の港街”と呼ばれるだけはあると、あたしはしみじみ思つてしまつた。

……どのあたりに、母親は住んでいたのであるつか。そうふと思つたとき、ギルさんが心の中で「その金髪坊やに、『このへんで異世界人が住んでいなかつたか』と聞いてみてはどうかな?」といい案を出してくれた。たしかに、聞くだけなら問題ないよね……。

あたしはせつせつ、急せつとしている黄金野郎へと問いかけた。

「ねえパツキン」

「僕はベルヴァロスクエッドだ」

「長い」

「じゅあベル様と呼べ」

「ねえベル坊」

「……キミは僕に喧嘩を売つてゐるのかい？」

「うう。純粋に馬鹿にしてる」

首を絞められた。

「もういい。短くていいから普通にベルと呼べ」

「ねえベル」

「……そういうのは早いね。なんだよ小娘」

「このオールドヒーリにさ、昔、異世界人とか住んでいなかつた?
……ええと、多分この人の金持ちと結婚したと思うんだけど」

たしか、父上はそんなふうに言つていた気がする。

一応真剣に考えてくれているようだ、黄金野郎 改めベルは、少しの間無言になった。……しかし異世界人が珍しいとはいえ、やはりどこに誰と住んでいたかはわからないだろうか。あまりに長いこと黙っていたのでわからないのだと納得したあたしは、小さく溜め息を吐いた。

しかし。

「もしかして……サクラ・キクノウチ、か？ いや、結婚してからはサクラ・クロックアルトに変わったんだったか」

「……サクラ……キクノウチ……？」

「ん？ 違うのかい？ まー、僕もそこまで詳しくはないからねー。そりや、勇者達よりは情報通で通つてはいるけれど」

そういったあと、ベルは“サクラ・キクノウチ”について様々な事を教えてくれた。

サクラといつ名前は、どうやら異世界だけにある木の名前なんだとか。それは暖かい季節になると花が咲き、桃色に色づいてそれはそれは綺麗らしい。そして姓のほうにある、キクノウチの“キク”……これはこの世界にもある菊の花と同じで、彼女は別名“二つ花”と呼ばれていたんだそうな。

そしてそれが、多分……あたしのお母さん。

「いやーしかし、原因不明の病で倒れたって聞いたから、もう生きてなこと思つわ」

「え？」

「知り合いのかはしらんが、会いに行くつもりだつたんんだろ？ 残念だつたな」

あたしはその言葉をぼんやり聞き取り、静かになった。

……原因不明の、病？ でも確か母親は……本当の父親に、殺されたんだじょ？ だとしたら、なんでそんな噂が。

ぐるぐると謎が頭を旋回する中、またもや心の中でギルさんが「それは多分」と言葉を漏らした。あたしは同じく心の中で、聞き返す。

『それは多分、なに？』

『……人間の“見栄”、じゃないかと』

『見栄……？』

『誰がそんなことを言ったのかは私にもわかりません。でも、例え姫様の本当の父親のお母さん つまり姫様のご祖母様ですね。もしその人が流していたと仮定しましょう。この世界ではそれなりにいい家と聞いたし、自分の息子が大事な異世界人を殺しただなんて広まつたら……体裁が悪い。隠した理由としては、充分説明がつかんじやないでしょうか』

あたしは、それに頷いた。

人間はそういう嘘や隠し事の塊だ。その可能性は、たしかに充分ある……。

……ますます向いたくなつた。でもさすがに忍び込むのはまずいから、正面堂々と入りたい。だからと書いて、人間の娘というのも認めたくないから……ああ、八方塞がりとはこのことか。なんて馬鹿なことを考えている暇はない。勇者達が帰つてくる前に、なんとか少しでも情報を集めなければ。ベルに頼んでみようか。「ちょっと街を見てきたいんだけど」と書いて。

しかしどひやら、口に出すともそれが伝わつていたようだ……。

「一人歩きはダメだぞー、小娘」

「……」

「勇者にばれたら僕が怒られるだろー？ 勘弁してくれよ、キミ
は勇者の恐ろしさといつのを全く分かつていない」

「それベルが弱いだけじゃん」

「僕は弱くない！」

「だって、マリンベールとの喧嘩いつも負けてるし」

「それは花を持たせてやつてるんだー！」

……ふ、どうだか。

あたしは見下したように笑つてやつた が、その瞬間地に落と
される。……やっぱりデジャヴだよ、これ。尻がマジで痛いんですけど。最低この人。

「とにかく。一人歩きはダメだ」

「……あ、でもあたしの中にはギルさんやガルがいるし

「……。たしかに」

「少しだけ、ほんのちょっと。ね？ ベル……ベルヴァロスクエード

「頑張つたといひ申し訳ないけど、僕はベルヴァロスクエードだ

「おしい！ 残念賞で散歩してきてもいいと頼つただが

「あー、しつこなあキリだ。最初の頃の無口なびついたんだ

「いいの？」

「ハイハイ。好きにしなよ。ただし、勇者達が帰つてくる前に戻
れよ、じゃないと一度とこんな優しさはないからなー」

勝つた！

あたしは笑顔でガツツポーズをし、手を振りながらその場を去つ
ていった。宿のことはベル一人に任せればいいということだ……よ
し、今のうちに探りぬくしてやろう。まずはどこから探そうか？
……なんて考えといてアレだけど、最初の行き先は決まってるんだ
よ。

商店街で客寄せをしている女人に近づいては、あたしはその田
的の場所……“墓地”はどこにあるかを聞いた。どうやら墓地はこ
こから少し離れた丘の上にあるらしい。まあ、こんな活氣溢れる街

の近くに墓地なんかたてたら、印象が悪くなるしね。

女人にお礼を言つて、あたしは教えられた道を小走りで歩いた。途中花屋があつたので、勇者に少しもらつてお小遣いを使って、墓参り用の花を作つてもう。」

「墓参り用の花ね。そうねえ」

「……あ、サクラつていう花に似た花とかはない？　あと菊の花も入れてほしい」

「サクラ？　なんだいそれ」

「えーと、木に咲く……ピンク色の花びら……だったかな

「ふうん？　見たことないからわからんないけど、これでいいかしらねえ？」

「じゃあそれで、と。」

あたしは頷いて、その花と菊の花を混ぜたものを受け取つた。

金を払つて、再び墓地への道のりに向かう。……初、お墓参りだ。何故だか緊張してしまうな。父上はあたしを最初人間界に連れていく

くのがとても嫌だったから、父上と一緒にダメだったんだよね。だから、母親の墓参りにも来たことがなかつた。

……ていうか、魔族は人間のよう『墓』といつのをつべらないんだよね。墓とは心に刻むものつていう考え方だつたし。でも、墓つていいな。形として残るというのは、こういう時に嬉しいと思つ。だからぶつちやけ、花を買つたのも人間の真似事だからよくわかんないんだよね……。墓に捧げたら、あとは何をすればいいんだろう？ そこがわからない。

うーん、と歩きながら悩むあたし。
そんな時、ガルが言つた。

『お花をあげたらね、お祈りをするんだよ？』

『お祈り？』

『そう。ね、お父さん』

『ああ。私も最初戸惑いましたが、大丈夫ですよ。特別にしなければならないものがあるわけじゃありません』

『あのね、お祈りをするときに、お母さんに聞いたかつた事とか言えばいいんじゃないかな？ 僕ね、お母さんのお墓が出来たときには、いつたんだ。これからお姉ちゃんとお父さんとで、旅に出るつて。心配しないでね。行つてきますお母さん。……つて』

……言いたい事をお祈りしながら、言ひ。

それがお墓参りなのか。なんか報告みたいなことをすればいい、つてことなのかな？ うん、でもそれならあたしにも簡単に出来そうだ。

難しそうでもないことに安心するあたしは、少しだけホッとした。未知のことだから、知らないっていっては本当に怖いよね。あたし、ギルさんやガルがいてよかつたって今すごい実感しちゃつたよ。……そう心で言つたら、二人は嬉しそうに笑つた。

オールドビリ。

母が異世界からやつて來た後、住んだといつ場所。父上とは、ここであったのかな？ どうやつて出会い、仲良くなつたんだろうか。人間と魔族の関係もあるから、きっと最初は大変だつたんだろうな。……母は、どうして父上が好きになつたんだろう。

聞きたいことはいっぱいあるのに、それに答えがないと思うつ……すごく切ない。父上が生きているときに、もっと聞いておけばよかつたのかな。父上も自分から母のことを滅多に話してくれなかつたら、あたし……母親のこと何も知らないよ。

……現に、母親の名前を……ベルから教えてもらつて初めて、知

つたのだし。サクラ・キクノウチ。こういった名前は、その異世界の中でも極めて小さい大陸にしかいない種族らしく、この世界の環境にもっとも対応する人間らしい。だから、異世界人というのはその大陸にしかいない種族　日本人？　だつたかな、それしかいなないと聞いた。しかも日本人は、黒髪黒目。……不思議だ、どうやつたらそう生まれてくるのだろうか？　気になる。

母さん、か。

どんな人だつたんだろう……？　キュディさんのように、暖かく微笑む人なんだろうか。あ、でもたしか父上は「すごい悪戯好きだつたんだ」と言つていたつけ。じゃあ、お転婆な人だつたんだろうか。

本当の父親が母を殺さなければ、あたしは今ごろ……普通に人間として過ごしていたんだろうか。そしたら母と笑顔で過ごし、苦労を知らずにやつてきたのかな。

……でも、父上に出会えないのは嫌だな。

本当の父親が、もし魔族の王である　父上で。母親も“サクラ・キクノウチ”その人だつたら。……あたし、多分とっても幸せだつたんだろうな。所詮夢、だけれど。

「……あ」

ぱーっとしながら歩いていたせいか、あたしはいつの間にか墓地の入口へとやつてきてしまっていた。何百とある墓に刻まれている名前　母のは、じれだらう？　まつたくわからない。

「ここまで来といでなんだけれど、一番重要な事を忘れていたよ。母の墓がどれかわからないのでは、墓参りもしようがない。……なんで今気づいた、あたし。

「こちこち探していたらキリないよなあ……、勇者達が先に帰つてきたらベルに怒られ

「

そう言つて、今日は諦めようかと思つた時だつた。

身を翻そとしたときにふわりと香る、嗅いだことのない花の匂い。一瞬、手にある花だと思って眉をひそめたのだが……違う、こんな臭いではなかつた。もっとこう、上品な……なおかつ暖かそうな、優しさのにじむ香り。

もつ一度、あたしは振り返つた。そして、花の香りを探る。

『姫様、私達も手分けをして探ししましょう』

『うん！ 僕も手伝ひよー！』

そういうて、二人は光に包まれながら現れ、手分けをして探し始めた。

しかしあたしは礼を言うのも忘れて、その花の香りを探り続ける。

やらやら。

視界の端に[写つた氣がする、桃色の花びら。それは“あの時”にも見た花びらだったような氣がしたのだが、あたしが振り返った時にはツユと消えていた。あたしは首を傾げるが、今度は先程の香りが舞つてより一層頭を悩ませる。

自然と、あたしの足はそちらへと向かつていた。

「あ

……そして、あたしは見つける。

とても心待ちにしていた、その人……“サクラ・キクノウチ”、あたしの母親のお墓を。

ガルやギルさんを呼ぶのも忘れたあたしは、ただぼんやりその墓を見つめた。……何故、こんな多くの墓の中から、たった一つを見つけられたのだろう？ その理由は全くわからないけれど、でも、

そんな「じょせう」でもいい。……「」の墓の前に立ると、やつ思ひをさせた。

あたしは手に持った花を、墓の前へと捧げる。サクラの花ではな
いけれど、これで勘弁してね……お母さん。墓の前でカクンと膝を
ついたあたしは、両手を合せ……自然とお祈りをしていた。言いた
いことも何故だか滑らかに出てきて、あたしはとにかく心の中で言
葉を並べた。

あたしは貴女を見て、『お母さん』と呼ぶことはできなかつた
けれど、でもその痛ましい事件があつた上で、あたしは父上と出会
うことができました。それはとても嬉しいことでもあるのだけど、
同時にお母さんがいないという苦しみものし掛りました。

わざと、父上には一番迷惑をかけたでしょ。それでも笑つてあ
たしを抱きしめてくれる父上が、あたしは今でも大好きです。ねえ、
お母さんはどうして父上を好きになつたの？ 答えを聞けないとい
うのが、とても歯がゆいです。

いつかあたしも、好きな人が出来るのでしょうか。それは人間？
魔族？ あたしにもわからないことなのに、お母さんに聞いても
意味がないとは思つけれど……それが人間だったとき、あたしどう
すればいいんでしょうか。

自分のことなのに、あたしは自分を何一つわかりません。お母さ
ん……、お母さんにも、そんなことはありましたか？ やつひとつと
か、お母さんはどうしたんですか？

ああ、答えが返つてこないってわざわざからわかつてゐるのに。なんであたしはこんなに質問をしてしまはんでしょうか。でも、答えなくともいいんです。答えなくとも……いいから、もう一個だけ。

……ねえ、お母さん。

あたしはなぜ、今こんなに泣いているんでしょう。

「う……、う……！」

胸を焼き尽くす、熱い炎。それは心の奥深くから湧き上がり、あたしの頭へとうつり、雲を溢れさせていた。父上がよく飲んでいた人間のお酒　あたしがそのウイスキーをお茶と間違えて飲んだ時のような、焼け付く痛みにとても似ている。鼻がツンとして、うまく呼吸ができない。

……涙を拭う手が潮風でべたついて少し不快だつたけれど、ここが母のいた場所で、あたしの生まれた地だと思うと　それすらも、何故だか懐かしく感じてしまう。あたしはこの地で、母と、父上と三人で……過ごしてみたかった。

その想像はとても幸せで心を満たしてくれるというのに、ただの想像だと思い知ると……余計に心が痛くなる。

あたしは

。

「……フィーリィ？」

ハツとして、涙で濡れた顔のまま……あたしは振り返る。

そこには何故か勇者達がいて、後ろには知らない男と頭巾を被つた少女が立っていた。あたしは混乱して、とりあえず涙を急いで拭う。

……なんていう醜態を晒してしまったんだ、あたし。といつか何故、墓地になんてやつてきやがる。しかしその質問を返す前、勇者に先をこされてしまった。

「何故こんなにこりに？ ロックハート達は……」

「別に。……宿に戻つてる」

「待て。一人で歩くな

「ギルさんやガルがいるつてば」

「それでもだ

……ちくしょう。

勇者にバレてしまつたから、多分ベルがグチグチ言いそうだ。なんと言い訳して乗り切つてやるうか。焦る頭でいろいろと考えていたら、ふと横に誰かが並んだ。あまりにも早かつたために油断していたあたしは、地味にびっくりする。

頭巾の少女だ。あたしをマジマジ見つめながら、「もしかして」と始終呟いてくる。

「おい勇者、このお嬢さんは？」

勇者の後ろにいた男が、そう問いかけてきた。

「……あー、俺の旅の仲間だよ」

「ふうん？ でもたしか、前みたときにはいなかつたよなあ

「そんなことどうでもいいだろ！」

「いいや、よくないなあ。人数を100まかすのはとてもいただけない。……うん、なあそこのお嬢さん？ これから少し手伝って欲しいことがあるんだが」

「おい、エーファン！」

「いいじゃねえか、勇者なら勇者らしくどうしちゃまえで！」

エーファンと呼ばれたその男は、ケラケラ笑いながら呟いた。

……？

エーファン？

あたしは一気に覚醒をし、そのエーファンと呼ばれた男にすぐさま近づいた。そして、手を差し出しながら大声で叫んだ。

「エーファン！？ 大海賊の、クレイジー・ブルーキャットの船長、エーファン！？ ああああ握手してください！！」

「うおおー！？ はえええー！」

「ちつ、しまつた……お前を呼んでしまつたか」

「なんだあ？ もしかして、俺のファンってやつ？」

「はい！」

「そーかそーか！ 元気な奴は大好きだ！ よろしくな……ええ
と」

「フイ、フィーリア・エンジェル・マールヴォロ・オコナムカ！
あの、フィーリイって愛称で呼んでいただければ……！」

「なつがい名前だな。よおし、フィーリイな！ よろしくフィ
ーリイ」

「は、はい！ ハーファン様……！」

な、なんということだろうか！ あたしは今、あの大海賊様に愛
称で呼んでもらっている……だと！？ うわああ、なんて感動的な
んだ。最早勇者の鋭い眼差しなど、アリンコに噛まれた程度にしか
感じない！！ あ、そうだサインももらわなくっちゃ。

しかし、そんな感動を簡単にぶち壊す存在 勇者は、アリンコ
におさまるような男ではなかつた。

突如あたしの真後ろに立つた勇者は、ガツ！ と効果音がつきそ
うな早業で……あたしを肩にかつぎ上げていた。そして、泣く子も

大泣きするような冷たい声で、ボソッと言へ。

「何故ヒーファンにはフイーリイと呼ばれるんだ……？」

「うあつー離せ鷹者ー！ あたしはまだヒーファン様にサインをもらわなくちゃ……」

「ヒーファン、話はまた明日にしよう。今日はとつあえず帰る」

「あーん？ まあ、もつ墓参りしきただけだしなあ。んじや、マコンベールちゃんとジユヒーちゃんは作戦会議のために借りてくば」

「構わない。それじゃあ明日、港で」

……あたしの悲痛な叫び声も、むなしく。鷹者に担がれたままのあたしは、その墓地からあとを去つてしまつた。なぜだ、なぜあたしはいつも荷物のように誰かに担がれてしまうのだ。ていうかギルさん、ガル！ 戻ってきてーーー！

「……で？」

「う、……ヒーファン様……ギルさん……ガル……助けて……え？ なにが？」

「……。何故、あそこにいたんだ？」

今一番触れてほしくない話題というものが、簡単に触れる と
いうか触りまくる勇者に、あたしは舌打ちをした。もう、おそれり
禁止です！

しかしふだけている場合ではない。なんと誤魔化そり……真実は、
なんとなく言いたくない。だって、わざわざ勇者に言ふるような軽
い内容じゃないのだし それになにより、今では涙を見られたこ
ともあつてか、素直に教えるのがしゃくに触る。

つーか、ヒーファン様から引き剥がされて、機嫌がすこぶるナナ
メだしね…… あたしはツーンとそっぽを向いて、ダンマリをきめ
こんだ。

そんなあたしに、勇者は。

「……が。知つてゐるけどな」

「……なんて？」

「いや別に」

「別にもクソもあるかー なんで知つてんのぞー?」

「……前にも言つただろ?」

「え……?」

「企業秘密だ」

あたしは「アラアラする足で、悪者の背中を蹴つた。

「いっ……!」

「ふざけんな勇者! 吐け! !」

「は? 僕は別に気分は悪くない」

「その吐けと違ーう! ! 秘密を吐けつてこと! !」

「ああそうだ、フイーリイ。言い忘れていたが、鼻水が垂れてい
るぞ!」

やつちまたー！

あのエーファン様の前で、あたしは涙だけでなく鼻水という醜態まで晒していたの言うのか！ なんたる恥……もうお嫁にいけない。

……あたしは意氣消失したように、ダラリと力を失つた。

十八（前書き）

お気に入り登録ありがとうございます(*、*、*)

今回ちょっと短めです。

勇者の肩の上に担がれたままのあたしは、しばらくだらしなくバラバラと揺られていた。鼻水の件が今あたしにとって、かなりのダメージを含んでいたからである。

……憧れの、大海賊エーファン。

そんな彼の前できやつときやとしながら、あたしは鼻水を垂らしていたというのだ……そりや普通の乙女なら誰だつて落ち込むよ。しかし勇者はどんな時でもお構いなしなのか、それとも空気が読めていないのか　いや多分後者だけど、とにかく持ち前のマイペースさで一人いろいろと呟いていた。

正確には、あたしに語りかけていた。

「ん……、あの花壇が見えるか？　あればたしかここから遠くにある国の国花である、バラという花なんだ。見た目は美しいが、トゲがあつてかなり危ないんだ」

「……あーそうですか……」

「そういえば……バラが一つ並んだら、崩れてしまうとこいつ噂を

聞いたことがあるな」

「……バラが二つ、つまりバラバラ……ダジャレじやん」

「……………すごいな、

あたしはより一層溜め息を深くさせた。

……「イツはもしかしたら、ナチュラルにあたしのことを馬鹿にしてるのかもしない。あたしの考えすぎだろ？　ああ、自分で言つておいてなんだけど、今のダジャレまじで寒いわ。

「てゆーかあ、そろそろおひしてくださいー」

「断る」

「…………はんえ…………」

「離したらハーファンのじゆくに向かつだね、」

「向いません」。ちょっと散歩に向かって“たまたま”エーファン様に出会つだけですー

「……絶対離さない」

「うう」

そんな会話を続けて、数分だろうか。

ふと気づいたのだが、そういうえば先程から港街全体が慌ただしい
ように感じる。……感じるだけでたしかな理由はないのだが、最初
ここへ足を踏み入れた時のような活気溢れるような雰囲気ではなく、
どこか 焦つているような。

それに気付いたのはあたしだけではなく、もちろん勇者もそれを
敏感に感じ取っていた。勇者は近くで雑談をしていた三人のおばさ
んの元へ近づく。

「すいません」

「はい？ あら、まあ……大きな荷物ね」

「ええ、『イツ悪戯好きなもん』で捕まえてるんですよ。あのそれ
よつ、この騒ぎは？」

てんめー勇者ああ！

嘘ハツタリかましやがつてふざけんなよーーーーーーーーと、叫びたいところではあるのだが。一々チャチャを入れていたら絶対話が進まないと学習しているので、あたしは必死に我慢をしていた。勇者といえば我慢も簡単に覚えられそうだよ。

しかしあま、そんないたしの我慢のおかげか。おばさんは騒ぎの原因とやらを簡単に教えてくれる。

……どうやら、先ほどこのオールドビリに、ヴュラリエル国の兵士達が降り立つたらしい。そのヴュラリエル国の中心にある城こそが、エーファンの最愛の異世界人 サヤコという少女がいた場所なのである。

そう……ここオールドビリは、なによりも大海賊“クレイジーブルーキャット”に近い地。こここの港街の人達にとっては、たしかに少し動搖してしまうことなのだろう。どれだけ直接的な関係がなからうとも、だ。

でもいつたい、ここになにをしにきたのだろうか？ いまさらエーファンを捕まえても意味がないし。それにここオールドビリとヴュラリエルは、それはもう果てしなく遠いと聞く。たしか、普通に陸を通りうとすると……半年も掛かるんじゃなかつたかな？ 船でも一週間はかかるはず。海に住むモンスターなどに邪魔をされるとを危惧すると、それ以上。

……なにか、理由があるとしか思えない。その理由のひとつは、間違いなくエーファンに関わりがあるのでつけど。

自分なりに考えては見るものの、どうも魔界生活の長いあたしには詳しいここまでわからない。これでも勉強したんだけれど。

あたしは勇者をチラ見した。……この謎については、ぶっちゃけ勇者に聞いたほうが早いんだろうとわかっている。だつてさつきからなにか考えてダンマリなんだもの、勇者。きっと、エーファンが勇者を呼んだのも……なにか理由があるんだろう。

あたしはしばらくジッと勇者を見つめていた。その視線に気付いたのか、それとも考えがまとまったのか　勇者は唐突に言葉を紡いだ。

「フイーリイ、宿に戻つて三人を呼んできてくれ。港のほうへ向かうんだ」

「急ぎ？」

「大急ぎだ、すぐにここを離れるぞ。俺はジュエリーとマリンベル、エーファン達とともに先に行つて待つている」

「りょーかい」

やつとおひしててくれたところで一度あたしは伸びをして、持ち前の脚力ですぐさまその場を去った。とりあえず急ぎなりば、詳しい事情は後回し。……今は急いで。

「あつ！ ロックハート！ ！」

宿へ向かう途中、あたしは遠田にロックハートを発見した。エルフなだけあって耳がいいのか、ロックハートはすぐにあたしに気がついた。

あたしはロックハートに事情を説明する。

「詳しいことはわからないけど、勇者から伝言……急いでここから離れるから、港へ来てくれだつて！」

「え？ ……わかった。お姫様はベル、ヴァロスクエッドを頼めるかな。私はブリエステル嬢を連れていこう」

「わかつた！ それじゃああとで……」

あたし達は頷きあつて、すぐさま解散した。

オールドビルの宿は、たしか商店街に入る前にポツポツ並んでい
るといつ。どこの宿をとったかわかりやすいように、窓には毎回赤
い布を垂らしているんだとか。あたしは宿の並ぶ道へ入ると、注意
しながらそれを探す。

……だがしかし、ない。なんということだろう。もしかして見え
にくい貧相な宿にしたわけじゃあるまいな？ でも困らないように
と絶対わかりやすい通りにある宿に泊まると聞いている。

徐々に焦り始めたあたしは、それはもう怪しく見えるほどキヨロ
キヨロあたりを伺つた。迷子と思われたら厄介だ。ここには少々ガ
ラの悪い奴らも群がつているから。

でも、いつだってそういう悪いことは悪いことが重なるものだ。

「ユーッ、お嬢ちゃん？ 迷子なんだろ、お兄さんが助けてや
るぜえ」

あたしは、それを今日実感するのだった。

あたしは深く溜め息を吐いた。それはもう重々しく、相手にもハッキリ聞こえるように。

相手の人数は三人。一人は、あたしといい勝負なくらいチビな少年で、一人は中年のオッサン、もう一人は二十歳前半っぽい青年だ。脅しのつもりなのか、青年の手には鋭利な刃物が握られており、その顔には“今から悪巧みをします”と言わんばかりの表情が浮かべられていた。

あたしは、ますます溜め息を深くする。……こんなどこでモタついてる暇はないのに、もづ。

そんな雰囲気を醸し出すあたしの気配を知つてか知らずか……中年のオッサンは、下品な笑みを浮かべながら 言つた。

「可哀相になあ。是非とも俺達が、助けてやるぜえ

「いいえけつこいつです

あたしは即答する。……が、しかし。今度は青年があたしに向かって、とても偉そうに発言してくれた。

「ハツ。お前みたいな小娘を、この俺様が助けてやるつて言ってるんだぜ？……大人しく言う事聞きやがれよ、面倒な奴だな」

……ええ、そりゃあもつ、きましたとも。カツチーン、とね。

「この野郎絶対焼きつくしてやる……！」と上がりかけた手をなんとか押さえて、あたしは爆発しそうな怒りを押し殺した。怒りで我を忘れるところだったよ、これじゃあ魔族失格だよね。

……いや、人間に戻る努力をしなくちゃいけないから、魔族にこだわつたらダメなんだけど。と、あたしは密かに自問自答を繰り返しながら、今この状況下……どうしようかと悩む。

……ここオールドビリに向かう途中、実は勇者と色々約束事をしたのだ。たとえば、町で被害の広がるような魔法は使わない事、とか。自分が魔族に育てられたと言わない事、とか。本当はまだまだあるのだが、つまりあたしが今言いたいのは……“町で被害の広が

るような魔法は禁止”、ただそれだけなのである。

あたしが使う魔法など、強力で広範囲なものばかりだ。そう言わ
れてしまつては、使える魔法など限られてしまつ。

……だから今、非情に困つてゐるのである。約束を律義に守るな
んて、たしかにアホらしい。しかし、心の隅から隅まで魔族のあ
たしには、“約束”や“捷”という決まり事にめつぽう弱いのだ。
幼き頃から身に染み付いたあたしの教訓……簡単には消せまい。だ
から実際、勇者がないこの場でも約束を破るなんてできなかつた
り。

ああ、なんて残念な性格なんだ……あたし。

自分に対する文句をぶつぶつ喋り、少し鬱になるあたしを見て
は三人は少し訝しげにする。そして、その内の一人……少年が
ハツとしたように気付き、仲間に耳打ちをした。

からうじて聞えたのは、「異世界人」という言葉だけ。……これ
は多分、間違いなく間違えられて、いる？ 余計に面倒なことにな
らなければいいのだけど。

あたしはいやな予感をひしひし受け取りながら、ひたすら悶々と
考えた。どうすれば約束を破らずに、こいつらを蹴散らす事が出来
るのか……と。なるべく……そつ、なるべく。魔法を使わないとい
う方向で。

「 つとお、君達い。よくないなあ、こんな小さい少女を囮んでナンパなんかしちゃー。そんな絶望的にちまつこいお子ちゃんが趣味なのかねえ」

……そんな、悩みにふけつている途中で後ろから聞えた、声。この飄々とした気の抜ける声は まあ、振り返るまでもない。こんな喋り方をする人物なんて、あたしは一人しか知らないじゃないか。

あたしは安堵の溜め息を吐いてから、後ろの人物に向かって文句を吐露した。

「……誰が絶望的だつて？ ベルバニスクエイド」

「ハイ残念。僕はベルヴァロスクエイドだ」

後ろを振り向いて見えた、その神々しい光を放つ男 ベルは。頑張つて言つてみた間違い名前を即答で返してくれた。あたしはそれに苦笑する。

……勇者だけにあきたらず、こいつまでもが良いタイミングでたしを助けに来てくれたようだ。まったく本当に、空気の読める人間だこと。

「まつたくさあ、君はなんなの？ ヴューラリエルの奴等が来て、
ちよほどじい時に絡まれるなんて」

「あれ、なんで知つてんの？」

「言つたろ？ 僕は、勇者一行の中じや情報通だ……って

なるほど。

それはそれは、かなり凄い情報通なんですね。宿についてどうやつ
てわかつたんだ……？ 案外勇者よりも謎なのは、こいつなのがも
しれない。

「さて、ど。君達、今の名前でわかつたと思うんだが……僕
の連れにいつたい何をしてくれちゃつてるわけ？ 場合によつては、
不敬罪にあたるけど」

「あ、ああ……俺達は別に！ な、なあ？」

「あ、ああ……もうひとつ」

「……そう？ じゃあ、この場で打ち首になりたくなかつたら……わざと失せる事だね」

ベルがそう言つた途端、奴等は慌てたよつにその場を走つて去つていつた。……それはもう、巨大モンスターがこの場に現れたかのようないき方で。一人少年が「うわあああ！」なんて叫びながら、走つている。

あたしはそれを見て、呆然。そしてギギギ……と首をすらりし、偉そうにふん反りかえるベルを見て 一言。

「本名は？」

「本名？ ベルヴァロスクエッド・アーチェ・インスペイア・ゴーレド・イクシアチブキッ、だよ」

「……王族？」

「もうだけど？」

「……そお」

「なんで、勇者一行に王族がいるんだよ！？……なんてあたしの心の叫びなどは届かず、ただその辺に浮遊するはめになるわけなのだが。とにかく、ベルが王族だった事については今は無視しよう。急ぐべきは、この状況。

あたしはベルに事情を説明して、すぐさま「こから離れた。向かうのはもちろん港。そこに行けといふ事は……多分、船に乗るのだろう。そして予想が正しければ乗るその船は、大海賊　エーファンの海賊船。胸が高鳴ったのは言つまでもない。

あたしはベルに合わせて走り、港へ向かった。一人で行けばすぐ着くのに、場所から知らないため一人ではいけないもどかしさ。……くうつ！　本気でじれつたい！！

その気持ちが伝わったのだろうか。ベルは鼻で笑つたあと、見下したように言つ。

「ホントお子ちゃまだな」

「身長は関係ない！」

「身長は抜きにしても、だ」

「オッサンが

「オッサン言つな！ 僕はまだ一十九歳だぞー。」

「じやあ中年

「ハグリ……

勝つた……！ なんだからわからないけど、すごく感動してしまつた。やはり、あの父上の専属執事とベルを重ねているからだろうか。ふむ、じつはベルを使って悪口を日々鍛練するのも悪くないな。

口の中にまた笑みを浮かべながら、あたしは勝利の喜びに酔いしれた。

「んの餓鬼……！ ちち、まあいい。僕はこれでも紳士だからね

ー

「へー

「一タムカつくな君はー、まつたく……、おつと そろそろか

一際賑わう港へ出た、あたし達。ベルの後ろをついていく様は、さながら金魚のフンのよつだ。そんな金魚のフンと化したあたしは、ただ目の前に見える船へ向かつて再び走り出す。

目の前に見える、船。それは今まで見たい見たいと思つて来た、あの……！

「く……クレイジー・ブルーキャットの海賊船……！」

あたしは満面の笑みを浮かべながら、その船員に促されてベルとともに海賊船へと乗り込んだ。どうやら話がちゃんと伝わっているようだ。「待つてました！ あなた方で最後です！」「と元気よく言られて、あたしはそれを知る。感動のあまり泣かないように、しつかり我慢しなければ。

と、言いつつ涙腺がゆるゆるなあたし。ベルは凄いウザそうな顔をしてました。

いいんだ別に。

だつて感動してるんだもの……

十九（後書き）

今回も短めでした。

それと更新なんですが、ちょっと私情で忙しいので今年は今日までです（汗）

また来年、ガンガン更新していきますので（^▽^）
それでは皆様よいお年を！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3251z/>

魔王な義父と勇者なアイツ

2011年12月27日23時45分発行